
九月文
KUTSUKI AYA
銀の竜騎士団
薔薇香る夜のウサギの告白
The Silvery Knights of Dragon
角川ビーンズ文庫

銀の竜騎士団

薔薇香る夜のウサギの告白

九月　文

BEANS BUNKO
17395
角川ビーンズ文庫

銀の竜騎士団

薔薇香る夜のウサギの告白

九月　文

17395

角川ビーンズ文庫

CONTENTS

序章
聖女の遺言
7

第1章
〈神の山〉を預かるもの
21

第2章
ウサギの休日
63

第3章
ウサギの正体
109

第4章
夜明けの光
155

第5章
真実の花園
183

終章
遅れてきた求婚者
233

あとがき
248



シエラ=アーシェラータ=ローレンシア

年齢:15

ローレンシアの世継ぎの王女。
ルーの誓約者。

Laurensia Dragon



ルーシェ

年齢:15

黒竜隊　従騎士

シエラが竜騎士団にいる時の
仮の姿。スメラギの従者。



ルー

シエラと誓約している赤竜。
時間限定で成長できる。

Characters

Laurensia Dragon knight



スメラギ

年齢:18

黒竜隊隊長

ルーシェの上官。あだ名が「死神」の最年少隊長。

Laurensia Dragon knight



シリス

年齢:19

竜騎士団団長

シエラの従兄で、空の聖竜の主。

Laurensia Dragon knight



カイト

年齢:16

黒竜隊　従騎士

スメラギの従者で、ローレンシアの貴族出身。

イラスト／明咲トウル

序章

聖女の遺言

入りこんだ風に、胸元の白のレースがやわらかに揺れる。
風が容易に通り抜けられない精緻なレースは、聖殿に奉納されていた糸を使い、いまだ姿を見せない王女のために一針一針大切に編まれたものだ。
それがこの衣装に縫いつけられるまでにどれほどの年月を要したのだろう？
レースだけではない。このアーモンドの花に似た淡いピンクのドレスも、きっととてつもない時間をかけて作られたはずだ。
（――私の十六歳の誕生日のために）
自分の知らないところでひたすらにその日と向き合っていた人がいる。その現実に、軽いはずのドレスがにわかに重みを帯びて感じられたそのとき、
「うん、いいね」
そう告げたのは従兄のシリスだった。
彼はソファーにゆったり凭れながら、ドレスの最後の仕立て直しを調べるために女官がドレスのあちこちを摘む様子を眺めていた。部屋に来てからかれこれ四半時は経っているだろうか。
女官が直す箇所をこと細かに指示するのを邪魔しないよう、シエラはこっそり訊ねた。

「……ねぇ、暇なの？」
「おや、俺の立場で暇だと思う？」
「思わないけどそう見えるの。不思議なことに」
シリスは隊服姿、その胸元には竜騎士団の団長位を表す徽章がある。つまり今の彼は仕事中のはずなのだが、一見、己の私室にいるのかと見紛うばかりのくつろぎっぷりだ。
「無理して抜けてきたんだよ。かわいい従妹の晴れ姿をはやく見たくてね」
いつものようににこやかに告げるシリスに、どこまで本気なんだかとも思ったが、
「よく似合っているよ」
てらいもなくそう言われると、すこしくすぐったかった。
「本当は母様みたく白がいいかなとも思ったんだけど……」
「比べられるよ？」
似合っていると言ったばかりのその口でシリスはばっさり斬り捨てる。あいかわらず容赦がない。
（たしかに母様は楚々とした美人だけど！　私とちがって!!）
「君は顔立ちも体格も似ているし、見劣りはしないよ。でも無理して背伸びしなくていいんじゃないかな。あえてそれを強調するのもいいけど、若さの特権は目いっぱい使っておかないとね」

年相応に見られるのもひとつの手だよ、とシリスは立ち上がる。そして侍女たちが一歩退く間を悠々と近づいてきた。

「でもこの半年でずいぶん身長が伸びた？」

「あ、うん」

竜騎士団で基礎訓練をしているせいか、身長だけでなく手も足も伸びている。

「まさに咲き初めの花って感じだね。――うん、これがいい」

シリスは水を張った銀盥に準備された生花から二本の花を抜く。そしてそれをシエラの銀の髪に添えると、女官たちは、まぁ、と感嘆の息を漏らした。

「ちょうど時季的にも早咲きだし、君にぴったりだ」

やわらかなピンクと黄色の薔薇だ。庭作りが趣味でなければ知らないような品種をシリスが迷いなく告げると、これで花は決まったと女官は生花を下げさせた。

そして「では次は御耳に飾るものを」と言いかけたところに、「ちょっと時間もらっていい？」とシリスは人当たりのいい笑顔を向ける。人払いの合図だ。

女官たちは深々と一礼して部屋を後にする。最後の女官が部屋を出たのを見送ると、シエラはほぅと息をついた。

「やっぱり疲れた？」

「ええ。もう少し袖を出したほうがとか腰回りを詰めたほうがとか、かれこれ一時くらいやっ

ていたのよ？　今のままでも十分なのに」

「まぁまぁ、大切なお姫さまのお披露目だからね。彼女たちの気合いが入るのも無理もないよ」

それは理解しているから休憩時間だとわかっていてもシエラはソファーに腰かける気にはなれなかった。へたに座ってドレスに皺が寄ったりしたら大変だ。

「それで、用事ってなに？」

忙しいシリスが竜騎士団の砦から王宮まで足を運んだからには、なにか理由があるはずだ。

「気にしてると思ってね」

そう言ってシリスが取りだしたのは二つ折りの紙だった。

「それはなに？」

「君のエスコート役の候補者リストだよ」

「決まったの!?」

社交界デビューのエスコート役は、今後の社交界での地位を左右する大事なものだ。もちろん王女の地位は女王の次と決まっているので、この場合に限ってはエスコート役当人の地位を知らしめるものになる。

（仕事だもの。好き嫌いでエスコート役を決められないのはわかっているけれど）

それでもエスコート役が好きな相手である可能性があるのかないのか、それだけでも気持ち

が全然ちがう。
「それにしてもリストって……？」
エスコート役は通常は一人、多くても二人だ。リストにするような数ではない。
「当日までに政局がどう動くかわからないから候補者を何人かね。政治的影響力が大きいから当人にも当日まで内緒なんだけど、見る？」
「……いいの？」
「もちろん。君に隠すことでもないし」
口外は無用だけどね、とシリスに差し出された紙をシエラはおそるおそる開く。
書かれていたのは十名ほどの名前だ。その中に。
（あっ、た……）
黒竜公スメラギの名、それは宰相であり公爵でもある伯父のセルティス、竜騎士団長シリスの次にあった。
書かれているのは貴族社会の序列順、つまりこれがスメラギの王宮での地位になる。
（第三位……竜公は侯爵待遇って聞いていたけれど）
単純に侯爵に準じるなら先に侯爵になった者か年長者が上にくるはずだ。つい数ヶ月前に竜公になったばかり、しかもまだ十八のスメラギの名が上にあるということは竜公は侯爵より上ということだ。

（隊長、大丈夫なの？）

歴代の竜公はほとんどが貴族出身で、竜公の地位に就いても王宮内に実家という後ろ盾があった。けれども異国で生まれたスメラギにはそれがない。

後ろ盾がないということは、宮廷皆が敵に回る可能性もあるということだ。しかも王宮でおとなしくしているならまだしも、スメラギは竜騎士の在り方を変えたいと言っていた。どこにも属さずに改革を為すのはとても困難なことのように思える。

（でも、するのよね……？）

ローレンシアを守りたいというスメラギの想いは強い。

スメラギの上にある伯父とシリスの人となりは身内なのでよくわかっているので、スメラギの下に羅列されている名が敵になるかもしれない者たちだ。

シエラが食い入るように紙に見入っていると、その心の隙をつくようにシリスが言った。

「――あいつと付き合うことにしたって？」

「えっ、ええ!?　ど、どうしてそれを!?」

思わず握りしめてしまい、紙が手の中でくしゃりと音を立てる。

「どうしてって、ラギ君から直接申告を受けたから」

「はい!?」

（なんで言っちゃうの隊長!?）

シリスに情報を与えるなど恰好の遊び材料をみずから献上したようなものだ。しかし、
「周りには内緒でも上司には言っておかないとね。特に君たちは直属の上司部下でもあるわけだから、問題が起きたときに聞いてなかったじゃ済まないし。職場恋愛の基本だよ」
シリスの言がめずらしく真っ当に聞こえて、そういうものなのかとシエラは納得した。
「……異動とか、あるの？」
「結婚したというならともかく付き合うくらいで異動させてたら行く場所なくなる奴もいるよ」
（それってシリス自身のことなんじゃないの？）
その視線から思考を察したか、シリスは苦笑を浮かべる。
「まぁ俺のことはさておき、竜騎士団で職場結婚が多いのはたしかだよ。なにしろ七歳からずっと一緒にいるわけだし、そんなに数も多いわけじゃない。閉ざされた狭い世界だからね。いろいろあるよ」
「え、じゃあ隊長も……？」
（誰かと付き合ったりしていたの？）
その想像にシエラは今更ながらに愕然とした。
しかしシリスが無駄口でこのような話を振るはずがない。
考えたことなかったけれど——いや、まったくないわけではないが、すくなくとも今はそん

な様子は微塵もない。シリスとちがって女性といる姿が想像もできないが、スメラギにも過去にいたのだ――親しくしていた女性が。

（油断、してた……）

意識していなかった過去を仄めかされると気になってしかたがない。

すがるようにシリスを見上げると、「俺が言うと思う？」といたずらめいた目で挑発してきた。

人をからかうことは好きだが、必要のないことは言わない人だ。なんらかの目的がないかぎり口を滑らせることは絶対にない。

（でも隊長がシリスにちゃんと報告してくれたってことは、あれは夢じゃなかったってことよね……？）

あの日以来、進展どころかこれといった話すらもなかったので、密猟者狩りのときの一連の出来事はもしかして幻かなにかかとすら思いはじめていたところだ。

が、同時にそのときのことを思い出してしまい、シエラの顔にかあっと熱が上った。

（あっ、あれは！　隊長が勝手に！　ってそれだけでもなかったけれど……！）

思わず頬を押さえてうつむいたシエラに、シリスは「かわいいなぁ」と頭をなでる。

「……シリスは賛成してくれるの……？」

頬を押さえた手の間から上目づかいに探るが、シリスがふざけている様子はない。



「人の恋路に口を挟むほど野暮じゃないつもりだけど？」
「でも政治的な問題もあるでしょう？」
ルーシェとしての気持ちは定まっているが、シエラとしての務めがあることもわかっている。
「そりゃ君が誰を選んでも大なり小なり波風は立つよ。でも相手はちゃんと人間だし、男だし、問題ないんじゃない？」
（ちゃんと人間だし、って……）
許容範囲が広すぎる。
「男の人なら誰でもいいってわけじゃないでしょう」
「まあね。でも法的には未婚の男性で、直系血族――つまり父や祖父、息子や孫でなくて、血を分けた兄弟でもなければ問題はないよ。つまり君にはお父上も兄弟もいない以上、結婚できない相手は既婚者だけだ。あとはできれば心身共に健康で、それなりに年が釣り合って、竜の加護を受けているのが望ましいかな。その次くらいにローレンシア語が堪能で、学問を修めているか修める素養があるほうがいいけど、ラギ君ならそのあたりはまったく問題ないし、問題ないどころかけっこう優秀だよ、彼」
「異国の生まれというのは？」
「拒絶要件ではないね。もちろん大きな障害にはなるだろうけど」
「可能性は皆無ではないけど、きわめて低いということ？」

シリスが告げていたのは次期大公として迎えるための必要最低限の条件だ。これを満たさなければ検討対象にすらならない。

そして現にシリスはシエラの言葉を否定しなかった。異国民で大公位に就いた者は、ローレンシアの長い歴史の中で誰ひとりいない。先例がない、それだけのことが大きな障壁となる。

シエラは現実の壁の高さにうなだれた。

「最初からあれもダメ、これもダメ、はいこの中から選んでねって言うのは簡単だよ。でもなんのために国が王女の婚約者を決めないと思ってるの」

あくまで竜公は婚約者候補であって婚約者ではない。王女が婚約者を定めるのは王女みずからの意思においてだ。

「一生を国に捧げる代わりに唯一のわがままを聞いてくれる、とか……？」

すると「ちがうよ」とシリスは切り返し、そしていつになく真面目な眼で告げた。

「みずから望んだ相手の子を産んでもらうためだよ」

シエラは目を瞠った。

子を生すのは女王の務め、わかっているがまさか今それを突きつけられるとは思わなかった。

「義務ではなく心から望んだ相手と子を生すようにって、聖女が言い遺したからね。この国で聖女の言葉に逆らえる人はいない」

女性は筋力で男性に劣る。一対一で向き合ったとき女には力で抗う術がない。女を王として

立てる国であるからこそ、夫が女王を屈服させて国政を思いのままに操ることも不可能ではない。だからこそ傍らに立つべき者、身を委ねる相手はみずから決めるよう聖女は言い遺したのだろう。

「だから、周囲は君たちを諫めるなり圧力をかけるなりして全力で翻意を促すだろう。けれどまぁ、あいつも本気みたいだし、素直に折れるような性格でもないし」

（そう……なんだ……）

隊長がちゃんとけじめをつけて、上司であるシリスに報告した。あれは遊びや気まぐれではなかったということだ。

（そしてそのことを教えてもらえたのは私が王女だからよね）

スメラギの過去はわからなかったが、このことだけでもありがたく思わないといけない。

「だけどまだ大きな問題がある」

「問題？」

「あいつは君の正体に気づいていない」

「あ……！」

自分たちの場合、想いが通じたからといってめでたしめでたしというわけではない。

ここからどうしていくか——重要なのはスメラギの過去ではなく、これからの未来だ。

「あいつ自身は大公の最有力候補になってしまったなんて思ってないし、元から大公位なんて

望んでもいなかった」

「そう、よね……」

一貴族の娘と大公位がついてくる王女では、背負う荷の重さがちがいすぎる。

「あの、母様はこのことについてはなんて？」

自分はシリスが請け合ってくれたから竜騎士団に入ることができた。つまり竜騎士団における後見人はシリスで、スメラギから報告を受けたシリスは母である女王の耳にも入れているはずだ。しかし母から咎められた覚えはない。

「陛下は自分の心に従いなさいってさ」

「自分の、心……」

応援するでもなく反対するでもない。結婚相手として議案に上ったなら冷静に女王としての意見を述べるだろう。そして反対意見と戦うのは王女として議場にいる自分自身だ。

厳しい道だと思う。しかしまだ信じられないが、スメラギは王女ではなくルーシェを好きになってくれた。

（――なんの肩書きもない、わたし自身を）

ルーシェの想いを伝えて、スメラギも想いを返してくれた。

せっかく受け止めてもらえた想いを――この恋を、大事にしたい。

（そのためにも、ちゃんと話さないと、ね）

真実を明かす恐怖に胸がとくとくと鳴る。けれどもそれ以上に強い想いがここにある。

（……隊長が、好き）

シエラは心に棲まうそれをたしかめるように、そっとみずからの手を胸に当てた。

第1章

〈神の山〉を預かるもの

衣装合わせの日から数日後。

その日、従者の控室で引き継ぎをしていたルーシェは、射しこむ朝陽に照らされたカイトの面影の異変を見逃さなかった。

「――なんかカイト、やつれてない？」

カイトは「は？」と不審そうな声とともに顔を上げるが、

（あ、やっぱり）

仕事にいっさいの妥協を許さないカイトの顔にめずらしく疲れの色が見える。いつもどおりこざっぱりしているものの、どこか生彩を欠いている。目元の覇気が薄い。

（寝不足かしら？）

打ち合わせがあるからと今日はいつもより一時早く出勤している。もしルーシェがそんな顔で出勤してきたなら、『昨日の疲れを持ち越すなど自己管理がなってない！』と注意されるところだが、カイトは素直に不調を認めた。

「ああ、夜勤明けだからな」

「夜勤？　ってカイト、昨日も普通に出勤していたわよね？」

「ああ。だから日勤から通しで夜勤に入った」
「っていうことは丸一日寝てないの!?」
「そうだが、べつにめずらしいことじゃない。学舎じゃ丸二日の行軍訓練とかもあるしな」
カイトはなんでもないことのように言って、ふたたび書類に目を落とす。
(丸二日の行軍訓練って……三日間寝ないってこと?)
アズィール帝国の第三皇子アシュアと共にエルヴァに赴いたとき、スメラギはほとんど寝ずに案件をさばいていたが、竜騎士団ではめずらしくないことのようだ。
(たしかに、軍隊なんだものね……)
寝る時間だからと敵の攻勢が緩むことはないし、逆に休息を取らせないように間断なく攻め寄せてくるはずだ。そのときに対処できる身体ができていなければ話にならない。
「今日明日と休みを取る代わりに昨日の夜勤を入れたんだ。これから俺は非番に入るが隊長にご迷惑をかけるんじゃないぞ」
「あ、う、うん!」
(そっか、カイトがいないんだものね。——え? ということはまさか隊長とふたりきり!?)
付き合いはじめてから一ケ月あまり、従者として側にいれば執務室に二人きりという状況もたしかにあった。しかしそれはおなじ従者のカイトが所用で席を外していたときだけで、長くても半時くらいだ。

（隊長も隊長としての態度を崩さなかったけど、でも、でも――）

「とはいえ今日の会議は定例だけだし、日常業務はいつものとおりに片付ければ――っておい、ちゃんと聞いているか？」

鋭い声音で問われ、ルーシェははっと我に返る。鼓動が大きく跳ねたが、実はその前から高鳴りっぱなしだ。

（だって隊長とふたりきりって！）

「なんだか顔が赤いが熱でもあるのか？」

「えっ、なんでもないけど!?　すごく元気だし!!」

「そうか？　ならいいんだが……」

そう言いつつカイトにじっと見つめられ、ルーシェはたじろいだ。

「な、なにか？」

「おまえも明日から休みなんだよなと思って」

「う、うん。そうだけど……？」

ルーシェの勤務予定は明日から休みになっている。理由は王宮の夜会で社交界デビューするため。貴族の子女として怪しまれる理由ではないはずだ。

するとカイトはルーシェの肩にちょんと乗るルーをちらと見やって、視線を戻した。

「……いや、おまえも社交界に出るんだろうが、俺も次に会うときもう従騎士じゃないから」

「あ、そっか！　竜騎士になるのね。おめでとう。配属はどこなの？」
「変わらず王都勤務だ。従者の仕事の引き継ぎはおいおいやるが――おまえも頑張れ、な」
最後の一言に引っ掛かりを覚えたが、ふたたび業務の話に戻り、引き継ぎ終えるなりカイトは下番した。
ひとりになった控室で、ルーシェはまぶしい朝陽の中で大きく伸びをする。いつもはあわただしい朝だが、一時早く出勤しただけでずいぶん余裕がある。
（さっきの最後の一言って、おまえも早く騎士になれるように頑張れって意味？　それとも社交界デビューのことかしら？　――まさか王女だって気づかれてないわよね？）
気づくとすれば女王と顔が似ているためだろうが、竜騎士は騎士叙任をもって成人と見なされるので従騎士のカイトはまだ王宮に上がっていない。女王に謁見もしていないし、仮に今回の騎士叙任で女王に近づけたとしてもそのとき顔を上げることは許されない。
（私が聖杖を授けた隊長ですら気づいていないんだもの。カイトが気づくはずないし）
そういえば、告げる前にカイトがルーを見ていたことを思い出す。
カイトは竜を成長させたため竜騎士叙任を受ける。それに対してあいかわらず成長の兆しのないルーを見て、早く成長させろよという意味だったのかもしれない。
（でもルーだって頑張ってるものね？）
見た目は変わらないが、成竜姿になれる時間は確実に長くなっている。

（一歩一歩、大きくなっていこうね）

ルーシェは左肩に視線を落とし、見上げるルーのやわらかな首筋をなでた。

まだ早い時間ながら執務室に向かうと、スメラギはあたり前のように室内にいて、すでに書類を広げていた。

本来なら従者は上官より先に出勤して机や調度を拭いておくのだが、スメラギは朝が早いらしく、出勤は定時でいいと言われている。

「隊長、おはようございます」

ああ、とスメラギに黒の瞳を向けられ、ルーシェはわずかに緊張しながら「今日はカイトがお休みなので、わたしがご予定の調整をさせていただきます」と日程を読み上げた。

「今日は定刻八時に日勤朝礼、その後すみやかに夜勤報告受け、必要に応じて団長報告時間が四半時取ってあります。並行して人事調整会議が十時まで行われていますので、お時間を見て顔を出してください。そして十時から――」

中には難しい専門用語もあったが、カイト手製の資料は徹夜とは思えない几帳面な字が並び、とても読みやすかった。

「――本日のご予定は以上です」

なんとかとちらずに読みあげて、ルーシェはほっと息をつく。王族の仕事柄、書面を読む機会は多いし、その訓練もしている。だが王女として読むときとは発声も発音も間の取り方もちがうのでとまどってしまった。

「なにか留意点などございますか？」

スメラギは再確認のために、手渡された予定表を目で追ってゆく。

スメラギの予定は四半時刻みで、今日にかぎらず一ヶ月以上先まで埋まっている。時々席にいないなとは思っていたが、これほどとは思わなかった。

（でも明日はお休みなのね）

カイトは今日明日と騎士叙任の準備だが、ルーシェも明日からお披露目のための準備だ。そして従者ふたりが休みだからというわけではないだろうが、スメラギも明日は公休日になっている。

――あの、隊長の明日のご予定は？

（なんて訊けない訊けない……！）

スメラギは予定表に目を落として集中している。とても私的な用事を訊ける雰囲気ではない。

（でもわたしたち、お付き合いしてる……のよね？）

この前の衣装合わせから半月ばかり経つが、付き合う報告を受けたとシリスに聞いたきり、スメラギに付き合っているらしい素振りはない。毎日仕事だったせいもあるが、あれはやっぱ

り夢だったのかと思うくらい上司と部下の関係だ。
（叱られるし。怒鳴られるし。そりゃ仕事中にどうこうとか思ってないけど……）
しかしあまりにも今までどおりだと、もしかしてやっぱり忘れてしまったんじゃ？　という思いもよぎる。
「――昼過ぎあたりが要注意だな」
予定表に目を落としたままスメラギがぽつりとつぶやいた。
「え？」
「ここの時間、予定が空いているだろう」
予定表をとん、と叩いたところがたしかに半時ほど空いている。
「あ、はい、ですがここは昼食のお時間で……」
「ここが今日、奴も空いている」
「えっ!?　団長がですか？」
自分の膨大な予定だけでなくシリスの分まで頭に入っているのかと驚いたが、
「奴が人の食事時間を気にするか。そういうところは要注意だ。来ても入れるなよ」
「えっ、でも団長を追い返すわけには！」
「来客対応中でも居留守でもなんでもいい。適当に追い返せ。それも従者の仕事だ」
気になるのはそこだけだとスメラギは予定表を脇机にすべらせ、話は終わったとばかりに先

ほどの資料に視線を落とした。無理な命令にあわてるルーシェなど視界にすら入っていない。
（そんなことを言われても……！　どうすればいいの!?）

スメラギの決裁の下りた書類を次の部署に回すために砦内を駆けまわる。
そんなルーシェが廊下で声を掛けられたのは昼をすぎた頃のことだ。
「ねぇ、ラギ君いる？」
（ほんとに来た！）
ふり返るとそこにいたのはシリスだった。スメラギの勘、おそるべしだ。
「いっ、いらっしゃいません！」
「え？　予定は空いてるはずでしょ？　あいつがふらふらいなくなるとは思えないし、他に行くとこもないよね。昼を一緒に食べにいく相手もいないし」
やっぱり狙ってきている上に、さりげなく友達がいない認定をされている。
「いらっしゃらないことにしてください。お忙しいんで」
今もルーシェが両手で抱えているのは、山積みになった決裁待ちの書類だ。
決裁済みの書類を届けにいくたびに次の書類を渡されるので行きも帰りも手が空かない。その書類にサインをするスメラギの手も当然空いているはずがなく、とっくに昼食時は過ぎてい

るのにまだしばらく食べられそうにない状況だ。
「ああ、居留守？　俺の相手より優先する仕事があるわけ？」
あるわけないよね。そうにこやかに告げて、シリスはルーシェの一歩前に歩み出て黒竜隊長執務室の扉を開けた。そして「どうぞお入りください、お姫様」と扉の前で優雅に一礼してみせる。
両手がふさがっていたので助かったのはたしかだが、開け広げられた扉の向こうにはスメラギの厳しい顔があった。なぜ止めなかったと眇めた目に責められて、ルーシェはすみませんと首を縮こまらせた。
「俺は忙しい」
「うん、聞いたよ」
「おまえとちがって忙しい」
「わかってるって」
そう言いながらもシリスはゆったりとソファーに凭れかかる。嘘か真か、よく遊びにくるシリスが持ち込ませたとかで、この執務室の一番高価な調度はこのソファーだと聞いたことがある。
「俺の直属の部下も忙しい忙しいってよく言うんだよねぇ」
「砦で暇なのはおまえくらいだろう」

「そりゃあね。でも戦時中でもないのに長が忙しくて首が回らないなんて軍隊として最低じゃない？」

「まともなことを言っているようだがおまえが遊んでいる理由にはならないからな。長には長の仕事があるだろう」

「やるときはやるよ。けどこんなところで威厳ひけらかしてもしかたないでしょ。

そういう君こそもう業務の流れを勉強している時期でもないんだし、手放していい案件もあるんじゃないの。君の手足は二本ずつしかなくて、一人でやれることは限られている。君に代わる手足を育てるのが君の一番の仕事だよ」

シリスの口調は軽いままだが、スメラギにも思い当たる節があるらしく口を封じられる形になった。

「そんなわけで忙しい従者の代わりに、暇な俺が直接伝えにきたわけだけど」

それもどうなのと突っこみどころだったが、

「密猟のことだよ」

その一言に室内の温度が一気に下がった。

鋭い光を帯びたスメラギの目がルーシェに外せと告げる。ルーシェは無言で一礼して下がろうとしたが、シリスはふり向きもせず「君もここにいて」と制止した。

団長命令に背くわけにはいかず、ルーシェは書類を置いてすこし離れた椅子に浅く腰かけた。

「俺は密猟に関わらない方がいいんじゃなかったのか」
「なるべくね。でも気になる報告を見つけたから。彼女を貸してって言ったら君、ついてくるでしょ？」
「――こいつを？」
「そう。報告書によるとこの子、グリフォンに乗ったらしいね」
その一言にルーシェははっと息を呑んだ。
シリスが言っているのはラサルスに攫われたときのことではない。誘拐の一件は上の判断で、なかったものとして処理され、報告書は作られていないためだ。
（ということはルーが行方不明になって聖殿に行ったときの……？）
スメラギもそう気づいているだろうに、あえて返答しなかった。
「もちろんあの報告書を表向きにはしないよ。けれど聖獣に乗れる者がいる、その事実が問題なんだ。今まで竜以外の聖獣は人に関わらないというのが不文律で、聖獣の捕獲はもちろん禁止だし、乗っただなんていう記録は一切ない」
スメラギは表情を変えずに、じっとシリスを見つめている。
「そこは君もごまかしたかったんだろうけど、彼女が聖殿に行けた理由がつかなくなるから仕方なくといったところかな。ごめんね、俺の部下が優秀で見逃してやれなくて。でもまぁ、密猟がおおっぴらになったところだから、禁忌にされていただけで本当は乗れたんだという話に

収束しつつあるんだけど」

「……それでこいつをどうするつもりだ」

「今後のことはさておき、たった今、街でグリフォンが暴れているという報告が入ってね」

スメラギとルーシェは目を見開いた。

「最近多いんだ。密猟者の隠れ家をあげているせいか、証拠隠滅で放たれたグリフォンが山に帰れず暴れているみたいでね。そんなわけで彼女を借りたいんだけど、どう？」

てっきり遊びに来たとばかり思っていたが、急を要する事態のため団長みずから話しに来たのだ。

「こいつになにをさせる気だ」

「グリフォンを鎮めてもらいたい」

「――断る。危険だ」

「だからって放っておくわけにはいかないでしょ」

「竜で威嚇して追い払えばいいだろう。いくら野性の勘が鈍っていても敵わないと悟れば逃げる。それにこいつはまだ竜騎士じゃない。著しい危険が伴う任務は断る」

「それがどこかの原っぱで起きているならそうしてるよ。けれど暴れているのは街だ。街人に危害が及ぶようなことがあればグリフォンを殺すことも考えなきゃいけない」

「――！」

ルーシェは思わず身を乗り出した。
（そんな、殺すだなんて……）
それに聖獣殺しは大罪の一つだ。竜殺しのように他の竜がみずから手を下すのではなく、国の法で極刑となる。任務であれば法の適用はないが、禁忌に手を染めることには変わりがない。へたをすれば天空神の加護を失って、竜の加護を失うかもしれない。
「そんな状況なわけだけど、君はどう？」
片隅で話を聞いていたルーシェにシリスが視線を向けると、すかさずスメラギが言葉を挟んだ。
「こいつは俺の部下だ。俺を通せ」
「そのとおり。そして君の部下である限り俺の部下でもあるわけだ」
スメラギをたった一言の正論で追い詰める。いつものシリスならこのような物言いはしない。シリスは面に出さないが一刻を争う事態なのだとルーシェは悟った。
「密猟者狩りをやめれば今後の事件を防げるかもしれない。でも一度は大公殿下が滅ぼしたとはいえ、君も帝国に幻獣隊があったら困るでしょ？」
「おい！」
スメラギが鋭い声音で咎める。スメラギはルーシェが大公の娘であることは知らないが、ルーシェの父が十三年前の夜襲で亡くなったことは知っている。

そしてシリスの言葉もまた、スメラギの意思に反して自分が行くと言っても角が立たないように配慮してくれたものだとわかったが、しかしそれ以上に、根の深い問題だということを思い出させた。

（そう、幻獣隊の殲滅は父様がこの国を守るためにしたことだもの――私が、なんとかしなきゃ）

「わたし、行きます」

ルーシェは立ち上がる。すると戦死した父のことを引き合いに出されてはしかたないと思ったか、スメラギも席を立った。

「……俺も行く」

「だと思った」

――彼女を貸してって言ったら君、ついてくるでしょ？

初めに言ったとおりの結論に、シリスは満足げな笑みを浮かべた。

ルーシェたちが向かった先は、王都を発った行商人が三日めに宿を取る街だった。だが竜の翼では半時だ。

すでに幾頭かの竜が取り巻いていたが、路地を駆け回り、ときに飛翔するグリフォンから街人を守るのが精いっぱいのようだった。

「こんな、ひどい……」

店の立て看板はなぎ倒され、建物に体当たりをしたのかレンガが路地に転がっている。

はるか上空から見ただけでグリフォンが冷静さを失っていることはわかった。動きが野生のものとあきらかにちがう。本来、人に従う生き物ではないところを従わざるを得ないように調教されていたのだ。その檻からは解き放たれたものの、野性の勘を取りもどせないまま荒れ狂っている。

竜騎士は槍を抜いて威嚇するだけでそれ以上の手は出せないまま、聖獣を手に掛けてよいものか判断を待っていた。

そんな彼らは現れた二頭の聖竜に歓喜した。そして街の広場に翼を下ろした青の聖竜、その背にいたのが竜騎士団長シリスだけではないことに驚きを隠せなかった。

相乗りしている娘が黒竜隊長の従者だと知っている者はいないらしく、誰だこれ？　と顔に書いてある。

「できそう？」

「やります」

できるできないではなく、なんとしてもここで鎮めなければこのグリフォンの命はない。

「わたしを降ろしたらこの広場から竜を下がらせてください。グリフォンから見えなくなるように」

もし言った相手がスメラギなら「危険だ」の一言で却下されるところだが、シリスは「了解」と先に地に降り、ルーシェの手を取って青竜から降ろした。そしてふたたび青竜に騎乗し、「離れるよ」とスメラギを促す。

スメラギはその言葉に目を剝いたが、ルーシェがスメラギとその腕の中にいるルーに微笑してみせると、悔しさをにじませながらもシリスの命令に従った。

ルーシェは人気のなくなった広場でひとつ深呼吸する。グリフォンが暴れ、人が地を蹴って逃げ惑ったせいか、吸い込んだ風は埃っぽかった。

（できるかどうかなんて、わからないけど）

グリフォンを奪われ、このような形で放たれてしまったのはローレンシアの過ちで、翼あるものが棲まう〈神の山〉を預かる王家の人間として自分が対処すべきことだ。

竜騎士に追いたてられたグリフォンが広場に姿を現す。

グリフォンは太い脚にしなやかな胴を持つ翼ある獅子だ。立派な金の鬣を風になびかせて大きく見せているが、竜と比べればその大きさは半分もない。だが人よりははるかに大きく、十分に騎乗できる大きさだ。

砂埃の舞う広場にいるのはルーシェひとり、蜘蛛の子を散らして逃げ出したはずの人間がま

だ残っていたことに気づいたグリフォンは牙を剝き、地を這うような咆哮を響かせた。

（――そんなに怯えないで）

しかし逃げ出さないどころかじっと見つめるルーシェの目に気づき、グリフォンもまた凝視する。

蒼と金の視線が重なり、沈黙が訪れる。

ふたりの距離は人が全力で走って十を数えるほど、しかしグリフォンの翼なら一飛びだ。一瞬で距離を詰められその牙が身体を食い破ったなら命はない。

（けれど、そんなことしないわよね？）

竜は与えられた食べ物は口に入れるが、空腹を満たすための狩りはしない。疲れを得ると神の山に入るが、神の山で狩りを行っている様子もない。いずこかで身体を休め、力を取り戻してまた人の前に現れる。おなじようにグリフォンが狩りをしている姿も目撃されたことがないし、自衛のため以外に人を襲うこともない。本来、人とは関わりのない獣だ。

それが山から連れ出されて、人の手で食べ物を与えられて生かされていたのだとしても、それは彼らの持つ本性とはちがう。

「――怖がらないで。なにもしないから」

ささやくように話しかける。人の耳では拾えない距離だが、グリフォンの耳はぴくりと反応した。

（ちゃんと聞こえてる）

ルーシェは両手を後ろに回して、目をそらさずにゆっくりと足を踏み出す。

相手が人間ならなにか隠し持っているのではと警戒される動作だが、翼ある生き物はちがう。後ろにするのは翼をたたんだ状態、手を前に出して前脚のように見せたり手を広げて翼のように見せては逆に威嚇になってしまう。デュラクの世話をしていて学んだことだ。

大丈夫、大丈夫、とルーシェは小さな声で語りかけながら近づく。言葉の意味まで通じているかはわからない。ただ不意打ちではない、つまり敵意はないことを態度で示す。

おなじ速さを保ったまま足を進め、あと数歩というところでグリフォンが口端を持ちあげて牙を見せたが、たじろいで後ろ脚が引きそうになっていたこともまた見逃さなかった。

「大丈夫よ」

そう言って歯を見せることなくルーシェが微笑みかけると、グリフォンの警戒心が和らいだのがわかった。

ルーシェはグリフォンの前脚の届く距離に足を踏み入れて、片手を出して鬣に触れる。嫌がるそぶりはなかったので次は両手で撫でてみた。竜もグリフォンも警戒する相手には首筋を触らせないが、撫でられること自体は嫌いではない。ルーなどみずから首を上げて撫でてとせがんでくるくらいだ。

グリフォンに頬を寄せると、鬣からかすかに異国の香りがした。

（これって……）

ラサルスに連れられた城で焚かれていた香に似ていた。

あの部屋では力が入らず、意識もぼうとした。おなじように小屋に香を焚きしめて、グリフォンの意識を奪っていたのかもしれない。

「ごめんね、もっと早くに放してあげられなくて」

早く神の山の清涼な風を感じさせてあげたい。神の息吹に包まれて過ごせば、また元の暮らしに戻れるはずだ。

「もうこんなことさせないからね」

いい子いい子と撫でながらふさふさとした鬣に頬をうずめると、グリフォンは腰を落とし、されるがままになっていた。

スメラギはその様子を、建物の陰からデュラクに騎乗したまま見つめていた。

グリフォンが襲いかかるようなことがあればすぐさま翔ばせるつもりだった。間に合う距離ではないとわかっていたが、最初の一撃さえ致命傷にならなければ助かる見込みはある。デュラクには騎乗する自分のことは気にせず最速で翔べと命じてあったし、いつでも飛び出せるように気を張っているのが鞍越しに伝わってきた。

だがこちらの心配も知らずにルーシェはグリフォンを恐れる様子もなく、なにか話しかけながら近づいていった。

（なにを言っていたんだ？）

言葉の内容まではわからない。だがルーシェが言葉を発してからは、グリフォンだけでなく攻撃に備えていたはずのデュラクの緊張もまた解けていくのがわかった。まるで聖獣を鎮める呪文でも唱えたかのようだ。

荒れ狂っていたはずのグリフォンは今、身体を地に伏せてルーシェに撫でられるがままになっている。そんな様子を見て嫉妬したのか、幼竜が主に翔んで行こうとするのをスメラギは首根っこを摑んで押さえた。

「やっぱり彼女ならおとなしくできたか」

傍らにいたシリスの一言に引っ掛かりを覚え、「どういうことだ」と訊ねる。

「彼女、竜の面倒を見るのが上手とか思ったことない？」

「……そういえばデュラクもあいつにはおとなしく従うな」

竜の世話は従者がする。指揮杖を預けることで指揮権が譲られたと竜に理解させるのだが、理解はしても渋々従うだけだ。しかし学舎で竜の世話についてしっかり学んできたカイトですら苦労していたものを、学舎にも行かず、他人の竜の面倒など見たこともないはずのルーシェがなんなくやってのけた。

「人を主に持つ竜でさえそうなんだ。野生のグリフォンが人に触れられる、しかも騎乗を許すなんて本当はありえない。それができるならとっくにローレンシアに聖獣騎士団ができているはずだしね」

「聖獣に好かれる――あいつにそういう特殊能力があるということか？」

いま自分の腕に噛みつこうと身をよじらせている赤竜が、主にべったりなついているのは知っている。他の竜がこんなに主を恋しがるのはあまり例がない。しかしそれはルーが幼竜で、授かって以来ずっと幼いままという特殊な育ちだからだと思っていた。

「特殊能力ねぇ……やっぱり血かな」

「血？　リヴェア家の血か？」

リヴェア家は聖女の代からつづく名家だ。神官や巫女を多く輩出する家だと聞いているが政界に顔を出すことがすくないため、それ以上の情報はあまり知られていない。

（竜を祀る神殿に代々仕えているうちにそんな特殊能力を得たということか？　しかしあの落ちつきのないウサギに巫女の適性があるとでも？）

神に仕える慎ましやかな巫女、その姿をルーシェに重ねようとするが想像できない。シリスも「さぁどうだろうね」とはぐらかすだけだった。

「さてと、そろそろ近づいてもいい頃かな」

先ほどまで牙を剝いていたグリフォンは、首筋を撫でるルーシェに喉を鳴らさんばかりにな

っている。

シリスは顔を伏せさせていた青竜の首筋を軽く叩き、身を隠していた民家の陰から己の姿だけルーシェに見えるように体躯を持ち上げさせた。

しかしとても会話のできる距離ではない。腹の底から声を出せば届くだろうが、その気配がグリフォンを刺激するだろう。

どうするものかと眺めていると、シリスは声を出さずに唇の形だけで伝えていた。

――そっちに行ってもいい？

ルーシェが読唇できると聞いたことはないが、簡単な内容だったので察したらしく、片手はグリフォンの首筋を撫でたまま、もう片方の手でなにやら返してきた。

学舎で教わる手旗信号ではない。ただ思いつくままに動作で伝えようとしているようだ。

「下？　伏せる？　近づいていい？　……匍匐前進してこいということか？」

するとシリスは「ちがうよ」と苦笑し、

「槍と竜をここに置いていくなら近づいてもいいってさ」

あのめちゃくちゃな動作をどう理解すればそうなるのか、しかしシリスの解釈の方が真っ当に思えたのでスメラギは手にしていた黒槍をデュラクの身体に戻した。そしてもう一方の手で摑んでいた赤竜をどうしたものかと思案する。

赤竜は首根っこを摑む自分の手から逃れようと必死に身をよじらせている。この様子では手

放した瞬間にルーシェに向かって翔んでいくのはまちがいない。
（さすがにグリフォンもこんなちびこいの相手に警戒しないとは思うが……）
逆にふくふくと肥えて丸呑みにしがいがありそうな姿に刺激されて、野生の本能を呼び起こしかねない。グリフォンが幼竜を襲うと聞いたことはないが、万が一そうなってはルーシェの命に関わる。
スメラギは「面倒を見ておけ」とつまんだままの幼竜をデュラクの口の前に出すと、デュラクは器用に幼竜の首筋をくわえてみせた。まるで子猫を運ぶ親猫だ。
これなら大丈夫だろうとスメラギはデュラクを降り、先に足を進めていたシリスを追った。

（あ、ちゃんと槍も置いてきてくれた……）
どう伝えたものかと戸惑いながら出した身振りだったが、シリスがちゃんと理解してくれたことにルーシェは安堵の息をついた。
シリスをはじめ竜から降りた竜騎士たちが近寄ってくるのをグリフォンは半眼で見ていた。ルーシェはそんなグリフォンを撫でつづけ、手のひらから伝わる鼓動からグリフォンの感情を読みとる。
人の足で十歩ほどのところでグリフォンがぴくりと反応し、ルーシェはシリスにこれ以上近

づかないようにと手のひらで制止した。シリスも意図を汲んでそれ以上近づこうとはしなかった。この距離なら声を張らずとも十分会話ができる。

「その子、落ちついた？」

「はい。……なんだかこの子、香の匂いがするんです」

「ああ、やっぱり密猟者に捕らえられていたんだろうね」

どういう生活を強いられていたか、それを思うと胸がつきんと痛み、撫でる手に力が籠った。

「その子、落ちついているようなら渡してくれるかな？　砦に連れて帰るから」

「砦？　……山ではなく？」

たしかに神の山には竜騎士団の砦がある。だがシリスの言葉は山に帰すという意図ではないように感じた。

「人に飼われていたグリフォンだ。研究しがいがあると思わない？」

思わぬ言葉に、ルーシェの心が撥ねた。

（研究、って……捕獲するつもり!?）

その動揺が手のひらを介して伝わってしまった。グリフォンはむくりと身を起こし、シリスたちに向かって牙を見せる。

グリフォンの気が荒ぶったのを見て取り、竜騎士たちはシリスを守るようにとり囲んだ。その手は腰の剣の柄に掛けられている。



「ちがうの！　その人は敵じゃなくて……！」

ルーシェは鬣を摑んで必死に訴えるが、グリフォンの眼はもう自分に向いていない。民家のむこうにはシリスの青竜も控えている。近づかないように命令されているのだろうが、グリフォンが飛びかかれば命令を無視してでも主を守ろうとするだろう。

（ああもうダメ……！）

「逃げて!!」

ルーシェはグリフォンの首筋を力いっぱい叩くとグリフォンは弾かれたように天に駆けあがった。そしてそのまま青い空の彼方へと飛び去る。

その方角は北――神の山のある方向だ。このままっすぐに神の山に帰ってくれればいいと、ルーシェはその姿が見えなくなるまで見送った。

「……おやまぁ」

そのふざけた声にルーシェは視線を地上に戻す――と、いつの間にか竜騎士の抜いた剣先に取り囲まれていたのは自分だった。グリフォンに向けられていたはずの警戒の対象が自分に代わっている。

（どうして……あ！）

シリスがグリフォンを渡すように告げたのに対して自分は逃げるように命じた。自分がしたことは上官命令違反だ。しかも竜騎士団において団長命令に優先するものはなく、言い訳の余

地がない。
　シリスの傍らに立つスメラギは剣こそ抜いていないが、ここは逆らわずにおとなしく従っておけと目で伝えてくる。
（――でも、ここは退けない）
　ルーシェはぐっと拳を握りしめると、自分を囲む剣の向こうのシリスを見つめた。
「……研究ってどういうことですか」
「そのままの意味だよ。幻獣は人に従わない、このローレンシアにおいてそれが大前提だった。しかしその前提が帝国に崩された以上、こちらも方策を考えなければいけない。それはわかるね？」
「方策というのは、帝国とおなじようにグリフォンを飼い慣らして軍事利用するということですか」
「それが可能かどうかを研究するんだよ。荒ぶるグリフォンを鎮める君という存在もいるわけだし、いい研究成果が出ると思わない？」
（――!!）
　その一言に全身が強張った。
　ルーシェはきっ、とシリスを睨みつけると、低く、努めて静かな声で告げた。
「――それは天の意思に背くことです」

巫女の託宣のように厳かな声音。その響きと内容に竜騎士たちに動揺が走った。

「ローレンシアは竜に嘉されし国。竜が戦の道具ではないことは、竜騎士団が軍務省ではなく聖王庁に属することからもあきらかです」

空軍の有用性から竜騎士団はいまやローレンシアの軍の中核だと思われている。だが竜騎士団は本来、ローレンシアが竜の加護を受けていることを示すための象徴にすぎなかった。騎士団という形を取っているのは、『ローレンシアを侵すものは竜を敵にすることを覚悟せよ』という示威にすぎない。

しかしローレンシアの長い歴史の中で実際に幾度かの侵略戦争を経験し、撃退するたびに竜騎士団の名声は高まっていった。現在となっては軍属でもないのに軍の中核とみなされている。

だがそれは本来の竜騎士団の存在意義に反するものだ。竜騎士団は天空神の加護を享け、ローレンシアを守りし者。そして竜をはじめ神の山に棲まう聖獣はすべて天空神の御遣いだ。

（その聖獣であるグリフォンを研究ですって？）

軍事力で勝るアズィール帝国がグリフォンの翼を得たからは、こちらもなんらかの手を打たなければいけないことはわかる。そして帝国とおなじようにグリフォンを飼い慣らすことはたしかに有用だろう。しかし帝国とおなじように香や薬でグリフォンの意識を奪って従わせるのは、天空神の加護を失いかねない所業だ。

「聖獣に関することはこの国の根幹に関わる大きな問題です。グリフォンを捕らえるならば、

聖王庁ならびに御前会議に諮ってからにしてください」

その一言にさらに動揺が広がった。こちらに向けられた剣先にも戸惑いが見える。

ルーシェが告げた内容は、大祭司と女王の前でおなじことを言えるものなら言ってみろとケンカを売ったも同然だ。そしてもし御前会議に諮られたなら自分は王女として断固反対する。会議は紛糾することだろう。天空神の下に生きるローレンシアにとって、聖獣に関することはきわめて繊細な問題だ。

薬を不意に断たれ、本来の気性を見失って暴れ狂っていたグリフォン。それを実際に目の当たりにして、おなじ薬を自分の手で与えることなどできるはずがない。

ルーシェは絶対に退けないと見据えていると、「はいはい、まぁそういうことならしかたないね」とシリスは軽い口調で返してきた。

「たしかに天空神のお怒りに触れて恩寵を失うわけにはいかないからね。神に仕えるリヴェア家の意見として聞いておくよ」

リヴェア家の名に免じて命令違反を不問に付す――その意図を察した竜騎士たちはほっとして剣を鞘に収めた。ルーシェもまた軽く息を吐く。

（けれどシリスのことだもの、きっとなにかを企んでいるはず）

「ほら、砦に帰るよ」

いつもの口調で促すシリスを、ルーシェは厳しい表情で睨みつけた。

ふたたびシリスの聖竜に乗せてもらって王都の砦に戻ると、「お疲れさん」とシリスはいつもの口調で告げて団長室へと帰っていった。部下の前でケンカをふっかけられたというのに、なんのわだかまりもない様子だ。

いまは一従者にすぎないので、砦まで送ってもらった礼を述べて敬礼して見送ったものの、沸き起こった疑念は晴れなかった。

（――シリスは一体なにを考えているの？）

もやもやとした想いを抱えたままルーシェが黒竜隊長執務室に向かうと、扉を開けるなりなにかがルーシェの胸に飛び込んできた。

「ルー？」

そういえば街への往復とグリフォンを相手にしている間、ずっとスメラギがルーの面倒を見ていてくれたのだ。

離れていたのは二時ばかり、しかもずっと視界の範囲にいたというのにルーは淋しかったと眼で訴えてくる。赤竜隊長グレンほどにはスメラギになつかなかったところを見ると、あまり可愛がってもらえなかったらしい。

「この子を預かっていただいてありがとうございます」
ルーシェはルーを抱いて礼を述べたが、「ああ」と告げるスメラギの返答は硬かった。
（なんだか機嫌が良くない？　……あ、また勝手をしちゃったから？）
目の前で部下が団長命令に背き、抗命罪に問われようとしていたのだ。冷静でいられる事態ではない。
グリフォンのことは王女として絶対に退けなかった。けれどもそれは竜騎士見習いの分を越えることだ。シリスの一言で抗命罪は不問になったものの、捕らえられたなら上司であるスメラギにも被害が及びかねないことだった。
「……ご迷惑をおかけして申し訳ありません」
「いや、いい。正直驚いたけどな。だがたしかにこれは女王陛下と大祭司の下で諮られるべき問題だ。密猟発覚以来グリフォンの対処について紛糾していたが、今回の件で議題を王宮に上げることが決定した。竜騎士団の内だけで対処されずに済んでよかったと思う」
「え、研究の話はすでに竜騎士団では出ていたんですか？」
「帝国がグリフォンの利用に成功している以上、こちらも対策を練る必要がある。まぁ事が聖獣に関わることだからな、今は慎重派のほうが多いが、いざ帝国と交戦となれば推進派の方が優勢になっただろうな」
（あ……だから？）

やっとこのとき、シリスがグリフォンを引き渡せと言った理由がルーシェの頭の中でつながった。

密猟が表沙汰になって以来、グリフォンを捕獲して軍事利用が可能かどうかを検討すべきとの意見が上がっていた。シリスのことだ、言われるまでもなく利用の可能性には気づいていただろう。帝国が新たな武器を手に入れたなら対抗してこちらも手に入れる、それはあたり前のことだがローレンシアと帝国では事情がちがう。ローレンシアにおいて聖獣を捕らえることは、信仰上の理由で禁忌とされている。天空神の加護の下に存在する国である以上、その禁を破ることはできない。

それでも国を守るために軍事利用は必要だという推進派と、禁忌を侵すべきでないとする慎重派。それらが対立する中で、天空神に仕える家系であるリヴェア家の娘に暴れたグリフォンを鎮めさせる。

(そして天空神の意に反するとグリフォンの引き渡しを拒絶させて、その議論を御前会議に持ち上がらせたなら……?)

女王の裁定はこの国では絶対だ。シリス自身が結論を下せばいずれかの勢力に肩入れすることになるが、結論を出すのが女王ならば、上が決めたことだからとどちらの意見にも寄ることなく方向性を定めることができる。

グリフォンを渡せと言っておきながらシリスがあまりにあっさり引いたのは、あの場で自分

に言って欲しかった言葉をすんなりと得られたからではないだろうか。
（まさかわたし、まただしに使われた……!?）
シリスの思惑にはまったルーシェはがくりと首を落とした。
この件は御前会議に諮る――自分の望みどおりの結果を得られたというのに、なんとなくシリスに負けた気がする。
（いいけどね、だしでもなんでも……）
「あの、隊長はグリフォンを軍事利用するというのをどう思われます……？」
スメラギが御前会議に出るのはまだ先だが、聖竜の主であるスメラギの意見は無視できない。スメラギは竜を授かった者の皆兵制を主張している。それならばグリフォンも使えるなら使うという考えかもしれない。
ルーシェは緊張しながらスメラギの言葉を待った。
「俺か？　帝国の脅威が増している今、使える翼があるなら欲しい。だが帝国の方法で無理やり従えるのはこの国のあり方を根幹から歪めることになりかねない。竜騎士だけで国を守れるならそれに越したことはないが、国を守りきれなくてはただの理想論で終わるからな。その均衡が問題だ」
いずれは必要かもしれない、だがいたずらには研究材料にしないということだ。
その見解にルーシェはほっと息をついた。

「だがさっきといい皇子の神託のときといい、おまえは聖獣に関することははっきりものを言うんだな」

「あっ、それは……！」

王族として天空神の教えについては幼いころから叩きこまれているし、竜と誓約した聖女の末裔としてもっとも侵されてはいけない領域だ。だから聖獣に関しては頑として主張するが、一貴族の娘としての分は越えていたかもしれない。

「俺も神殿育ちだから創世神話は毎日のように教えられたし、竜騎士団でも叩きこまれた。けれど学舎を出ていないおまえが言うとは思わなかった。……やっぱり育ちなんだろうな」

「え？」

「おまえは巫女らしくないと思っていたが、やはり家でそういう教育を受けてきたのか？」

（――――!!）

その言葉に不意に鼓動が跳ねた。

鼓動はそのまま収まる気配はなく、とくとくといつもより速い脈を刻みつづける。

（いまなら、言える？）

――自分はリヴェア家の娘ではなく、本当は王女なのだと。

聖女の末裔として、この〈神の山〉を守る者として育てられてきたのだと――

スメラギがあまりに信じてくれそうにないので、誕生日の前に王宮に呼び出して、シリスに

も臨席してもらって、王女の恰好で今度こそちゃんと話そうと思っていた。

（それがこんな機会が訪れるなんて）

傾いた夕陽に部屋全体が赤みを帯びる中、ルーシェはじっとスメラギの黒の瞳を見つめる。

いま、この執務室に自分とスメラギ以外誰もいない。カイトもいない。誰かが入ってくる気配もない。

心臓の鼓動がさらに速くなり、力強く流れる脈を感じる。胸の中にいたルーが、不安そうに見上げる。

言わなきゃと口を開きかけたが喉が締めつけられる。喉が貼りついたように痛んで声が出ない。

ちゃんと言わなきゃ。そうわかっているのに気持ちだけが先走る。

――でも、言ったらどうなるの？

耳の奥の囁きにルーシェははっと我に返った。高ぶる感情に冷水を浴びせられたような気がした。

もしここで伝えて、ちゃんと伝わって、隊長が王女としてしか見てくれなくなったら。

（ルーシェはどこに行ってしまうの……？）

口を開きかけたまま止まったルーシェをスメラギは凝視していたが、やがて、

「――いや、いい」

と視線を逸らした。

「……え？」

「無理に答えることじゃない。おまえにも事情があるだろう。訊かれたくないことだったら悪かったな」

スメラギはどう理解したものか、あっさり話題を取り下げて報告書に視線を落とした。

ルーシェは息をつき、手のひらを握りしめた。冷たい汗がにじんでいる。きっとルーを抱いているもう一方の手もおなじ状態になっているはずだ。

ルーはもそもそと隊服をよじのぼり左肩の定位置に収まって、大丈夫？　と顔を覗きこんでくる。ルーシェは自身の心を宥めるようにルーの頭を撫でた。

「そろそろ定時だぞ」

「あ、はい。でもまだお仕事が……」

グリフォンの一件でスメラギの午後の予定を潰してしまった。スメラギの仕事のめどが立たないのに、従者である自分が先に帰るわけにはいかない。

「俺の仕事に付きあっていたら何時になるかわからんぞ。明日から休みだろう。夜会の準備で忙しいんじゃないのか」

「それはそう、ですけど……」
明日は衣装や手順の最終確認、明後日が聖殿での神事で、その翌日は十六歳の誕生日だ。聖殿での神事には竜公であるスメラギも出席するので、すくなくともその前には身分を明かしておかなければいけない。
（ということは、執務室で隊長を見るのはこれで最後になるかもしれないってこと……？）
母は王族だと知れていながら竜騎士団にいたという。竜を授かっているのだから竜騎士としての資格はあるし、騎士団にいてもおかしくはないが。
（けれども、そのときはもうルーシェじゃない……）
うつむいたルーシェに不審に思ったスメラギが報告書から視線を上げた。
「なにかやり残したことがあるならカイトに伝えておくが」
「いえ、それはないですけれど……」
なんだか去りがたく、しかし事情を話すこともできない以上、執務室に残っている理由も見つからない。
「では失礼します……」
力なく告げてルーシェが踵を返す。そのとき不意に後ろ手を摑まれた。
（え？）
ふり返ったときには、指の甲に口づけられていた。

「――――!! な、な……っ!?」

あわてて後ずさると踵が絨毯に引っかかって後ろによろめいた。

異常を察したルーがあわてて肩から飛び立つ。手を取られていたルーシェはその場にへたりこむ形になった。

「……おい」

スメラギは手を引いて立ち上がらせようとするが、驚きのあまり腰を上げられない。

スメラギは「仕方ないな」と息をつくと、膝の下に手を入れて抱きあげ、執務机の上に座らせた。机に触れる腿からは夕陽の熱を含んだやわらかな木の感触が伝わってくる。

「机には座っちゃだめって……」

「こっちのほうが話しやすい」

スメラギは最後まで聞かず、覆いかぶさるように両脇に手をついた。

「こうしておかないとどこに行くかわからないしな」

触れないまでもあまりの近さに、いったん収まったはずの鼓動がまた早鐘を打ちはじめる。

「にっ、逃げたりしませんって！」

「逃げなくても先程みたいになにをやらかすかわからないだろう」

(やっぱりさっきのこと怒ってる――!?)

「さっきはもういいって言ったじゃないですか！」



「上司としてはな。だが私人としては別だ」
（なにそれ!?　上司としては許しても付き合っている相手としては別ってこと!?）
「そっ、それにまだ仕事中ですよ!?」
「おまえの仕事はいま終わっただろう？」
（たしかに終わったけど！　でもここ、執務室だし……!!）
至近距離からじっと見つめられて逃げ場がない。いや逃げたいわけではないのだが、なぜかわからないが心の一部が裸足で逃げ出したがっているのもたしかだ。
触れられているわけでもないのにどきどきする。普段座ったりできない場所だからなおさらだ。もはや緊張なのか恥ずかしさなのかもわからない。
（誰か来たりしたらどうするの!?）
しかしスメラギは頓着する様子もなく顔を寄せてきて、ルーシェがその場で小さくなっていると結い上げている銀灰色の髪を一房手に取った。
「――この髪、いつもふわふわ揺れているが神経でも通っているのか？」
「か、通ってないですよ！　それにいつもって、いつも見てたんですか!?」
するとスメラギはなんでもないことのように即答した。
「目の前でふわふわされて気にならないはずがないだろう」
（見てる素振りなんて全然なかったくせに～～～～!!）

あらためてめずらしいものでも見るようにスメラギは銀灰色の髪を見つめていたが、やがて髪に口づけを落とし、
「あんまり勝手に跳ねまわるな」
わかったな？　とルーシェの顔を覗きこんでくる。
（ううう、完全にウサ扱い……）
ウサギじゃないのにと思ったが、至近距離から見つめられてルーシェは思わずこくんとうなずいていた。
「……ごめんなさい」
するとスメラギは、よしと言うように頭の上に手のひらを乗せる。そして二、三度撫でると、また横髪に指をすべらせた。
よくシリスに触れられているはずなのに、スメラギの優しい手の感覚が心地よく、いつもとちがってどこかくすぐったくもある。
（――――ってやっぱり神経通ってる!?）
「明日はなにか用事でもあるのか」
「え？　あ、夜会の衣装合わせとか打ち合わせとか……」
「何時からだ」
「昼過ぎからですけど」

「そうか。じゃあ明日は朝から付き合え」
「え？　明日は隊長もお休みですよね？　お休みの日にお仕事されるんですか？」
すると一瞬、スメラギの思考が止まったのが目の動きでわかった。
（――え、ちがうの？）
「……ったく、なんでこんな状況で休日出勤に誘うんだ」
（あっ、そっそうか！）
グリフォンの一件のせいで仕事が終わらなかったので、代わりに明日やるから朝から出てこいという意味かと思った。
「個人的な誘いだ。命令じゃない。嫌なら断ってもいいぞ」
スメラギはそう言うものの、断れば理由を問いただす眼だ。
（それってやっぱりもしかしてデっ、デート……!?）
ルーシェは現状を把握するのがやっとの中、黒の瞳でじっと見つめられ、
「い、行きます……」
うつむいて、消え入りそうな声でそう答えるのが精いっぱいだった。

第2章　ウサギの休日

翌朝、隊舎の私室のベッドいっぱいに衣装を広げたルーシェは、姿見の前で格闘していた。

（服！　服！　いったいなにを着て行けばいいの～～～!?）

いろいろ準備があるからといつもの出勤時間よりかなり早起きしたのだが、王宮での用事に予想外に時間がかかってしまった。

今日の服だって昨日の夜遅くまでかけて選んでおいたのに、燭台の灯りと太陽の下では色合いがちがって見えて、やっぱり他の色がいいかともう一枚引っ張りだしたら最後、ああでもないこうでもないと迷いはじめてしまった。

その結果が今のベッドの上のありさまだ。

（隊長はどんなのが好みなの!?）

執務室でほぼ毎日のように顔を合わせていたのに、私服で会うのは今日が初めてだ。スメラギの私生活を思い浮かべてみたものの、そもそも隊舎で生活している姿すら想像できない。ずっと執務室に住みついているのではないかと思ったほどだ。

（たしかに執務室の隣の部屋で仮眠だって取れるし、もしかして本当に住んでたりするのかしら……）

そんなことを考えているうちに待ち合わせ時間の半時前の鐘が鳴り、

（いいかげん決めないと……！）

ルーシェはそのとき目に付いた服に手を伸ばした。

白地に紅を一滴垂らして染めたような淡いピンク色のワンピース、決め手は夜会のドレスの色に似ているということだ。おそらくこれが自分に似合う色なのだろう。

着てみるとフリルのついた裾は膝丈ほどで、十分腿が隠れる長さだが、デュラクに乗ることも考えて念のために隊服用の下着も穿いておく。靴は軍靴より短めの膝下の編みブーツを合わせてみると、それなりにまとまった。

（次は髪！）

せっかく私服なんだし髪を下ろし気味に結ってみようかと鏡の前であれこれ試してみたが、髪を下ろすといつもよりすこし大人っぽく、そしてどうしてもシエラに見えてしまう。

（……今日はルーシェだし！）

結局いつもの髪型に決まり、リボンケースから服に合わせたリボンを取り出して結い上げる。

ルーシェが着替えている間、ルーはおとなしくクッションの上で丸まって、ちらちらとこちらの様子を覗いながらも無関心な振りを装っていた。前回エルヴァで私服に着替えたときに一緒に連れていかなかったせいだろう。

「ルー、おいで」

そう一声かけると、ルーは目を輝かせて翔んできた。
肩に乗ったルーにおそろいのリボンを結び、化粧を整えて編み籠のバスケットを持って隊舎を出ると、もう待ち合わせ時間の鐘が鳴りはじめていた。
出勤するいつもの方向とは逆、竜騎士団の砦に背を向けてルーシェは中庭を駆ける。そして街側の宿舎の門を飛び出すと、スメラギはデュラクの鞍を付けながら待っていた。
（やっぱり私服……！）
思わず立ち止まって見入っていると、ふり返ったスメラギに不審な目を向けられた。
「……なにを見ている」
「おっ、おはようございます！　今日は隊服じゃないんですね！」
「なんで非番の日に隊服なんだ。隊服しか持ってないとでも思ったか？」
「い、いえ！　ですが私服姿を拝見するのは初めてなので！」
スメラギはやはり黒が基調で、シャツの上に首元に毛皮のついた皮地の上着を羽織っていた。その素材は着やすさよりも機動性や防御性を優先させたもののようで、このまま旅にも出かけられそうだ。
どこか粗雑で、かっちりしている隊服のときよりも若く見える。しかし意匠はしっかりしてサイズもぴったり合っていて、既製品でないことがわかった。
（あ、なんか意外）

まじまじと見つめるルーシェに、まだなにかあるのか、とスメラギが目で問いかける。
「あ、いえ、あんまり着るものに頓着されないかと思っていたので」
隊服はもちろん採寸して作られているが、正装でもなんでもない私服まで採寸して作らせるのは貴族くらいなものだ。
「ああ、これか。あいつがお忍び用の服を作るからって仕立て屋を呼んだときについでに採寸されてな」
発注したおぼえもないのに、気がつけば年に何着かシリスが持ってくるようになったらしい。さすがシリスが愛用している仕立て屋だ。体格だけでなく人となりもちゃんと見て、よく似合っている。
「そういうおまえこそ、なんで今日までウサギなんだ。勤務じゃないから結わなくてもいいんだぞ」
「そっ、それは隊長に見分けてもらえないと困りますので！」
「……は？」
見間違えるわけがないだろう？　と呆れた目を向けられたものの、スメラギには前科がある——というよりスメラギが替え玉だと信じている王女姿を思い出してほしくなかっただけだ。
（だって今日はルーシェだし！）
「でも今日は私用なのでリボンを大きめにしてみました！　ルーもおそろいです！」

ルーを抱き上げて見せてみると、スメラギは冷ややかな眼で見やった。
「……それも連れてきたのか」
「え、まずかったですか？」
（隊長もルーが苦手なのかしら？）
「今日はちゃんとおとなしく肩に乗せておきますけど……」
するとスメラギは呆れた目を向けた。
「まさかおまえ、竜を連れて街に下りる気か？」
（え？　――――ああそっか！）
竜騎士団では竜がいるのはあたり前、注目されるのはその竜が小さいということだけだった。しかし街では事情がちがう。竜騎士団や学舎以外の場所に竜がいるはずがなく、連れて歩けば注目の的だ。
「すみません、いつもの調子でつい……やっぱり置いてきたほうがいいですよね……？」
ルー、帰る？　と声をかけるとルーは首をふるふると振る。「でも……」と渋ると、ルーはやだやだと肩にしがみ付いてきた。
（どうしよう……）
前回置いてゆかれただけに今回の喜びようは一入だった。それをやはり置いていくとなれば相当信頼関係を損ねるはずだ。

「――いや、いい。連れていけ」
「え？」
「置いていったら一生恨まれそうだ。街に下りるときはデュラクに面倒を見させる」
「ありがとうございます！」
よかったね、とルーを撫で、「今日はよろしくね？」とデュラクに挨拶するとデュラクはちらと感情を覗かせない目でこちらを見ただけだった。その落ちつきようはとてもルーとおなじ種族とは思えない。
今日のデュラクは防護用の重装備はなく鞍だけだが、やはり胴には槍がくくられていた。騎士である以上、休日だからと丸腰でいるわけにはいかない。
「荷物はこのバスケットだけか。そいつもくくっておくか？」
「だからルーは荷物ではなくっ!!」
そういえばエルヴァへ翔ぶときにカイトにもおなじことを言われたことを思い出す。竜騎士団では幼竜は荷物扱いらしい。
スメラギが先に騎乗し、ほら、と手を差しのべられてルーシェはデュラクにまたがった。デュラクにはもう何度も乗っているし、翔び方の癖もおおよそわかっている。
大きな風を捕まえてデュラクは力強く翔び立ったが、いつもほどには高度を上げなかった。翔んでいる自分の頭上、はるか上空を哨戒の竜が旋回している。

「今日は低空飛行なんですね。デュラクの具合が良くないんですか？」
「私用だからな。私用で乗るときと軍用のときでは使える高度がちがう。もっといえば王都から翔び立つときと王都に向かって翔ぶときも高度がちがう。速さも制限されるしな」
そういえばそのようなことが細則に書かれていた気もする。また勉強不足だと叱られるかとルーシェは首を縮こまらせたが、怒声は落ちてこなかった。
「どこか行きたいところはあるか」
「いえ、王都の外はほとんど知らないのでお任せします」
速度を落としても竜の翼は馬の脚とは比べものにならない。ほどなく眼下に街が見え、スメラギは街からすこし離れた場所にデュラクを降下させた。
スメラギはルーシェを降ろし、ルーをどうするのかと思ったがデュラクの背に乗せてみると意外とおとなしかった。性格はちがってもおなじ竜同士、案外仲がいいのかもしれない。
ルーをよろしくね、とデュラクの首筋を撫でて、スメラギとふたりで街へと向かう。
ここは商人が王都に入る前日に宿を取る街で、王都に次いで賑うところらしい。王都に持ってきたはずの荷がもうここで買い手がついてしまい、王都に入ることなく引き返す商人すらいるとスメラギは教えてくれた。
人出の多い大通りは国境砦エルヴァの隣街のベルクに似ていたが、こちらはほとんどがローレンシア人で、立て看板などもローレンシア語のみだ。

ルーシェが街並みをもの珍しげに眺めていると通行人とぶつかりそうになり、スメラギにとっさに引き寄せられた。

「あ、ありがとうございます」

「そんなにめずらしいか？　ここは王都とあまり変わりないだろう」

「実は王都でもあまり街に出たことがなくて……」

「は？　……あぁ、お嬢様なんだったか。屋敷まで商人が来るのか？」

そんな感じです、と笑ってごまかす。

城では必要なものはみな王室御用達の商人、職人が持ってきてくれる。買い物は地方の学校に通っていたころにもらったお小遣いでしたことがある程度だ。

「徹底した箱入り娘なんだな。欲しいものがあったら言え。買ってやる」

「え、ちゃんとお財布持ってきましたよ？」

「もうすぐ誕生日だろう。それくらい出す」

「え!?　わたし誕生日なんて言いましたっけ!?」

「名前からわかるだろうそんなもの」

ルーシェ――暁の女神アルシェイラの愛称のひとつだ。ローレンシアでは毎日それぞれ守護神が定められていて、生まれた子どもにはその日の守護神にあやかる名をつけることが多い。

「なんでも欲しいものを言え」

（誕生日プレゼントもいただけるんだ……）

王女シエラには毎年たくさんの贈り物が届くが、王女としてではなく自分個人に、しかも家族以外からプレゼントをもらうのは初めてだ。

スメラギは自由に出歩かせるのは危ないと思ったのか、ルーシェの手を取って歩きだす。

指の先をすこし握られているだけなのに、指先から熱とはべつのなにかが伝わってくる気がして鼓動が速まってきた。

（なっ、なにがいいかな!?　やっぱり記念に飾っておけるとか身につけられるものがいいかな!?　あそこが仕立て屋さんであそこが装飾品屋さんで――あ、あの服かわいー！）

気が逸るままにルーシェはきょろきょろ見渡していたが、

（あっ、すごくいい匂いがする！　あのパン美味しそう！　あの串焼きも!!）

すると指先からその想いが伝わったのか、

「……おい、さっきから食いものにばかり目が行ってるぞ」

とスメラギに呆れた目を向けられた。

「まだ朝だぞ？　もう腹が減ってるのか？」

「今朝はちょっと朝食を食べそこねまして……」

「なんだ。じゃあ先になにか食べに入るか」

「いえ！　お昼は持ってきていますので！」

デュラクにくくりつけたバスケット、あの中身は手作りの昼食だ。それを作るのに四苦八苦していて朝食を食べそびれてしまったのだ。

しかし、大丈夫ですと言おうとした矢先に匂いに釣られ、鳴り出したお腹をルーシェはとっさに押さえた。

「じゃあさっさと決めて食べに戻るか。――ああ、あれがいい」

ルーシェの手を放してスメラギがひとりで入ったのは、年頃の女の子が好きそうなフリルいっぱいの服飾店だった。窓にはこの店の特徴であるレースのリボンがたくさん飾られている。

（隊長が選んでくれるの？）

スメラギ本人とはまったく無縁そうな店だ。だがどうやって選んだものか、スメラギは商品を見るまでもなく店主と交渉して、お代をはらって「包装はいい」と持って帰ってきた。

そして右手に抱えていたのは服でも装飾品でもなく。

（……ぬいぐるみ？）

「手持ち無沙汰だろう。小さいのの代わりに抱いとけ」

そう言って渡されたのは、窓際に飾ってあったウサギのぬいぐるみだった。

ルーよりも大きな、白い耳たれウサギのぬいぐるみ。

薄紅色のドレスを着て、耳の付け根に同色の大きなレースのリボンをしていてすごくかわいい。たしかにかわいいのだが――

（なんかこの子、どこかで見たことあるような……？）

どこで見たものかと記憶を手繰りながらぬいぐるみを抱いていると、すれ違う通行人がふり返ってゆく。中には通りすぎてからわざわざ戻ってきてまで覗きこむ人もいたほどで、そこでルーシェはようやく気がついた。

（この子わたしに似てる……!?）

気づいてみれば、リボンの柄や服の色までそっくりだ。

スメラギは今日自分がどのような服を着てくるかなんてわからなかったはずだから、このぬいぐるみは通りすがりに偶然見つけただけだ。

（かわいいけど！　かわいいけど、でも……!!）

なんとなく彼女として見られていない気がして、ルーシェは耳たれウサギの頭に顔を埋める。すると長い横髪がちょうどウサギの耳の上にかぶさって「おおっ」と街人の歓声が沸き、ルーシェはさらにへこんだ。

街のはずれではデュラクとルーが待っていて、「とりあえず食いにいくか」と街を見下ろす小高い丘までデュラクで翔んだ。

木陰になった芝生の上でバスケットを広げると、中にあったのは白い紙に包んだパンだ。チ

ーズや野菜、燻製肉などを挟んだもので、旅人の携帯食として街でもよく売られている。
「おまえが作ったのか？」
「はい！　朝からがんばって作りました！」
（だって『彼女』ですから!!）
あまりそう見られていない気がしたので、がんばって主張してみる。
「見た目はあれかもですけど、味は大丈夫です！」
言われるままスメラギが口に運ぶと、意外な顔をした。
「……美味しくないですか？」
「いや、驚いただけだ。お嬢様のくせに大したものだな。毎日作ってるわけではないんだろう？」
ルーシェは曖昧に笑ってごまかした。毎日どころか作ったのは初めてだが、今朝は王宮料理長の監督の下で作ってきたのだから味はまちがいないはずだ。
ルーは耳たれウサギがルーシェの膝からいなくなるなり、そこは自分の場所だとばかりに膝の上を占領して両手でパンをせがんだ。
「デュラクは食べないんですか？」
「こいつがものを食べているのはあまり見たことないな。というか人とおなじものを欲しがるなんてこのちびくらいなものだぞ」

ルーは自身の半分ほどの大きさもあるパンを器用に両手で持ってかぶりつく。そして木にもたれかからせたぬいぐるみと目が合っては威嚇していた。
「そいつはおまえにべったりだな」
「甘えたがりなんですよ、もう」
「だがデュラクもおまえに触れられてもなにもしないだろう」
「はい。多分もう指揮杖がなくても大丈夫です」
ねー？　と話しかけるとデュラクは半眼を向けたが、知るかとばかりにまた昼寝に入る。
「竜はそうそう他人に気を許さないんだがな」
「そうなんですか？　でももう何ヶ月にもなりますし、さすがにもう慣れたとか」
「俺はいまだにそいつに警戒されまくってるぞ」
スメラギがルーに手を伸ばすと、ルーはウサギに向けていた牙をすかさずスメラギに向けた。
「ほらな」
「遊んでるだけですよ。ルーはグレン隊長ともそうして遊んでましたけど、本気で噛んだりしませんから」
「そうか？　それにしてはかなり目が本気なんだが……」
たしかにグレンのときとちがって目が吊り上がって三角になっている気もしたが、ルーの頭をなでると気持ちよさそうに目を閉じた。

「おまえは不思議だな。デュラクを怖がらないし、グリフォンの前でも平然としているし……そういえばあいつとはどういう関係なんだ」

「えっ、団長ですか？」

この話の流れでどうしていきなりシリスのことなのかと驚いていると、

「遠縁とは聞いているが、昨日の一件は身内じゃなければ危なかったぞ」

（ああ、それで……）

昨日のグリフォンの一件では、他の竜騎士の目の前で真っ向からシリスに背いてしまった。シリスに対して無礼な態度を隠さないスメラギですら、騎士団内の立場を考えて他の隊員の前では自制しているにもかかわらず、だ。

「団長は遠縁のお兄さんなんですけど、わたしは一人っ子で団長もご兄弟がいらっしゃらないから妹みたく思っていらっしゃるんだと思います」

「婚約者なんじゃないのか」

「はい!?　そんなことは全然!?」

まさかの誤解にルーシェはあわてふためいたが、スメラギは本気だった。

「あいつも竜公の立場から大っぴらにはしないだろうが、貴族の家では当人が知らないうちに親同士が内々に決めていることだってあるだろう」

王族という身分や竜騎士団長という立場、年齢からしてシリスが大公候補としてもっとも有

力視されているのは事実だが婚約した覚えはないし、母もそのようなことは言っていなかった。可能性としてあるとすれば、シリスがスメラギをからかう道具に使ったということだ。

「ないですないです絶対！　もしかして団長がそんなこと言ってました!?」

「いや、あいつはなにも言っていない。だがあいつでなくてもいいとこのお嬢様なら婚約者の一人や二人いるだろう」

「いませんって！　それに……婚約者がいたらここにきたりしません……」

（だってこれ、デート……なのよ、ね？）

いまひとつ自信が持てず声が小さくなってしまったが、「そうか」とスメラギは息をついた。それが安堵の吐息のように感じたのは都合よく解釈しすぎだろうか。

「あいつに報告したときに脅されたんだ。おまえの家は厳しいから覚悟しろとな」

たしかに厳しいが、家そのものが厳しいというより、家に付随する責務もろもろが他の家より格段に厳しく、そして重い。

「そんな家の娘が俺とふたりで出歩いたりして大丈夫なのか？」

「あ……まぁ放任なんであまりそこは気にならないでください」

地方の学校に通っていたころは隠れて何人か付いていたが今は誰も付いていないし、逆に竜公と聖竜の側にいるならこれ以上安全な場所はない。

「放し飼いか」というスメラギのつぶやきに、「そんなものです」とうなずいた。

「そういう隊長こそ大丈夫なんですか？　街で見てる人がいましたよ？」
　ウサギ娘がウサギのぬいぐるみを抱いているのを面白がっているのかと思いきや、あきらかにその視線が自分の手を引くスメラギに向いている人もいた。スメラギの容姿に惹かれて見ていた女性もいるが、男性などはスメラギを知っている様子だった。
「ああ、非番の奴らがいたかもな。王都の隣街だ、なにもめずらしいことじゃない」
「でもそうしたら噂になるんじゃ……」
　まだ隊服姿なら見回りとでもなんとでも言い逃れがきくが、私服でぬいぐるみを抱いていたなんて言い訳の余地がないくらいに私用だ。
「俺はべつにかまわない。隠すつもりもないしな」
「えっ、そうなんですか!?」
「かといって言いふらす気もないが、勝手に広まってくれたらおまえにちょっかいを出す輩も減るだろうし好都合だ」
（そっ、そうなんだ……！）
　竜騎士団でちょっかいを出された覚えはまったくないのだが、スメラギがちゃんと恋人として見てくれていた、ただそうわかっただけで顔が火照ってきた。
　ウサギだと思われてるというのはきっと自分の思い込みにちがいない。そう思うと木に凭れかからせているぬいぐるみも素直にかわいく思えてくる。

「誕生日プレゼントありがとうございました。家族以外にもらうのは初めてです」
「そうなのか？　家族からは今までどういうのをもらったんだ」
「えっ、オルゴールとか羽ペンとか……ありきたりのものですよ？」
王宮にはなんでもそろっているので特に欲しいものもなく、もらったのは私室に飾っておけるようなものばかりだ。だが何気なくつづいた言葉にルーシェは衝撃を受けた。
「誕生日といってもなにをするのかよくわからなくてな。俺は家族がいないから」
（あ……）
「とりあえず神託のために便宜的に誕生日は決められたが、本当の日はわからないしな」
自分の誕生日には母や伯父たちがいて、夕食の後にケーキが出てきたくらいで、いつもとさほど変わらないいつもの晩餐だった。
だが自分にはあたり前にあったその時間がスメラギには今まで一度もなかった。
（じゃあ、ずっと一人で……？）
自分も父と死に別れ、母は女王としての務めがあるのでそれほど長く家族と一緒にいられたわけではない。けれども会いたいと思えば会える人がいるのといないのでは気持ちがまったくちがう。
しかしスメラギはなにを思うでもないらしく、「今まで唯一もらったのはこいつくらいだな」と傍らで寝そべるデュラクを撫でていた。

家族がいない生活――それがどのようなものなのかルーシェには想像もつかない。けれどもそれがあたり前になってしまっていることはとても寂しいことのように思えて、とっさに叫んでいた。

「こっ、これからはわたしがいますから！」

突然張り上げた声にスメラギが呆然と見つめる中、ルーシェは言葉を継ぐ。

「隊長の誕生日だって一緒にお祝いしましょうね！　今年だけじゃなくて来年もその次も、ずっとずっと……！」

言ってしまってから、スメラギの便宜上の誕生日すらいつなのかまだ聞いていなかったことを思い出し、今年の誕生日はもう過ぎているかもとも思った。だが言った気持ちに偽りはない。

スメラギは虚を衝かれて呆けていたが、やがて、

「……そうだな」

そう答えたときの目がいつになく優しくて、ルーシェは思わず見とれてしまった。

「だが、俺はおまえの誕生日には一緒にいられない。その日は竜公としての仕事があるからな」

（あっ、そっか。これから毎年王女の誕生パーティーがあるから……）

竜公はもちろん、主立った貴族はみな招待される。逆に名だたる貴族で王宮から招待されなかったとなれば政治への影響がはかりしれない。夜会に出席するのは貴族の大事な仕事だ。

（じゃあ毎年一緒にいられるけどふたりきりでお祝いはできないってこと……？）

夜会はスメラギにとって大事な仕事だが、ルーシェ――シエラにしても同じだ。お祝いできないのは嫌だなどと思っていたルーシェだが、事情を知らないスメラギは、

「その代わりというわけではないが」

と上着のポケットからなにかを取り出した。

出てきたのは手のひらに乗るほどの小さな箱だ。

「すこし早いが誕生日プレゼントだ」

（え!?　プレゼントはウサギじゃなかったの!?）

「あ、ありがとうございます……」

刺繍入りの布張りの小箱を両手で受け取って開けてみると、小箱の中身は耳飾りだった。

ピンクの宝石と純銀の装飾で、思わず「かわいー……」と声が漏れる。

「ちょうどおまえの誕生日の夜会で社交界デビューするんだろう？」

（あ、もしかしてドレスの色に合わせてくれたの？）

いつしか執務室でダンスの練習に付き合ってもらったとき、衣装の話をしたことがあった。

宝飾品なんて昨日今日探して見つかるものではない。話したときはまだ付き合っていなかったが、付き合いはじめてからすぐに探してくれたのだろう。現に箱の中の耳飾りは衣装合わせのときに並んでいた宝石と比べてもなんら遜色ないものだ。

（あれ？　ってことは……）

「もっ、もしかしてこれ、めちゃくちゃ高いんじゃないですか!?」

「……どうして真っ先に気づくのがそこなんだ。街に出たこともない箱入り娘のくせに」

「だ、だって！　これってとてもお給料で買えるものじゃないですよね!?」

装飾品など一度も買ったことはないし宝石の相場もさっぱりわからないが、自分は普通の人より多くの装飾品を目にしている。衣装合わせのときに並んでいたのは王女が身につけて恥ずかしくないものばかり、それらと並べて遜色がないというならとてつもなく高価なはずだ。

「隊長ってそんな高給取りなんですか!?」

「……あのな、俺をなんだと思ってるんだ。一代限りとはいえ侯爵だぞ」

（あっ、そ、そっか！）

いつも執務室で書類に囲まれているので忘れていたが、スメラギは竜公となり侯爵待遇の貴族になったのだった。王都に屋敷も下賜されているし、領地も与えられている。

「竜騎士は士官学校とおなじで学舎のときから給料が出ているし、仕送りをする家族もいなければさしたる使い道もないしな。気にせずもらっておけ」

「あ……ありがとうございます……」

だが気にせずと言われて、はいそうですかともらっていい程度のものではない気がする。耳飾りを耳に当てると金属と宝石の冷たさが耳朶に伝わったが、添える手がふるえたのは冷たさ



のためだけではない。
「似合います……？」
「まぁな。合わせるだけでなくつけてみたらどうだ」
「いえっ、落としたりしたら大変ですから！　それに今の恰好じゃこれは立派すぎて……」
夜会でつけさせてもらいます、と再度礼を告げてルーシェはそっと小箱にもどした。
「でも隊長、今でも隊舎暮らしですよね？　お屋敷はどうしているんですか？」
「最低限の維持だけさせている。建物は手を入れないと傷むしな」
「せっかくですから住んだらいいじゃないですか」
「砦から遠くなる。それに寝るだけなら隊舎で十分だ」
遠いといってもデュラクの翼なら一飛びだ。後に足した一言のほうが本音らしい。
「――それに、家にはすこし憧れがあったんだ」
「え？」
「普通の家を知らないからかもしれないけどな。将来どんな家に住んでどんな暮らしをするのだろうとか考えたことがあってな」
「えっ、どういう暮らしをしたかったんですか？」
普段が生活感のない人だけに、どんな理想があったのかとても気になる。
「そんな広い屋敷じゃなくていい。王都の郊外で、手伝いに老夫婦がいてくれれば事足りるく

らいの屋敷で、山羊や羊を飼いながら家族と一緒に暮らせればと思っていた」

（……それだけ？）

どんな大層な暮らしぶりかと思いきや、とてもささやかな、ローレンシアの民の大半が叶えられそうな夢だった。

「どうして過去形なんですか？　今からでも十分叶えられるじゃないですか」

するとスメラギは「竜公になってしまったからな」と言った。

「俺ももっと多忙になるし、政敵もたくさん作るだろう。そんな穏やかな生活は望めない」

「あ……」

スメラギが飛びこもうとしている世界は、どっぷり政治の駆け引きが中心の生活だ。青天に流れる白雲を追うようなゆったりと羊を追う生活とはほど遠い。

「竜公になったことを後悔しているわけではないんだ。夢はあくまで夢で、それよりも手に入れたいものがあるから俺は王宮に入ることにした」

スメラギが欲するもの――それはローレンシアの平和だ。

他国に侵略されないだけではなく、他国を侵略することもない絶対的な強さ。

そこにある昨日までの生活を守りつづけることがどれほど難しいかは、長い歴史の中に消えていった国々を見てもあきらかだ。他国からの侵略はもちろん、自国内でも貴族の国外離反、貴族同士の勢力争い、王位継承問題、財政破綻と国が滅びる危険はあちこちに潜んでいる。

ローレンシアも今までのあり方が正しかったとは限らない。しかしすくなくとも近隣諸国のどの国よりもローレンシアは古くから存続していて、スメラギは竜公としてこの国を支える道を選んだ。

「決して楽じゃない道におまえを巻き込んでいいものか、いろいろ考えた。だが決めた」

そう告げて、スメラギはルーシェをまっすぐ見つめた。

「――いつかおまえを一緒に王宮に連れていく」

(え……それって……)

それ以上説明されるまでもない。ただのエスコート役ではなく異性を公式の場に連れていくということはつまり、その相手が自分の配偶者――妻だと社交界に知らしめることだ。

ルーシェは驚きのあまり目を見開いたまま固まってしまったが、スメラギの目に揺らぎはなかった。

「いいか?」

わたしでいいんですか――そんな想いが脳裏をかすめたが、いまスメラギが訊いているのは自分の心だ。

そしてそう訊くまでもなくスメラギの目がその答えを告げていたから、ルーシェはこくんとひとつうなずいた。

(……本当のことを言わなきゃ)

たとえ自分が王女でも、たがいがおなじ気持ちでいるなら本当のことを話して将来を考えることだってできるはずだ。

――あの、わたし、本当は貴族の娘なんかじゃなくて、この国の王女なんです。

その一言を告げようと口を開きかけたルーシェだったが、声を発するより早く頬にスメラギの指先が伸びてきた。

そのまま頬に手のひらが当てられ、胸の奥にくすぐったい気持ちが涌いてくる。心にさざなみが立って鼓動が速まり、その手が耳の下を伝って頭の後ろに回されて引き寄せられると、自然に唇が重なっていた。

こうして触れあうのはほぼ一ヶ月ぶりだ。なのに以前の続きのように心があたり前に応え、吐息のぬくもりが心の中まで沁みこんで満たされてゆく。そして満たされたそばからもっともっとと心が求めて身体が従う。

いま自分たちの間には身分や出自などの隔てはなにもなく、心が求めるのはこの人だけだ。

一緒にいたい、一緒にいられるようなふさわしい女性になりたい、そう思う。けれど自分はまだ立場も覚悟もなにもかも求められることに応えるのが精いっぱいで、二つの年の差以上に大きな隔たりを感じる。

任せても大丈夫という安心感があるとともにずるいという想いもあり、自分からはなにもできないもどかしさもあるが、最後には好きという想いにすべて覆い尽くされる。

――ずっとこうしていられたら。

いつしか抱き寄せられるままに身を委ねていたルーシェだが、そのとき不意に胸元でうごめくなにかに現実に引き戻された。

（えっ、なに!?）

びくっと身体が強張り、心が逸れたことに気がついたスメラギが顔を離し、どうしたと目が訊いている。

（だ、だって、なにかが胸に触って……）

あわててうつむくと、胸の下にいた赤い物体と目が合った。

「ル、ルー!?」

見つけてもらったルーが、くぁと鳴く。どうやら膝の上にいたルーが二人の間に割り込もうと登ってきて胸でつっかえていたらしい。

スメラギが離れたことでルーはいつものようによじ登って左肩に収まったが、ルーシェの鼓動はとても収まりそうになかった。

（びっ……びっくりした～～～!!）

深呼吸して息を整えようにも心臓がばくばくいってままならない。

スメラギは二人の時間を乱入者に邪魔されたと気づいたらしく、見るからに不機嫌そうにルーを見下ろして零下の声音で告げた。

「……捨てるぞ」
「すっ、捨てちゃ駄目ですっ！」
「じゃあ投げさせろ」
「駄目ですってば……!!」
捨てるだの投げるだの竜騎士にあるまじき暴挙だが、今のスメラギは実力行使に出かねない気がしてルーシェはあわててルーを抱きしめた。
しかし抱きしめられたルーはルーシェが味方してくれたと思ったか、こともあろうにスメラギにくわっと威嚇した。睨みつけるスメラギの視線にも苛立ちがにじんでいる。だからといってルーシェはルーを叱ることもできず、ルーをスメラギの視界から覆い隠すように抱きしめて「すみませんすみません！」と平謝りに謝った。
（あああ火花散ってる！　なんでグレン隊長みたいになついてくれないの!?　スメラギ隊長が遊んでくれないから!?）
――そのとき、抱きすくめていたルーシェの頭上を大きな影が駆け抜けた。
雲にしては動きが速い。見上げると、並木すれすれの高さをなにかが翔んでゆく。
（あれってグリフォン!?）
並木を跳び越えたグリフォンは太い両脚で力強く着地すると、そのまま駆け去っていった。
グリフォンの行き先――そこにあるのは。

（まさか街に下りるつもり!?）

基本的にグリフォンは人に近づかない。だが神の山から離れたこのような場所で出くわしたこと自体がすでに異常だ。ルーシェは「ルーはここで待ってて！」と言い置いて駆け出した。見た目より急勾配になっている丘を転がり落ちそうになりながら駆けていると、

「乗れ！」

見ると芝生すれすれの低空飛行のデュラクがルーシェの真横を翔んでいる。ルーシェが伸ばされたスメラギの手を取ると抱き寄せられ、デュラクはそのまま街へと翔んだ。

グリフォンは街壁を悠々と跳び越え、人々が行き交う街の中に乱入した。

街中に突如現れた獣の姿に人々はあわてふためき、その場は騒然となった。グリフォンが闇雲に通りを駆けまわり、逃げ惑う人が人を押しのけてさらに被害が広がる。

屋根の上からその様子を見ていたスメラギは、重い声音で告げた。

「一頭だけでは対処できない。竜騎士を呼びに戻るぞ」

王都の砦に翔んでも半時とかからない。数で囲んで威嚇するのが最善だということはわかっている。しかし。

「避難誘導しないと！　隊長は行ってください！」

言うが早いかルーシェはスメラギの腕を抜け出し、デュラクから飛び降りた。

「グリフォンに背中を向けないで！」

平屋の屋根の上から叫んだルーシェに、どこに逃げればよいのかと混乱していた街人が目を向けた。その街人が目に留めたのはルーシェではなく屋根の上にいた黒竜の姿だ。
「竜!?　竜騎士か!?」
「しかも聖竜だ!!」
街人の目に期待の光が宿る。街人たちには届かなかったろうが、ルーシェには背後の舌打ちが聞こえた。この状況を置き去りに王都に戻ることはできない。ルーシェの意図するものではなかったが、スメラギを無理やりこの場に縫いとめた形になってしまった。
しかし街人の意識がこちらに向いているこの機を逃してはならないと、ルーシェは声を張り上げた。
「グリフォンに背中を向けず、目をそらさずにゆっくり離れてください！」
グリフォンに捕食の習性がなくても、背を向けたもの――弱いものを追うのは獣の本能だ。
指示を出していたルーシェがあたりを見回すと、遠くの屋根の上に制服姿の男たちが見えた。見覚えのない制服、自警団かなにかだろうか。
制服姿の男たちはみな弓を構え、羽を紅白縞に染めた矢を番えている。
「射ちゃダメ!!」
しかしその言葉が届かなかったのか聞く耳をもたないのか、矢は次々に解き放たれた。
それらはグリフォンに降り注ぐが、グリフォンの豊かな金の体毛を貫き通すことはない。逆

に降り注ぐ矢に激昂したグリフォンが咆哮し、屋根の上に狙いを定めた。

「逃げて……!!」

しかしなおも男たちは射つづけた。至近距離から射かけられた何本かがグリフォンに刺さったがその勢いを止めることはない。

グリフォンの前脚が男を引き裂くかと身を竦ませたとき、男とグリフォンの間を黒の翼が翔け抜けた。——デュラクだ。

スメラギに操られたデュラクが旋回し、グリフォンの進路を遮る。だが聖竜を前にしてもグリフォンが怯む様子はなかった。怒りで完全に我を失っている。

(なんとかしないと……!)

ルーシェは屋根にぶら下がり、残り身の丈ほどの高さを飛び降りる。着地の衝撃で足がじんと痺れたが怪我はしていないはずだ。

グリフォンは槍を抜いて構えるスメラギに吼えかかるが、デュラクもスメラギもまったく怯む様子はなく、対峙している隙に弓を射た男たちは逃げ去った。

グリフォンが牙をむいて突進するが、スメラギは槍の柄のほうをグリフォンの首筋に引っかけて進路を逸らす。スメラギは穂先を向けず、デュラクもまた攻撃しない。デュラクに手出ししないよう命じてあるのだ。

グリフォンと竜騎士の戦い。そうそう見られるものではないのと竜騎士がいることの安心感

が相まって、逃げていたはずの人たちが足を止めてふり返り、その様子を眺めている。
「いまのうちに逃げてください！」
ルーシェはそう叫ぶが街人の動きは鈍い。中にはまったく動かず観戦を決め込んでいる者もいる。距離があるから安心だと思っているのだろうが、グリフォンの翼なら距離を詰めるのは一瞬だ。狙いを定められてからでは逃げられない。
（なんとかして避難してもらわないと……！）
そのとき、大通りを幼い子どもが走り出た。
グリフォンから逃げるために人気のなくなった大通り、大人ならば誰もいないそこにひとり歩み出ることの危険性を理解したはずだ。だが三つか四つの男の子、ひとりで出歩く年ではないが親とはぐれたのか止める者はいない。
そしてその狩りやすそうな獲物を見つけたグリフォンの眼つきが変わった。
（あぶない……！）
ルーシェは大通りに駆け出して子どもを抱きしめる。それとともに激しい風が襲いかかり、髪が大きく舞い踊った。グリフォンの翼による風だ。見上げると巻きあげられた砂埃があってなお見える至近距離にグリフォンの爪が迫っていた。
ルーシェは子どもを抱いたまま転がって一撃を躱す。そして身を起こして、きっ、とグリフォンを睨みつけた。

蒼と金の視線がぶつかる。

グリフォンにしてみればひ弱な存在、獲物が二人に増えただけにすぎない。

ルーシェの手元に武器はなく、抗う術はない。

万事休す、そう思われたがしかしグリフォンは飛びかかってこなかった。

緊迫した空気が流れる中、ルーシェはグリフォンを見据えたままゆっくり浅い呼吸をくり返す。グリフォンが動けば逃げ場はない。なにがこの均衡を崩すかわからない中、この対峙をみなが息を詰めて見つめていた。一瞬、遠くで女性の金切り声が聞こえたがそれはすぐさま途切れた。周囲の者が口を押さえたのだろう。

グリフォンは攻めようとするが、しかし抗えないなにかもまた感じている。本能と調教されたことがグリフォンのなかで相反し、せめぎあって混乱しているように見えた。

(……だって本当は人を襲うような子じゃないもの)

ルーシェはグリフォンから目を逸らすことができなかったが、視界に入らないどこかでスメラギも機を覗っているはずだ。——自分たちを救いだすための機会。

それは一度きりで、スメラギは自分たちを救うために確実にグリフォンの命を狙う。

(なんとかこの子を空に帰してあげないと)

なにか、なにか——呼吸を乱すことなくルーシェは考えをめぐらせ、やがてゆっくりと懐に手を入れた。

取りだしたのは長い紐で口を結んだ財布だ。
ルーシェは紐に指をかけると、手のひらに収まるほどのそれを縦にくるくると回しはじめた。
グリフォンは最初こそ身構えたが、一定の速さで回されるそれに目を奪われる。
（そう、これを見ていて）
グリフォンの上下する肩と自分の呼吸、そして回す速さを合わせる。そしてルーシェは意識が重なった機を読んで、それを思いきり上空に向かって投げ上げた。
財布とともにグリフォンも翔けあがる。そして大空の風を受けて我に返ったのか、グリフォンはそのまま翔け去った。
空遠く飛び去るグリフォンに、街人たちの安堵の声が満ちた。
（よかった……）
緊張から解放されたルーシェがふうと息をついたそのとき、なにかが頭を直撃した。
（いっ……たたた……）
頭を押さえてしゃがみこむと、路上に落ちていたのは先ほど投げ上げた財布だった。
真上に投げたものは真下に落ちてくる。あたり前すぎる自然の摂理だ。
（あんまりお金入ってなくてよかった〜〜〜〜!!）
なにやら叫びながら女性が駆け寄ってきて、子どももまた駆けて行く。どうやら母親らしくしきりに礼を告げられ、頭をさすってなんともしまらないながらルーシェは手を振って親子を

見送った。

そしてあらためて周囲を見渡すと、色とりどりの竜が屋根の上で取り囲んでいた。いつの間に!? と驚いたが、非番で街にきていた竜騎士が召喚したのだろう。

隊はちがうが竜公より身分が上の者がいるはずもなく、スメラギが竜騎士たちに後処理の指示を出す。

竜騎士が指示を受けて散ると、スメラギはようやくデュラクと共に大通りに下りてきた。

「大丈夫か」

「ええ、まぁ。ちょっと頭が痛いくらいで……」

財布が頭頂部を直撃したことも当然見られていたはずで、ルーシェは照れ笑いでごまかしたがスメラギの表情は硬かった。

(……あれ?)

おかしいなと思って様子を探ろうとしたとき、「あの、よろしいですか」と男性が割って入ってきた。壮年から初老に差しかかるその男性はこの街の街長だと名乗った。

「来てくださいましてありがとうございました。竜騎士のみなさんに感謝します。しかもまさか黒竜公がおいでだったとは」

息子の年齢よりもまだ若いだろうスメラギに向ける街長の眼差しには、畏敬の念があふれている。

スメラギもまたそのような状況は慣れているのか、黒竜隊隊長としての厳しい顔ではなく、王宮に伺候していたときのような一見温和そうだが隙のない顔でもない、竜騎士として毅然とした受け答えをした。

「本日出くわしたのはまったくの偶然です。ですが近頃グリフォンが街に現れたという報告が頻繁に上がっています。人の手に負えるものではありませんので、今後も現れるようなことがあればいたずらに刺激せず、避難して竜騎士の到着を待つようにしてください」

スメラギの言葉を神妙に受け取った街長は、次いでルーシェに向きなおった。

「お嬢さんも子どもを助けてくれてありがとう。怪我はなかったかい」

「え？　あ、はい……みなさんにお怪我がなくてよかったです」

「あらためて御礼をしたいので名前と住まいを聞いてもいいかな」

その申し出に「え……」とルーシェが言い淀んでいると、スメラギが代わりに答えた。

「私の連れですのでお気になさらず」

その一言をどういう意味で受け取ったものか街長は相好を崩してそれ以上追及せず、「では黒竜公にはまた後日改めて」と深々と一礼した。

ほら行くぞと促され、ルーシェはスメラギの手を借りてデュラクに騎乗する。そして翔び立つデュラクを笑顔で見送る街長に、作りものの微笑を返すことしかできなかった。

街を出てもなおルーシェの心は深く沈んだままだった。理由はわかっている。
（わたし、竜騎士だと思われていなかった……）
私服姿で竜も連れていなければ竜騎士だなんてわかるはずもない。けれど。
（もし子どもを救ったのがわたしでなく隊長だったなら？）
きっとスメラギならその後の受け答えで、竜騎士とまではわからずともどこかの軍に所属していることは気がついたはずだ。
（ううん、ちがう……わたしが、ちゃんとできていないから）
自分は街長の言うように『お嬢さん』でしかなかったのだ。
デュラクで一飛びするとすぐに元いた丘に着き、芝生で待っていたルーはルーシェがデュラクから降りるなり一目散に翔んできた。
離れていたのはほんの半時ほど、なのにルーは何日も離れていたかのように甘えてくる。
（ルーはわたしでいいの？　全然立派な主じゃないのに）
竜騎士としての自信が持てない今、無条件に甘えてくるルーに気持ちが救われる。
周囲を見ると、自分が思わず駆けだした後スメラギがデュラクを翔ばしたせいか、風にあおられたバスケットが遠くに転がっていた。食べかけだったパンも、挟まっていた野菜や燻製肉が分離して芝生に点々と散らばっている。

ちゃんと言われたとおり留守番をしていたルーは、誉めて誉めてと首筋を向けてきたが、ルーシェは「ちょっと待ってて。先にお片付けしないとね」とルーを芝生の上に置いた。

「――片付けは後でいい」

背後から厳しい声音がかけられたのはそのときだ。

街長と別れてからスメラギがずっと無言だったことには気づいていた。なにか言いたいことを抱えているということも。

観念してルーシェがスメラギに向き合うと、スメラギは厳しい眼で見据えていた。

「どうして危ない真似をした」

「……街の人を守らなきゃって思ったからです」

休日だからといって騎士でなくなるわけではない。民を守るのが騎士の義務だ。それにたとえ騎士でなくとも、自分は多少なりとも他の人よりグリフォンを知っている。グリフォンは無闇に人を襲う生き物ではなく、正気に戻しさえすれば事は収まる。そう思った。

「鎮めることさえできればみんな助かるんじゃないかって、そう思ったから」

「鎮めるために俺は砦の竜騎士を呼びに行くと言ったはずだ」

「呼びに行くのは隊長ひとりで十分かなって思って」

「行けない状況にしたのは誰だ」

「それはわたしです、けど……」

自分が街人に呼びかけたことで、デュラクが注目を浴びてしまった。あの状況でスメラギが砦に戻る素振りを見せれば、街人は見捨てられたと思い込んでさらに狂乱状態に陥っていた。街に非番の竜騎士が多数いたのは結果論にすぎない。

「おまえがしたことは軍規違反だ」

その宣告にルーシェはびくりと肩を震わせた。

「俺の命令に背いたことだけじゃない。人を避難させるにしても自分の身の安全を確保するのが先だ。窮地にあっても自分たちが救助される側にはならない、一時的になりかねないときは自分の救助の方法もあらかじめ仲間に託しておく、それが基本だ。しかしおまえはその基本ができていない。おまえがしているのは救助活動じゃない。ただの暴走だ」

「――――！　たしかに暴走かもしれませんけど！　でも目の前で襲われそうになっていた子どもを放っておけっていうんですか⁉」

「そうじゃないッ‼」

荒げた声はスメラギの怒声に一瞬でかき消された。

「竜騎士団は組織だ！　おまえはその一員であることを忘れるなと言っているんだ‼」

知識や訓練が絶対的に足りていない。それは指摘されるまでもなくわかっている。しかし今スメラギに糾弾されているのは経験とは無縁のもの――騎士としての覚悟不足だった。

いまスメラギに返すべき言葉はひとつしかない。すみません――そう一言謝ればきっとスメ

ラギはそれ以上追及しない。

（――それでも）

うつむいて、泣きたくなるのを必死にこらえて目を開けていると、ルーシェの視界に入ったのは、早朝から頑張って作った昼食の残骸、心配そうに見上げてくるルー、転がったウサギのぬいぐるみ、そして初めてもらった誕生日プレゼント――――

「……どうしてそういうこと言うんですか」

「なに？」

今の自分は竜騎士でもなく王女でもない、ただの『お嬢さん』だ。

（けれど今日は……）

最後に残されたたったひとつの立場――――恋人。

まだ付き合いはじめて一ヶ月足らずで、今日が最初のデートで、まだ全然釣り合う女性にもなれていない。現にスメラギが街長と話している間、黒竜公だという若い竜騎士を熱い視線で見ている女性たちに何人も気づいたが、側にいる自分に刺々しい感情は向けられなかった。

自分は偶然そこに居合わせただけの街娘、それだけの存在だった。

周囲に似合いの相手だと認められたいわけじゃない。自分を磨くのは自分自身の問題だ。

――けれど、他ならぬスメラギに否定されたなら。

（ここにいるわたしはいったいなんなの？）

だからルーシェは、胸の中でうずまく想いをありったけの声でぶつけた。

「今日のわたしは部下じゃないのに……っ!!」

その日、ナシルが第二皇子に呼び出されたのは昼をすこし過ぎたばかり、宵の星読みの準備をはじめる直前のことだった。

第二皇子の部屋は執務室らしからぬことで有名だ。帝都の執務室などは人を食いそうな南国の植物が生えているわ尾っぽだけで人の背丈ほどもある極彩色の鳥が飛び交っているわと、どこの密林に迷いこんだかというありさまらしい。

それに比べればこのレーヌ河に面する〈人魚の砦〉の執務室はましなほうだ。

昆虫を食いそうな植物があるものの鉢植えだし、鳥は極彩色ではなく金一色、しかも手のひらに収まる大きさだ。

「お呼びにより参上仕りました。御用にございましょうか」

呼び出した部屋の主、第二皇子アル・ナーグ・ラサルスはクッションの上で胡坐を組み、どこの国の呪術師が愛用していたものかと思う奇っ怪な装飾の入った鳥籠を前に、餌をついばむ

金糸雀を愛でていた。

ラサルスは餌やりに夢中らしく、膝をついて言上したナシルには目もくれない。彼は無類の動物好きで、まだ訓練前のグリフォンをも真っ先に貰い受けて手なずけてしまったほどだ。

「綺麗だと思わないか」

ナシルが鳥籠を覗いてみると、普通の金糸雀は腹部だけがあざやかな金色をしているが、籠の中の金糸雀は全身が金色の羽で覆われていた。

「変異種ですか。たしかに美しくはありますが強くはないですね」

目立つ色をしていては野生では真っ先に狙われる。籠の中でしか生きられない鳥だ。

そしてラサルスは強いものに憧れる性質がある。生物として劣性である全身金色のそれを愛でていることを不思議に感じたところ、「なにを言う」とラサルスは告げた。

「美しい、ただそれだけでこの鳥は野禽に襲われることもなく飢えることもない安住の地を手に入れた。それは十分に強さじゃないか？」

その言葉にナシルはすぐさま答えられなかった。

それはたしかに安住の地かもしれない。だが命を飼い手に握られた非常に危ういものだ。主の機嫌を損ねれば餌も与えられず、もはや自分の身を守る術もないまま、籠の中でただ死を待つしかない。

（だがそれは人もおなじか）

属する国は鳥籠とおなじ、鳥籠の主に盾突けば身を守る術はない。
そしてラサルスはその鳥籠の主になろうとする人物だった。
人も金糸雀も同じもの、主に気に入られれば安住の地を得て、そうでないものは野生で野禽からみずからを守りながら逞しく生きつづける――
返答できないナシルを意に介した様子もなく、ラサルスは餌をやりつづけながら告げた。
「金もいいが銀もいいな」
「銀色の鳥、にございますか？」
その言葉は額面どおりの意味ではないと思ったが、動物偏愛のラサルスのこと、本気で欲しているとも考えられる。
「あれは鳥というより空翔ぶウサギだったけどな」
（ああ、なるほど）
暁の光の中、赤竜の背の上であざやかな銀の髪を閃かせて翔んでいたという乙女――ローレンシア女王の一人娘、シエラ・アーシェラータ・ローレンシア。
さらに彼女は身分を隠して竜騎士の見習いもしており、ラサルスはローレンシアだけでなく王女本人にも興味を持ったらしい。
「おまえが俺にウサっ娘の情報をくれたことは感謝している。だが前回は竜騎士に邪魔をされてしまってな――いや、竜騎士というより情報に阻まれたというべきか」

それまで淡々と告げていたラサルスが最後の一言に苦笑をにじませ、ナシルは戦慄した。
「黒竜公スメラギ――後宮暮らしのアシュアはともかく、おまえは知っていたな？」
そこではじめてラサルスはふり返った。
面に苦笑を浮かべつつもその眼にあったのは冷淡な光だ。
アズィール帝国を継ぐ者、すべてを手にする者として育ってきたラサルスは、人の命すらあたり前のようにその手に握ってきた。気分を害したと、怒りではなくただいらないものを捨てるだけとばかりに手討ちにされた者も少なくない。
ナシルは瞬時にこの部屋の造りと人の配置に思いを巡らせた。
得物となりそうなものは星読みの錫杖ひとつ、敵地まっただ中のここで命をつなぐには、命を奪われるより先にラサルスを盾に取るしかない――
怯まぬナシルの目から覚悟を読みとったのかどうか、ラサルスは真実満足げな笑みを浮かべた。
「まぁいい。そういえば以前、レーヌ河に王女が姿を見せたときも護衛の黒竜がいたな。おそらくそれもあいつだ。黒竜公とやらは王女にとって特別な相手なのか」
「特別かどうかはわかりかねますが、王宮に伺候した際にも黒竜公はおいでした。白竜公は女王、赤竜公、緑竜公の二公が不在の今、黒竜公ならびに青竜公がローレンシアの要であることは間違いありません」

「竜公というのは世襲ではなく聖竜に選ばれた者がなるのだったか。政治の担い手も竜任せとは実に竜の国らしいことだな。聖竜にはそれほどの力があるのか？」
「定かではありませんが、同色の竜は聖竜に従うという噂があります」
「聖竜が竜の頭なのか」
なるほどな、とラサルスは喉を鳴らした。
「ならば竜公ひとり味方に引き入れれば、何十、何百という竜が一気に手に入るということか」
面白い玩具でも見つけたように、ラサルスの琥珀の瞳に光が宿る。
「アズィールに亡命でもしないものかな」
もちろんラサルスは願望を語っているのではなく、そうするように――そうせざるを得ない方向に持ち込めという命令だ。
「もし策が成れば黒竜公をいかがするおつもりです」
「もちろんあいつの前に立たせてみる。そのときの顔を見るだけで一興だ」
「それだけ……にございますか？」
「恨みはあるが一発殴らせてもらえれば俺はそれでいい。あとはあいつに黒竜隊一隊まるごとついてくるか、一隊まるごと使いものにならなくなるか、どちらにしろローレンシアの戦局は大きく変わる」

三人の皇子の中でもっとも軍隊を掌握しているのはラサルスだ。母親がアズィール人という理由もあるが、皇子当人が遠征に出ていることも大きい。

現皇帝も皇子時代に軍と行動を共にしたことで軍への大きな影響力を持ち、帝位を手に入れた。

ラサルスが中心となってローレンシアを攻め取れば、皇位継承争いに決着がついたも同然だ。

「俺は賢い奴は嫌いじゃないし功には報いるぞ。竜騎士団があれば東国まるごと手に入る。――好きな未来を選び取れ、ナシル」

ナシルの真意を知ってか知らずか、ラサルスはナシルの願いを射抜いた。

汚名を着せられ下級属領とされた祖国の解放、それがナシルの一番の願いだ。

さほど広くもなく豊かでもない辺境の国ひとつ、ラサルスはそんなものでいいのかと鼻で笑いながらくれることだろう。

しかしもうひとつ、自身に流れる血に賭けて叶えなければいけないことがある。

――〈皇〉をあるべき場所に。

自分はただその務めのためだけに生み出された存在、その責務はなんとしても果たさなけれ

ばならない。

スメラギはいずれローレンシアから引き離さなければいけなかった。その時期が早まっただけのこと、いまラサルスの誘いに乗ることは本懐に背くものではない。

（逆にこの機を、利用する）

星読みという特技ひとつ、授かった五体満足な身体以外のなにも持たない自分は、なにかを利用しながら這い上がるしかないのだ。

「――黒竜公の立場を崩す策ならございます」

その一言にラサルスは満足げな笑みを浮かべ、つづく言葉を促した。

第3章　ウサギの正体

翌日、丸くやわらかな刷毛で化粧を施されていたシエラだったが、
「御気色が優れないご様子ですが、どこかお加減でも？」
と女官に気遣わしげな声をかけられた。
「ううん、そんなことないわ。緊張してあまり眠れなかったからかしらね」
曖昧にごまかして微笑んでみたものの、やはり化粧の乗りがよくないのだろう。早起きしてがんばって冷やしてみたもののむくみは取りきれなかったようだ。
しかし女官がそれ以上追及することはなく、瞼を閉じるシエラの顔の上では着々と化粧が進められていた。
（ケンカ、しちゃった……）
閉じた瞼の裏に浮かぶのは昨日の光景だ。
――今日のわたしは部下じゃないのに……っ!!
昨日、そう叫んだあとなにを言われるかとルーシェはうつむきながら待っていたが、スメラギが口を開く前に鐘の音が聞こえてきた。正午を告げる街の鐘だ。
午後から夜会の衣装合わせがあることを伝えてあったためか、スメラギは「帰るぞ」とだけ

促してその場を片付けはじめた。その様子は怒っているようでも呆れているようでもなく、スメラギはただ淡々と片付けるとルーシェを隊舎まで送った。

言い合いはなかった。しかし会話もなかった。

（これってやっぱりケンカよね？　グリフォンが現れるまではいい雰囲気だったのに……）

街長が竜公であるスメラギに向けた目、それに対してお嬢さんとしか言ってもらえなかった自分。それもしかたないとわかっているけれど、その直後にスメラギに叱られて、騎士としてなっていない自分を突きつけられて、デートのときまで説教される自分がみっともなくて、つい言ってしまった。

街人を助けるために自分がしたいと思ったことをしただけ、けして誉められたかったわけではないし、竜騎士としての判断も誤っていたと思う。だがグリフォンに襲われる危機を乗り越えて、竜騎士としての心得がなっていないと言われる前に一言、無事でよかったと言ってくれたなら――部下としてではなく恋人として扱ってくれたなら、自分もきっとあんなことは言わなかった。

（でもそれはきっと、隊長の中でまだわたしが恋人じゃないから……）

その想いを闇の奥に封じるように、シエラはぎゅっと目を閉じた。

「さぁ、できましたよ」

しかし女官の声に促されて目を開くと、鏡の中には目鼻立ちのくっきりした自分がいた。

夜会ならもっと際立たせるための化粧になるだろうが、今日は聖殿での神事だ。あえて無駄な色みを抑えて落ちついた雰囲気を出して、蒼の瞳が映えるようにしてある。

化粧が終わるなり、髪を整える者や装飾品をつける女官と入れ代わった。

女王を戴く国だけあって、顔や髪や爪、服飾や装飾など、部分ごとに飾り立てる専門の女官がいる。動きにくくなるので正装はあまり好きではないのだが、おとなしく飾り立てられて美しく見せるのも王族の大事な務めだ。

女官のひとりが耳飾りを手にする。それをシエラが注視していることに気づいたらしく、声をかけてきた。

「ダイヤの耳飾りだなんて良いものを見つけられましたね。天空神の御許の聖殿に赴かれるのにふさわしい御品ですわ。宝物庫でお見つけになられたのですか？」

「……え？　それってダイヤモンドなの？」

色のついている宝石は紅玉、青玉、碧玉などさまざまあるが、ダイヤモンドは無色透明のはずだ。自分の知らない宝石の一種だと思っていたのだが、女官は大きくうなずいてみせた。

「ええ。ときおりダイヤモンドでも黄色やピンクなど、さまざまな色をしたものがあるんですよ。とても珍しいものです」

他の宝石とちがってダイヤモンドは硬すぎて加工できないので、装飾に適した大きさの石を見つけ出すしかない。それだけに他の宝石と比べてとてつもなく価値が高いことは知っている。

宝石は大地の恵みに数えられるが、なににも傷つけられないダイヤモンドだけは天から授かった石として、天恵を授かり大地を治める王家の象徴とされることも多い。

（そんなすごいものだったの……？）

お似合いですわ、と女官の手によって付けられた耳飾りは、自分のために誂えられたもののように自然に収まった。

女官が王宮の宝物庫にあったと信じるほどの品、一貴族の娘には過ぎたものをスメラギは社交界デビューの夜会のために選んでくれた——

（誕生日に一緒にいられないからって、でもいつか一緒に連れていくって……隊長はちゃんと言ってくれていたのに……）

スメラギに言い返したかった言葉がみるみるしぼんでゆく。

自分が未熟なのはたしかで、竜公の横に立てるような存在でないのもたしかで、王女にも竜騎士にも恋人にもなれない自分が悲しくて感情をぶつけてしまった。完全に八つ当たりだ。

（わたし、ちゃんと謝らないと……そして本当のことを伝えないと。自分の口から）

スメラギになにも話さないまま、神事の場で王女として顔を合わせるわけにはいかない。

泣きたくなる気持ちを必死にこらえて他の飾りを仕上げてもらう。そして女官たちがみな下がってからシエラは侍女に声をかけた。

「あの、黒竜公を呼んできてくれるかしら」

「黒竜公、にございますか？」
青竜公シリスの聞きまちがいかと侍女が問い返す。
「ええ、黒竜公スメラギをここに」
そう明言したが、侍女は頑として反論してきた。
「男性の方をお部屋にお呼びするわけにはまいりません」
「シリスはよく来るわ」
「青竜公閣下は陛下のお許しを得ていらっしゃいますので」
「では中庭の東屋でかまわないわ」
侍女にもさまざま格があり、シエラのもっとも側近くに仕えている彼女は伯爵家縁の娘だ。
彼女の仕事は王女の話し相手になることで、小間使いのような仕事は一切しない。それが人を呼びに行くような雑用を言いつけられたのが不満なのか、まだ侍女は納得できないようだった。
「他にもなにか問題でも？」
すると侍女は「問題ございます」とはっきりと述べた。
「黒竜公はなにかと良からぬ噂の絶えぬ御方、神事に臨まれる殿下の大切な御身になにかございましては一大事にございます」
（――え？　私の心配をしてくれているの？）
雑用を言いつけられたのが不満だったわけではないらしい。

「たしかに噂は多い方だけど、聖竜の加護を受けていらっしゃるわけだし……」
「竜公ともあろう御方が行動を慎まれないのが問題なのです。警務隊にいる兄が黒竜隊長は始末書が絶えないと申しておりました」
（たしかに始末書は多いわよね……）
そのうちの何枚かは自分が原因のはずで、自分も始末書を出している。だが彼女はシエラが竜騎士団で見習いをしていることなど知らない。その警務隊に連行されそうになったこともあると知れば卒倒するかもしれない。
「神事にはその黒竜公もいらっしゃるのよ？　神事の前にお人柄も知っておきたいし」
「お庭とはいえお二人でお会いになったなどと吹聴されれば殿下の名誉に関わります」
庭で会うどころか昨日はデートまでしていた仲なのだが、今日の侍女はなかなか手ごわい。けれどこれが貴族の認識なのかしらね、とも思う。
ローレンシアという国は長い歴史を持つだけあって、古くから続く家や血統、伝統を重んじる。そこになんの後ろ盾もない異国民の子が聖竜を授かり、竜公となって王宮に乗りこんできて、あわよくば大公になろうと目論んでいる――スメラギがそれを耳にすれば「馬鹿かおまえ」の一言で一蹴されそうなものだが、貴族たちはそう思ってはいない。
「じゃあ、王女とは名乗らずに貴族の娘が呼んでいることにしてくれない？　ちょっとお話ししたいだけなの。まったくお人柄も知らずに一緒に神事に臨むのは不安だから。ね、お願い」

「……もしかしてそれが気がかりでいらっしゃったのですか？」
「え？」
「昨日よくお休みになれなかったのは、やはり神事が心配で……？」
まったくの誤解だが、侍女が都合のいい方向に曲解してくれたのでシエラは「そ、そうなの！」と便乗することにした。
「聖殿で天空神と向き合うのに、やっぱり心配ごとはなくしておきたいじゃない？」
そう言いつのるとやっと納得した侍女は「では行ってまいります」と部屋を後にし、シエラは閉ざされた扉を見てほっと息をついた。
（やっと行ってくれた……思わず乗っかっちゃったけど、でも本当にこれから神事なのよね）
夕刻までに聖殿に向かい、夜に聖殿最奥の祈りの間で竜を召喚して竜が成長したことを大祭司に認めてもらう。そこではじめて王族として成人したことになり、その晩は聖殿で祈りを捧げ、明日の誕生日に社交界にお披露目という形になる。
そしてその神事には女王である母と、竜公であるシリスとスメラギが立会人として参列する。大祭司も含めてみな知っている人たちばかり、今さら緊張する相手でもないが、知っている人だけにみっともない真似を晒すわけにはいかない。
シエラは速い鼓動を刻みはじめた胸を押さえて、大きく息を吐き出す。
貴族の娘に呼ばれたはずの王宮で自分が待っていたら、スメラギはどんな顔をするだろう？

（――まずはルーシェとして昨日のことを謝って）

今度こそ本当の自分のことを話す。

（貴族の娘というのは嘘だったけど、隊長への気持ちは本当だから。ちゃんと想いを伝えないと）

心を鎮めるように深呼吸をすると、ゆるやかな風が下ろした銀の髪と耳飾りを揺らして駆け抜けていった。

丸二日ぶりの黒竜隊長執務室で、カイトはいつになく緊張していた。これほど緊張するのは配属になった日以来だ。

室内にいるのは黒竜隊長のスメラギのみ。

この人の噂は学舎時代からよく耳にしていたし、実際に目撃したことも何度もあったので、従者を命じられたときはどんな生活がはじまるのかと恐々としたものだが、仕事をはじめてみると意外と冷淡でも冷酷でも鬼畜でもなかった。

多少訓練が厳しかったくらいで、過ちや手落ちがあると〈死神〉とあだ名される冷たい視線を向けられるものの、不条理に怒鳴られたり暴力を振るわれることは一切なかった。

怒鳴られる回数は後から入ってきたもうひとりの従者のほうが圧倒的に多かったし、いまその従者はこの部屋にいない。スメラギも静かに書類に目を落としているだけだが、カイトの鼓動は収まらず、手のひらに冷たい汗すらにじんできた。

――すべてはたったひとつの噂のせいだ。

「どうした」

自分が凝視していることを察したのだろう。スメラギが書類から視線を上げて見やった。

「あっ、あの、昨日はお休みだったようですね」

「……」

あわてて言葉を継ぐと、なにを今さら？　と無言の零下の視線に晒された。隊長の予定は訊くまでもなく従者として知っていて当然のことだ。

残念ながら自分は言い逃れには向いていない――そう観念して、カイトは真相をたしかめることにした。

「その……昨日、隊長を近隣の街でお見かけしたという話を耳にしまして」

「それは見かけもするだろう。一日中部屋にこもっていたわけでもなし」

「では、あの……」

言いかけたものの、スメラギに凝視されて口ごもってしまった。

――ある目撃者の話によると、昨日スメラギはウサギを連れていたらしい。またある目撃者

によるとスメラギはウサギのぬいぐるみを抱いていたらしい。
　複数名の証言を総合すると、
『スメラギは昨日、ウサギのぬいぐるみを抱いたウサギを連れていた』
　というのが真相らしいのだが、あまりに謎すぎる結論にカイトは混乱した。
（ウサギって言ったら間違いなくルーシェだよな？　それがウサギのぬいぐるみを抱いていた？　赤いぱたぱたではなく？　というかどうしてあいつが隊長といたんだ？）
　どこから突っ込めばいいものか謎いっぱいの噂話に困惑していると、スメラギがひとつ息をついた。
「――街で一人じゃなかったという話なら否定しない」
「そうなんですか!?」
　スメラギに関する噂は話半分に聞いてもまだ多すぎるくらいなので、街に買い物に出たスメラギがウサギのぬいぐるみを買いにきていたウサギと偶然出くわしたのだろうくらいに思っていた。
　だが事はその程度では収まらなかった。
「俺が私用で街に連れ出した。あいつにも話は通してある」
「は!?　団長にですか!?」
（ってことは本気で付き合ってるってことか!?）

カイトは愕然とした。――いつの間に？　というのが正直な感想だ。ルーシェともスメラギともずっと一緒に仕事をしていたはずなのに、ふたりの関係が変わっていたことにまったく気づかなかった。

そういえばここ数日、ルーシェの挙動不審な行動も目撃していた気がするが、あいつがおかしいのはいつものことだからな……と気にも留めなかった。大誤算だ。

「だからといって気にすることはない。なめた仕事をしていたら遠慮せずに叱れ。やりづらいなら俺に言えばいい」

「いえ、そのようなことはまったく！」

「それと張り合う気があるなら受けて立つぞ」

つまりはルーシェに気があるならケンカを売ってこいということだ。「いえいえいえ！　まさかそんな……！」とカイトは後ずさった。

「上司だからって遠慮するな」

「いえっ、まったく心配ありませんのでお気遣いなく！」

そもそも上司の想い人だからというより、王女に手出しなどできるはずがない。

（……そう、あいつは王女なんだよな……）

軍務に就く者は国への忠誠が絶対だ。特に竜騎士は竜を授かった聖女、そしてその聖女の末裔である王家への忠誠心が強い。

女王と王女は敬愛しお守りすべき相手、最初から恋愛対象ではない。
竜騎士の剣の誓いを立てたスメラギにしても、それはおなじはずなのだが――
（まさかこの人、あいつが誰だかまだ気づいていない……とか……？）
その恐ろしい可能性に、カイトの思考が一瞬凍った。
（――――いや！　団長に話を通したっていうなら団長が話すだろ当然！　もちろん王女だと知っていて付き合っているんだよな!?）
聖竜の主である竜公は竜騎士の中でも別格だ。歴代大公も竜公が圧倒的に多い。
しかし王女と知っていたなら街に連れ出したりするだろうか。さらにその街ではグリフォンが出没してスメラギが対処したとも聞いている。もちろんその場にはルーシェもいたはずだ。
もし王女だと気づいているならスメラギがすべきはルーシェを無事王都に連れ帰ることで、グリフォンを鎮めることではない。
（……ということは、やっぱり気づいていないのか……？）
先ほどまでとはちがった意味で、冷たい汗がにじむ。
（隊長も団長に報告をしたって言っていたから、団長は報告を受けたのにあえて教えていないってことだよな？　なんでだ？　まさか本格的に隊長を陥れるつもりか……？）
学舎時代から噂があった。一歳ちがいの聖竜の主が二人、片や王族、片や出自の知れぬ異国の生まれ。そのような者が並び立つなど失礼だと貴族の子弟は事あるごとにスメラギを陥れ、

それはシリスの意図を汲んで行われているものなのだと言われていた。

しかしいつしか当のシリスがスメラギ本人を遊びの対象にしてしまい、今度はシリスに気に入られたことの嫉妬が怒りとなってスメラギに向けられた。シリスもその状況を知っていただろうに、あくまで遊ぶ対象にすぎないスメラギを庇うことはなく、やられたスメラギは容赦なくその場でやり返すという方法でさらに性格に凶悪さが増した。

そして今も二人の不思議な関係はつづいており、シリスはスメラギに懲戒を出しまくる割には絶対に黒竜隊長としての権限を制限しない。根の深い部分で信頼しあっているのだろうとカイトは思っている。

しかし他の見方をする者もいる。――つまりシリスは、おなじ竜公であるスメラギを一発で社会的抹殺しうる機会を探っているのだ、と。

カイトは執務室によく遊びにきて親しげにしているシリスを見ているのでにわかに信じがたいが、たしかにシリスがなにを考えているのかいまだに摑めない。機を覗っているのだと言われればそれが正しい気もする。

（あの方はなにを考えておられるんだ……？）

カイトが目を眇めて凝視していると、「なんだ、言いたいことがあるなら言え」とスメラギに睨まれた。

「あ、えっと……」

団長命令により自分からルーシェの正体を明かすわけにはいかない。だが団長がなにを企んでいるかを探るのは命令違反にならないはずだ。

しばらく逡巡し、その論理に穴がないことを確認して、カイトは意を決して口を開いた。

「あの、ルーシェの家のことについて団長はどのように……」

「――俺がなにって？」

すぐ背後で囁かれた声音にカイトの鼓動が大きく跳ねた。背中に雷が駆け抜け、そのまま息が止まるかと思ったほどだ。

強張る身体でおそるおそるふり返るとそこにいたのはまぎれもなくシリスだった。透きとおる空色の瞳にすべて見通されているような気がして、心臓がばくばくと音を立てる。

「なにか俺に訊きたいことでもあるのかな」

非の打ちようのない笑顔にカイトはぶんぶんと首を横に振る。

「いっ、いえっ！　なんでもありません!!」

「そう？　なんか呼ばれた気がしたんだけど」

気のせいかな、と言うシリスにカイトは何度も首肯した。

（いっ、言わなくてよかったー!!）

――ルーシェの家のことについて団長はどのように隊長にお話しされたんですか？

それをスメラギに訊いていたなら、あやうく自分が社会的抹殺されるところだった。シリス

の神出鬼没ぶりは心臓に悪すぎる。
しかしスメラギは慣れた様子で、シリスに胡乱な眼を向けただけだった。
「なにか用か。王宮に伺候するのは昼からだろう」
「うん、そうなんだけどたまたま通りかかったら君のお客人を見つけたから」
「俺の客人？」
「そう。入っておいで」
シリスに促されて入ってきたのは竜騎士ではなかった。
年は自分とおなじくらい、正装とまではいかないがきちんとした身なりのどこかの貴族の令嬢のようだ。
しかしスメラギは見覚えがないらしく、不審そうな眼を向けつづけていた。
「彼女の主がぜひ黒竜公にお会いしたいんだってさ」
「主？　誰だ」
「それは申し上げられません」
彼女ははっきりとそう述べた。主というからは彼女は侍女にすぎないはずだが、竜公であるスメラギ相手にまったく物怖じする様子がない。
スメラギもそれを不審に感じたようだが、「悪いが俺も忙しい。名乗れない相手に割く時間はない」とさっさと切り上げようとしたところ、侍女はきっと目をつり上げた。

「私の主が貴方に用があると申しているのです！」

「――――は？」

彼女の主は竜公に侮られる相手ではない――つまり竜公より格上ということだ。だがこのローレンシアで竜公より格上、しかも女性ともなると女王をはじめ片手ほどの数しかいない。

（……主ってもしかして、王女なんじゃないのか？）

もし彼女が王女の侍女として主の言葉を伝えにきたなら、彼女の言葉は王女の言葉だ。竜公ごときに追い返されそうになって、無礼千万といきり立つのも無理もない。

そして事情を知っている様子のシリスも、彼女に助け船を出した。

「まぁまぁそう言わずに。昼までまだずいぶん時間があるだろ」

「時間はあっても他にすることがある」

「君もそのうち王宮に出入りするようになるわけだし、こういった付き合いも大事だよ」

たしかに王宮における女性の力は恐ろしい。この国の頂点は女王であり、有力貴族の妻女は女王主催の茶会に参加できるためだ。茶会では男の目がない分、夜会よりも赤裸々に恐ろしい情報合戦がくりひろげられているという。

スメラギも王宮に詳しいシリスの言を無視できなかったのだろう。「行ったほうが話が早そうだな」と息をついた。

「そうそう。ちゃんと時間になったら迎えにいってあげるからゆっくりしておいで」

とシリスはにこやかに告げ、次いでこちらに視線を向ける。その眼は、君はもう事情がわかってるよね？　と告げている。

（やっぱりそうか……！）

「そういうことだから後はよろしく頼むよ、カイト君」

「は……はっ！」

渋々といった体で立ち上がるスメラギとシリスを敬礼して見送ったものの、カイトの許には大きな疑問が残された。

（それってルーシェが王女として隊長を王宮に呼んだってことだよな？　いったいどうする気なんだ……？）

シエラは中庭の東屋の下、大理石の卓子を前に小さなため息をついた。

（隊長、まだかな……）

聖殿に赴くのは午後からなので、今の時間帯は砦の執務室で決裁に勤しんでいるはずだ。ルーシェとしてならすぐに飛んでいける距離が、シエラの恰好をしているばかりに遠い。

卓子の上のティーカップからはまだ湯気が上がっている。すごく長い時間が経ったように思

えるが、実はまだ全然経ってないということだ。
激しい鼓動がどくどくと胸を叩き、その脈動に合わせて耳飾りが揺れている気がする。
今は着ているのは明日のお披露目用のドレスとは別だが、もらった耳飾りを選んだ。こうしておけば自分がルーシェだとわかってもらえるはずだ。
（というか、前にここでお会いしたときもわたしだってことはすぐにわかってくれたのよね）
ただルーシェが王女だと認識してもらえなかっただけだ。
（でもいいの。王女としてお話ししたいわけではないから）
自分が未熟なことはもうよくわかっているし、スメラギの前で王女でいたいわけでもない。
（敬ってほしいわけじゃない。ただ今までどおりに側にいてほしいから、本当のことをお話ししないと）
スメラギは驚くだろう。そして怒るだろうか、呆れるだろうか——渦まく不安をシエラは首を振って追い出した。
もう怖がってはいられない。スメラギに知られる前に自分から言わなければ。
（だって本当の気持ちを伝えたいから……ってこれってもしかして告白!?）
もうすでに付き合っていて、しかも将来の約束もした気がするのだが、自分から告白したことがないことにシエラはあらためて思い至った。
（でも告白もなしにどうやって付き合いはじめたの!?）

あのときは全部スメラギから訊いてくれたので、自分から告げた言葉なんて一言二言だ。
（あとは口づけとか口づけとか口づけとか……っ!?）
今さらながらにその状況を客観的に思い出し、シエラは思わず卓子の上に撃沈した。
激しい動悸がおさまらない。頬を撫でる風は冷たく、それに冷ましてもらうしかなさそうだ。
（隊長がいらっしゃる前になんとかしないと……）
卓子から身を起こしたそのとき、突風がシエラの髪をなぶった。自然に起きた風ではない。
見上げれば翼が空を翔けてゆく。
（グリフォン……!?）
シエラがドレスをつまんで東屋から駆け出すと、距離を置いて控えていた女官たちが「殿下!?」とあわてて追ってくる。
グリフォンは王宮へとつづく石畳に降り立ち、その場は騒然となっていた。近衛兵が槍を構えて威嚇しながら、「竜騎士を呼べ！」と指示を出す。
傷をつけては駄目、そう叫ぼうとしたが、そのグリフォンはすでに左前脚に矢が刺さっていた。矢羽根には紅白の縞模様が入っている。
（この矢羽根……昨日の子!?）
近衛兵が向ける矛先にグリフォンが牙をむいて威嚇している。だがグリフォン相手に及び腰で、そんな槍など前脚に払われればなんの役にも立たない。

「――――動かないで！」

シエラはドレスに締めつけられた腹に力をこめて、ありったけの声で叫んだ。

「王女殿下!?」

ざわめきが起きる中、シエラはドレスの裾を摑みあげて、大理石の石畳を堂々と歩を進めた。

グリフォンの視線がシエラを捉える。

（昨日と恰好はちがうけれど、あなたはわかってくれるでしょう？）

グリフォンは頭もいいし鼻もいい。人の感じ取れない匂いまで嗅ぎ分けて、昨日のルーシェと今日のシエラが同一人物だとわかるはずだ。

現に視線はシエラのみに注がれ、近衛兵に向けていた牙が収まりつつあった。

「背を向けないで、ゆっくり下がって」

シエラはグリフォンから目を離さないまま、傍らの近衛兵に静かに告げる。

「それと包帯を持ってきてちょうだい。遠くから転がしてくれればいいから」

しかし、と反論しかけた近衛兵に一言「命令です」と告げると、シエラは近衛兵が近づけずにいた距離に足を踏み出した。

周囲にどよめきが起きる。その気配に押されてグリフォンの毛がわずかに逆立ったが、シエラは意に介さず話しかけた。

「どうしたの？　また迷子になっちゃったの？」

神の山は王宮のすぐ裏、山に帰る途中に寄ったのではなく誤って山から下りてきてしまったようだ。密猟者に飼われていたので人の傍に近づくようになってしまったのかもしれない。

「会いに来てくれたのね」

優しく語りかけながらシエラが鬣を撫でると、グリフォンはその場におとなしく腰を落とし猫のように喉を鳴らして首筋をすり寄せてきた。シエラはそれを撫で返しながら、グリフォンをその場に伏せさせる。

左脚に刺さった矢羽根模様は赤と白、間違いなく昨日の矢だ。傷は浅いらしく、流れ出た血はすでに金の体毛の上で固まっていた。

そのとき石畳の上を白の包帯が転がってきて、猫が毛糸玉で遊ぶようにグリフォンが本能的に前脚を出しかけたのを、シエラは首筋を抱きしめて止める。

「その矢、抜いてもいい？」

傷口に手を伸ばすとグリフォンの身が強張ったのがわかったが、大丈夫大丈夫と鬣を撫でながら、シエラは一息でその矢を引きぬき、自分の手の届かないところまで矢を転がした。

金糸の体毛には新たな鮮血がにじみ、シエラは白の包帯を優しく巻きつける。止血ではなく、山を駆けるときに傷口に悪いものが入らないようにするためだ。

グリフォンも害意がないことを理解して、おとなしくシエラのするがままになっていた。

「もう痛くないからね」

我慢したご褒美と、鬣に顔をうずめて豊かな毛をわさわさと撫でる。鬣に染みこんだ異国の香りはまだ消えていなかった。

（――本当は優しい子なのに）

その子を捕まえて、香で朦朧とさせて好き勝手に飼い慣らして。

『人に飼われていたグリフォンだ。研究しがいがあると思わない？』

そんな声音が耳の奥に蘇り、シエラはぎゅっと目を閉じた。

グリフォンは優しく、しかし従うことはない不羈の生き物だ。

（絶対にそんなことさせない）

聖獣たちが心穏やかに神の山で生きていけるように、彼らを守るのもまた自分の務めだ。

（民だけじゃない――この国に住むみんなを、守るの）

その想いを胸に、シエラは鬣を撫でつづけた。

❦

――神事を控えているときに呼び出すなんて、どこの馬鹿だ？

さすがに口にはしないものの、スメラギの胸の中で渦巻く感情は態度に表れていたのだろう。曲がり角で先導していた侍女がちらとふり返り、一瞬目が合ったが苛立ち交じりに視線をふい

っと外された。その態度が彼女の胸中を雄弁に物語っている。

――どうして私がこのような者を呼びにいかなければならないの。

気に食わないのはお互いさまということだ。

用があるなら自分で来いというのがスメラギの本音だし、みずから来たところですげなく断っていたのも事実だったりする。しかし今回この誘いに応じたのはシリスが勧めたこともあるが、ひとつの可能性に思い至ったからだ。

（――呼んだのはルーシェかもしれない）

竜公は侍女ごときに侮られるような地位ではないが、リヴェア家といえば聖女の御代からつづく旧家、侍女の気位が高いのも理解できる。

そしてルーシェが貴族の娘らしくないと思ったのもまさにその点だった。

学舎には貴族出身の者がいる。国全体から見れば全国民の一割にも満たない貴族だが、学舎の中では半分以上を占めていた。竜を授かった聖女を〈女王〉として頂点に戴き、竜の加護を受けた者たちが〈貴族〉として国を支えてきたのだから当然だ。

貴族連中の意識は家格が中心だった。どこそこの家は何代前に竜公を輩出しただの、あそこの家は何代前に王家の血が入っているだのという話ばかりで、系譜と無縁の平民とはあきらかに溝があった。

だがルーシェにはそれがない。

系譜をひけらかすのは過去の栄光にしがみつく者に多く、貴族社会のほぼ頂点にいるシリスなどはなにを今さらといった観で話題にもしなかった。シリスの遠縁であるルーシェも、自分が旧家のお嬢様であることはもはやあたり前すぎて意識していなかったのかもしれない。

しかしそのシリスが、『彼女の家は竜公の名だけで受け入れてくれるほど甘くはないよ』と忠告してきたくらいだ。ルーシェ本人に自覚がなかっただけで、ルーシェの家では竜公といえども平民上がりの新参者という認識なのだろう。

だがもし呼んでいるのがルーシェなら社交界デビューは明日の夜会のはず、なぜ王宮にいるのかとも思ったが、今日は聖殿で神事がある。リヴェア家の娘として用事があって、王宮に伺候しているのかもしれない。

このような時間の隙に話したいことといえば、まちがいなく昨日の一件だ。

『――今日のわたしは部下じゃないのに……っ!!』

彼女は普段はとても素直なのにときおり頑固で、そして感情を爆発させる。

ルーシェの心の中に確固たるなにかがあって、それに反することは頑として受け入れないし、それに己が達しないときは悔しさにへこむ。昨日の件はおそらく後者だ。

竜騎士団に来たばかりのころは毎日叱りつけていたし、彼女も素直に従っていたが、どこかの物陰で泣いていたという目撃情報も耳に届いている。けれども自分の前では泣かないし、泣き言も言わない。貴族生まれのお嬢様にしては大したものだと思っていた。

その彼女にああ言わせてしまったのは自分の失態だ。
恋人ではなく部下としての立場を優先したつもりはない。だがもっとも伝わりやすい言葉を選んだらそうなっていた。
前の日にもグリフォンに近づいた彼女、そのときどれだけ自分が恐怖を感じていたか、彼女は知らない。
従者として目の届く範囲に置いておけば安心だと思っていた。なのに彼女は平然と危険に首を突っ込んでゆく。自分に謝りながらも心配をかけることをやめようとしない。
（そんな相手にどうやって伝えろと？）
言葉がきつくなったのは、こちらの気が立っていたせいもある。それもみなルーシェが危ないことばかりするからだ。
無事でよかった。心配をかけるな。そう言って抱きしめたなら彼女は素直に受け入れただろうか？　――なにも変わらない気がしたから言葉で責めた。
言い過ぎたとは思う。だが間違ったことは言っていないし、これ以上危険なことをしてほしくないというのが本心だ。傷つけたのは悪かったが謝るつもりはない。だから昨日もあれ以上なにも言わなかった。
――だがあの後、悔しさの涙をこらえて頬を赤く膨らませた顔がすごく可愛く思えた。
頬をつつけば今にも泣き出しそうで、午後から用事があると聞いていたので泣かせては困る

かと触れずにいたが、本当は指でその感触を、唇でその熱を確かめたかった。

けっして部下としてしか見ていないわけではない。失いたくない、これからもずっと側にいてほしいから危険な真似をしてほしくないのだと、そう伝えたほうが良かったのだろうか？

（どうすればあの見境なく跳ねまわるウサギを止められる？）

砦から裏道を通って王宮に抜けたとき、スメラギははっと現実に引き戻された。

遠くから聞こえるざわめきや駆ける鎧の音――緊迫した空気。まるで敵影を発見したときの砦のようだ。

侍女も異常を察したらしく、足早に薔薇のアーチを抜けると廊下を駆けていた近衛兵を呼び止めた。

「なにがあったのです」

近衛隊は貴族の子弟で構成されており、一貴族の侍女風情が呼び止めていい相手ではない。

しかし呼び止められた若い近衛兵は侍女に敬礼した。

「グリフォンが現れましたのでお気をつけ――黒竜公!?」

スメラギには面識のない相手だったが、こちらは竜騎士の隊服姿で徽章をつけている。そして髪と眼の色から一目瞭然だ。

正対して敬礼する近衛にスメラギは答礼して、言葉のつづきを促した。

「グリフォンが王宮正面に降り立ったのですが、そこに王女殿下がいらっしゃったのです！」

「殿下が!?」

王女という一言を聞くなり駆けだしたスメラギの背後から声が追ってきた。

「どうか黒竜公、殿下をお救いください――！」

王宮正面、スメラギが数ヶ月前に竜公の聖杖を授けられた場所には人だかりができていた。しかしそれだけの人がいるにもかかわらず、その場は水を打ったような静けさに満ちている。人の足で二十歩ばかりの距離をおいてできた輪の中心を、みなが息を詰めて見守っていた。

（なにがあった……？）

もはや手遅れだったかと最悪の予感に凍る思いで覗きこむと、大理石の石畳の上でグリフォンが伏せていた。その鬣に頬を寄せ、撫でている少女がいる。

髪型がちがう。髪の色もちがう。恰好も隊服ではなくドレス姿だがあれは。

（ルーシェ……か？）

気を許したグリフォンが甘えるようにすり寄って、ルーシェのあざやかな銀の髪が揺れる。その髪の間から覗く耳飾りは見覚えがあった――あれは昨日、自分が贈ったものだ。

あそこにいるのはルーシェに間違いない。

（なぜルーシェが……王女はどこだ？）

そのとき、すぐ傍らにいた侍女の口から思わぬ言葉が漏れた。

予想もしない光景に現実を受け止めきれなかったか、侍女は言葉を漏らしたきり口を開いた

ま意識を失いくずれ落ちる。すぐ側にいた近衛兵がすかさず侍女を抱きとめ、そっと人ごみから連れ出した。しかし。

（いま、なんと言った……？）

侍女の絶えそうな息の合間から漏れた言葉を、スメラギは聞き逃さなかった。

殿下、と――彼女はそう言わなかったか。

（王女はどこにいる？）

この場でもっとも守られるべき相手、王女シエラ・アーシェラータ・ローレンシア。

彼女を守るために自分はここに駆けつけてきたはずだ。

しかし近衛が取り巻いて守っているはずの王女を探すが、スメラギにはそれらしき者を見つけることができなかった。

シエラは甘えてくるグリフォンを抱き返して頬を寄せていたが、はっと我に返って今の状況を思い出した。

グリフォンから身を離さないまま視線だけちらりと動かしてあたりを探ってみると、数十歩の距離をおいて近衛や女官、官吏たちに遠巻きにされていた。みな祈るように手を組み合わせ

て、一様に息を呑んでこちらを見ている。
（どうしてそんなに心配して――――あっ、今は王女だから!?）
昨日まではルーシェだったが、今は女王の一人娘である王女シエラだ。グリフォンの豊かな鬣がわさわさと気持ちいいからといって、いつまでも顔を埋めているときではない。
竜では感じられないその感触が名残惜しかったが、シエラは身を起こして「ねぇ、翔べる？」と訊ねた。
（今日はお財布がないけど帰れるわよね？）
蒼の瞳で語りかけるとグリフォンは心得たように立ち上がった。
「また淋しくなったら遊びに来てね」
翼をもたげたグリフォンにもう一度頬を寄せて囁くと、グリフォンは応えるように二、三度羽ばたいてそのまま天へと舞い上がった。
それとともに、周囲から「おお！」と歓声が沸き上がる。
（そう、今はシエラだもの。しっかりしなきゃ）
神の山に帰ってゆくグリフォンを見送ると、シエラは視線を優雅に地上に戻した。
取り巻いていた人々はグリフォンを鎮めた王女を称賛の眼で見つめていたが、
「――王女シエラ殿下、万歳！」
誰が口火を切ったものか、その声とともに称賛の声が次々に上がった。次いで拍手が沸き起

こり、シエラは鷹揚に微笑んで見せた。もちろんまったく初めての経験なので、母がしていたことの見よう見真似だ。

（優雅に、優美に、おしとやかに！）

行儀作法の講師であるセルヴァンテス侯爵夫人の言葉を頭いっぱいに埋めて、照れや恥じらいを心から追い払う。母の擬態はうまくいったらしく、彼らの眼差しから称賛の色が損なわれることはなかった。

シエラは取り囲む人を最後に見渡して、この場を立ち去るつもりだった。

しかしその動きは、ある一点で止まった。

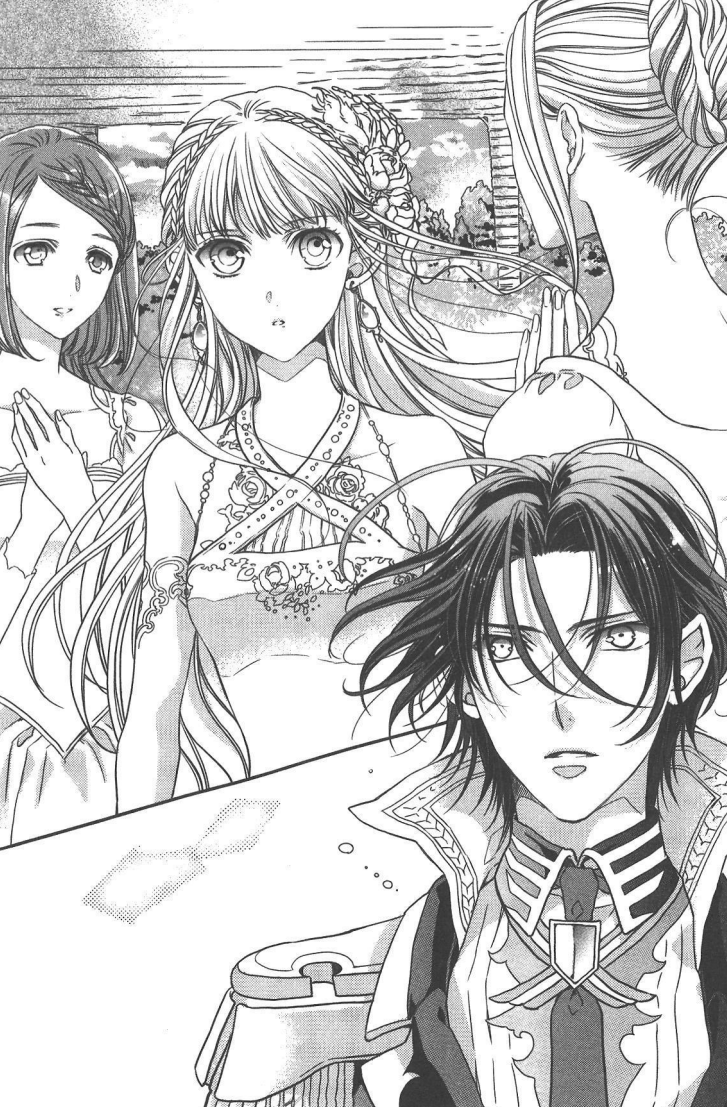
幾重にも取り巻く人々、その後ろからこちらを見ていた黒の双眸。

（隊、長……？）

――――スメラギが、こちらを見つめていた。

（なん、だ、これは……）

ルーシェは人垣の中心で、まるで友人に話しかけるようにグリフォンに言葉をかけていた。



グリフォンも言葉を解しているのかルーシェに甘えかかっていたが、やがて周囲の状況を把握したらしく、ルーシェがなにか語りかけると言われるままに翼を広げて翔び立った。

その羽音は周囲のどよめきにかき消され、グリフォンが去りゆくのを見届けるべきだったのだろうがスメラギはルーシェから目が離せなかった。

ルーシェは視線を地上に戻すと、息を詰めて見守っていた人々に穏やかな笑みを浮かべて見回していた。

(あれは……誰だ……?)

この数ヶ月、ずっとルーシェを見ていた。気分次第でいろいろ表情が変わる、感情がわかりやすい娘だった。

(しかしあそこにいるのは誰なんだ?)

いろんな顔を知っているはずなのに、ルーシェのあんな落ちついた表情を自分は知らない。

(まさか別人か?)

そんな想いがよぎったとき、すぐ側にいた衛兵が叫んだ。

「――王女シエラ殿下、万歳!」

(王女? いったいどこに王女が――)

その衛兵の視線の先を追うが、そこには人垣の中心に立つルーシェの姿しかない。

みなが口々に王女を誉めたたえ、拍手が湧く。そのような状況にもルーシェはなんら驚く様

子を見せず、穏やかな蒼の瞳で歓声に応えていた。
（あれは、いったい誰なんだ……？）
髪の色があざやかな銀色であることを除けば見た目はルーシェそのものだ。双子の姉妹でもいたのかと思ったが、それではあの耳飾りの説明がつかないし、ルーシェ本人も一人っ子だと言っていた。
どういうことだと彼女を凝視していると、彼女の視線がこちらに向いた。
よく知る蒼の瞳が自分の姿を捉え、見開かれる。
そしてわずかに紅をひいた唇がかすかにふるえた。——隊長、と。
その声が聞こえるはずがない。歓声にかき消されなくとも届くはずがない距離だ。しかしたしかに自分には聞こえた。よく知るルーシェの声でそう呼ぶのが。
「おやまぁ……」
別のよく知る声がすぐ背後からする。なに？　とふり返る間もなく、がしっと首に腕を回された。
「はい、ラギ君はこっちに来てくれるかな」
その細身と優雅な身のこなしからは想像できない力で、スメラギはなかば強制的に王宮に連れ込まれた。そしてシリスは強引に一室に押し込み、逃げられないように扉の前に陣取る。
「見たよね」

なにをとは言わない。言うまでもないことだからだ。
「……どういうことだ」
「なにも説明いらないでしょ。君が見たそのままのことだよ」
「おまえ、まさかまたあいつを――！」
するとシリスは「ちがうちがう」と手を振った。
「替え玉にしたわけじゃないよ。それにまたと言われても、一度も替え玉にしたことないし」
「なにを言って……」
言いかけたところに、シリスの背後でノックの音が響いた。シリスの返答前にそのノブは回され、現れた姿にスメラギは息を呑んだ。
ルーシェかと思ったが入室者の隊服は男性もの、それはルーシェではなく団長付きの従者ユリウスだった。
「殿下はお召し替えのため、聖殿への出立時間が遅れるとのことです」
彼は抱いていた赤い幼竜をシリスに差し出しつつそう告げ、「了解」との返答を得てすぐに部屋を辞した。
その間スメラギはユリウスを凝視していたが、よく見てみればさほどルーシェに似ているわけでもない。連れていた幼竜に意識が引っ張られたのかもしれないとも思ったが、シリスの執務室で見かけたときからどこか似ている気がしていた。

閉ざされた扉を呆然と見ていたスメラギに、ふり返ったシリスが告げる。
「ルーシェに似てた？」
言い当てられて、スメラギの呼吸が詰まった。
「似てても全然不思議じゃないんだけどね。彼もルーシェの従兄だし」
――彼も。
その一言が示す相手はシリス自身だ。
「彼、侯爵家の出なんだよ。フェルディナンド侯爵家、知ってるだろ？」
当然知っている。聖女から聖竜を託された騎士の末裔――亡き先代大公の生家だ。
大公の生家のユリウスと、女王の甥であるシリス、その二人がルーシェの従兄ということはつまり。
「替え玉なんかじゃない。ルーシェが王女なんだよ」
その一言に、くらり、となにかが頭の中で揺れた。
「……ウサギだろ？」
「王女だよ」
「ウサギだろ!?」
「ウサギだけど王女だよ」
「放し飼いにもほどがあるだろ!?」

身を乗り出したスメラギをシリスはまぁまぁそう熱くならずにと押し返し、「放し飼いねぇ」と苦笑した。

「君はウサギウサギっていうけれど、王家の女の子は成人するまであの髪型なんだよ。ほら、ウサギってよく絵画にも描かれるように豊作とか繁栄の象徴じゃない？　その祈願も兼ねてね」

「そんなことはどうでもいい！」

「そう？　ここけっこう重要なとこなんだけど。それにたしかに放し飼いだったけど、ちゃんと君という首輪はつけていたし、問題はなかっただろ」

首輪は俺か！　その事実に眩暈を覚えたスメラギは、シリスに促されるままソファーにとさっと腰を落とした。

混乱のためか、頭の中で重いなにかがめぐっている。それはラサルスの城に入りこんだときに嗅いだ香にも似ていて、スメラギは腿の上に肘をついて重い頭を支えた。

なんとか息を整えて顔を上げると、シリスは斜向かいのソファーに腰掛けて幼竜と遊んでいた。幼竜はずいぶんシリスになついている。シリスは何度も黒竜隊執務室に遊びに来ていたが、ルーシェの肩にいた幼竜に触れているのは見たことがなかったのに。

そういえば、エルヴァでルーシェが行方不明になったときもこの幼竜はおとなしくシリスの腕の中に収まっていたことを今さらながらに思い出した。

（……よほど昔から知った相手だったということか）

その現実にさらに打ちのめされる。

「……どうして黙っていた」

「俺が彼女に言ったんだよ。竜騎士団では身分を隠すようにって」

「なぜだ」

「だって王女の竜がこんなだって知れてみなよ。王家の威信に関わる大問題だよ？」

自分のことを言われているとわかっているのかいないのか、幼竜はシリスの手に無邪気にじゃれついている。

「王家の人間が成人として表舞台に出るためには竜の成長が必須だ。けれど王女はいっこうに姿を現さない。それは大公の死を実際に目にして心を病んだせいなんじゃないか――そんな噂があったけど、ある意味当たっていたんだよ。事実、彼女は大公の死をきっかけにこの子が成長しないことを望み、この子のせいで表舞台に出られなかったわけだから」

王女の病状は自分も懸念していたことだった。だが自分はルーシェの前で大公――先代黒竜公の話をしたことがなかったか。

（たしか――竜公叙爵の直前か？）

竜公の名を受けないのかとルーシェに訊かれて、先代黒竜公に拾われた話をして、その名を継ぐと言ったとき。

自分を拾った先代黒竜公は大公殿下だと告げたとき、彼女は驚愕していた。
あのときは大公が亡くなった戦で彼女の父もまた亡くなり、そのときのことを思い出して泣き出したのかと思っていた。だが彼女が王女だというなら話がちがう。
（ルーシェは先代黒竜公が大公だと……自分の父だと知らなかった……？）
「あの子ね、父親の死を見てしまった衝撃で、先代様の記憶全部失くしちゃったんだよね」
「――――!!」
「父親が竜騎士であることは俺から伝えておいたけど、黒竜隊にいたことも、〈闇〉の聖竜の主であったことも綺麗さっぱり忘れてて。そんな状態で竜を授かってしまって大丈夫なのかなと思っていたら、案の定この子は幼竜のまんま全然育たなくてさ。そりゃそうだよね。竜に関する感情は三歳のときのまんま止まってるんだから。このままじゃまずいかなと荒療治で黒竜隊に放りこんでみたんだけど、ものの見事になにも思い出さなかったね。父大公を戦で亡くして、この子を戦に出したくないという想いが成長を邪魔してたんだ。思い出したのは君と聖殿で一晩過ごしたときなんじゃない？　おかげで大きくなれたりこの大きさに戻ったり、なんか不思議なことになっちゃったけど、でも竜騎士団に入る前はろくに翔べもしなかったんだからずいぶん成長したというべきかな」
そう、この幼竜が初めて翔んだとき――
「あいつ、砦から落ちそうになってたぞ!?」

翔んだ幼竜を追いかけて、ルーシェもろとも砦から落ちそうに――どころか実際に砦から落ちていた。

「王女の身になにかあったらどうするつもりだったんだ!?」

「君が助けたからなにもなかったじゃない」

「それは偶然だ！」

「もう過ぎてしまったことが偶然だか必然だかなんて知らないよ。ただ俺が知っているのは、歴代の王女は誰ひとりとして空で事故死していないということだ」

「なに……？」

「竜を授からなかった王女もいないし、空で亡くなった王女もいないんだよ。何百年とつづくローレンシアの歴史の中で、誰ひとり、ね」

シリスの示す現実は、偶然の一言では片付けられない確率だった。学舎で学んだ者なら空の恐ろしさは嫌でも思い知らされる。訓練中に亡くなった同期も一人や二人ではない。

「もし君が間に合わなくても、この子がなんとかしていたんじゃないかな。王家の人間――特に聖女の直系の末裔である彼女は天空神に愛されている。空も聖獣も絶対に彼女には牙を剝かない。先日来のグリフォンの様子を見てもわかるだろ。香で操らずにグリフォンが心を許すのは陛下と彼女くらいなものだよ」

俺も直系に近いけど乗れるかどうかは微妙だと思うよ、とシリスは続ける。

『やっぱり血かな』

グリフォンを鎮める彼女を見てシリスが呟いていたのは、リヴェア家の血ではなく聖女の血のことだったのだ。

彼女が王女本人だった——その事実で、第三皇子が来たときの無謀な行動も、ときおり見せる貴族の娘らしい片鱗も物怖じしない性格も、すべてがつながった。

「……本気で誰にも話さずに竜騎士団に放りこんだのか」

「こちらからは一切ね。それでも気づいた人もいたみたいだけど」

「誰だ」

「グレンにレオンファルド、それに君の部下のカイト君とか」

「ほとんどじゃねぇか!!」

「しかたないよ。グレンは大公殿下の幼なじみであの子のことは生まれた頃から知ってるし、レオンファルドは俺の直部下でユリウスとよく顔を合わせていたし、カイト君には陛下と彼女が親子水入らずでいるところを偶然目撃されちゃったからね」

カイトが王宮に上がる機会といえば、王女の替え玉をするルーシェの護衛のために自分が王宮にいたときくらいだ。あのあたりからカイトがなにか言いたそうな素振りを見せたことが何度かあったものの、てっきり業務の話かと思っていた。

勘弁してくれ……とスメラギは腿についた両腕に頭を沈める。

「でも君は気づかなくて良かったじゃない」
「なにがだ！」
「王女だって知ってたら君、手を出さなかったでしょ？」
話がいきなり次元を越えたどこかに移り、一瞬、スメラギは己の居場所を見失った。
「――――王女相手にそんな不埒な真似できるか！」
「へー、したんだ？　不埒な真似？」
くわしく教えてほしいなぁとシリスは満面の笑みを浮かべる。
「言っておくけど嫁入り前の大切なお姫さまだからね、事によっては責任問題だよ？」
嫁入り前後関係なく本物のお姫さまである上に責任の種類がちがう。しかしいまのスメラギは現実を受け入れるのが精いっぱいで、そこまで頭が回らなかった。
「王族なんて所詮こんなものだよって、俺でかなり認識を改めさせてあげていたつもりなんだけど」
「余計なお世話だ!!」
反射的に噛みつくが、心の中で渦巻く感情はシリスの軽口のせいではない。
なぜ。どうして。まだ飲みこみきれない現実が頭の中でぐるぐる回り、スメラギは握りしめた拳を膝に叩きつけた。
その苛立ちが何に由来するものなのかすらはっきりつかめない。

それはシリスも理解しているらしく、ソファーから立ち上がると力のこもった自分の肩に手を置いた。

「まぁ出立までの時間に余裕ができたことだし、しばらく一人で心を鎮めるがいいよ」

「出立……？」

「ほら、現実から逃避しないの。午後から王女の随伴で聖殿に行くんだろう。こんな状況だけど、頭冷やしてちゃんとお仕事しようか」

正装の装具はあとで持ってきてあげるから。そう言ってシリスは部屋を出ようとしたが、スメラギは膝に視線を落としたまま問いかけた。

「……なぜ黙って俺に預けた」

隊員のみなに黙っていてもかまわない。しかし預けるならせめて自分だけには話すべきだったのではないのか。

「それはシエラじゃなくてルーシェに育ってほしかったから」

（シエラではなくルーシェに……？）

「そして君自身にもね」

今のスメラギにはとうてい理解できない言葉を残して、シリスは部屋を後にした。

野生のグリフォンとその血に触れたからと、シエラは白衣姿で再度清めの水に身を浸した。
白亜で覆われた一室に湧き水が引き入れられ、白の階段を底まで下りていくとちょうど水面が胸のあたりの高さになる。水面には朝摘みの花が無数に浮かべられ、四隅は四色の竜が囲んでいた。
シエラの真正面に立っているのが、聖女と聖竜の像だ。
神の山から湧きあがる水と神の山で摘んだ花。水で身を清め、花で心を鎮める——そのための場所であるはずなのに、シエラの心の中は激流が渦巻いていた。
（——見られた）
自分と目が合ったことでさらに見開かれた黒の瞳。距離はあったが見まちがいではない。絶対にそこにいるのはルーシェだと、ルーシェは王女なのだとスメラギに気づかれた。
（こんな形で知られるなんて……！）
心乱れながらもシエラは今朝行ったのとおなじように聖女の像に祈りを捧げる。そして背を向け階段を上ると長い白衣がぴたりと身体に張り付いた。
隣室では拭布を手に構えていた女官たちに取り囲まれ、白衣を脱がされるなり下着を着せら

れる。シエラが人形に徹しているうちに長椅子に横たわらされ、化粧がはじまった。

なにも考えなくていいのが救いだ。頭の中はぐちゃぐちゃでも、ただ委ねていれば全部女官がしてくれる。

今はただ、スメラギと話がしたかった。しかしこの仕度のやり直しで聖殿への出立時間が押している今、話す時間は取れない。

朝にかけた半分以下の時間で化粧は仕上げられ、新たに用意されたドレスをまとう。ドレスに合わせて髪を先ほどとはちがう形に結われ、鏡越しに見える並べられた装飾品も一変していた。

（……あ）

その中に、スメラギにもらった耳飾りがなかった。

「あの、ピンクダイヤの耳飾りは？」

「あれもお似合いですけれど、ドレスのお色が変わりましたから……」

「あれを包んでほしいの。持っていきたいから」

「聖殿に、でございますか？」

遊びに行くわけではないとわかっている。それでも今はスメラギとつながる唯一のものである気がして手許に置いておきたかった。

しかし先程のグリフォンを思い出して怯えているとでも思ったのだろう。シエラの不安そう

な顔を見てとった女官は、「天空神のご加護がありますように」と渡してくれた。

「竜公がお待ちです」

すべての用意を終えてシエラが王宮を出ると、近衛兵が剣を捧げて道の両端にずらりと立ち並んでいた。その先で控えていたのは二人の竜騎士。〈空〉と〈闇〉の聖竜を従えたシリスとスメラギが膝をついて控えている。

（隊長……）

会いたかった人がこんなに近くにいる。ちゃんと話がしたい。なのにその場にいるみなの目が自分を王女にする。

「――大儀です、青竜公、黒竜公」

伝えたいのはこんな言葉ではない。スメラギが聞きたいのもこんな言葉ではないだろうに、今はなにも告げることができない。

先任竜公であり竜騎士団長でもあるシリスがシエラに口上を述べたが、その隣で顔を伏せているスメラギが気になって心まで届かなかった。

「聖殿への同道を許します」

型どおりにシエラが告げると、二人が面を上げる。シエラの心がびくりと竦んだが、表に出すのはなんとかこらえた。

立ち上がったスメラギの双眸にもはや驚きの色はなかった。とはいえ納得している様子もな

くこちらを見つめている。
それはエルヴァ砦で感じた壁とはまた異質なもの。ルーシェへの拒絶ではなく、王女に対する敬愛でもなく、見知らぬなにかを見る目だった。
（隊長を傷つけた……）
避けたかった最悪の事態に胸の奥が痛み、かすかにしびれを覚える手でシエラはシリスの手を取り、青竜に腰かける。
ドレス姿なので横乗りだ。近衛の敬礼を受けて翔び立ち、高度を上げてゆく青竜の上でシエラは手綱を取るシリスに問いかけた。
「……言ったの？」
「言ったよ」
返されたのはただ一言。
たったその一言が神の山の上に垂れこめる雲のように、シエラの心に重くのしかかってきた。

第4章　夜明けの光

〈空〉の聖竜に乗り厚い雲を抜けると一気に視界が開け、シエラの頭上に空が広がった。
出立の時間が押したためすでに太陽は地平へと沈み、空の大半が群青色に染まって夜を迎えようとしている。
視線を下に向けると雪の世界だ。
〈神の山〉の上方は一年中溶けることのない雪に覆われている。その雪は冬になれば山の中腹にある王宮にまで下りてきて、秋の終わりの豊穣祭が行われるころには王宮もまた雪に閉ざされ、王宮は山裾の冬宮へと移る。
隠れゆく陽光が白雪を照らす中、雪の白とは異なる一本の白線があった。聖殿へとつづく白亜の参道だ。先に着いていたスメラギとデュラクの姿もある。掃き清められたそこにシリスが青竜を下ろすと、翼にあおられた周囲の雪がきらきらと舞った。
青竜から降り、そのままシリスの手に指先を乗せ、長い参道を行く。
参道の両脇に並ぶ彫像は、すべてが竜であるのにすこしずつ姿がちがっていた。作られた当時にいた竜の姿を象ったものなのかもしれない。
百体ちかくの彫像の先にある聖殿――ここに来るのは、ルーにひどい言葉をぶつけて行方不

明になってしまったとき以来だ。

聖殿に足を踏み入れると、頑丈な石造りの建物の中は外の冷気とはまた異なる重々しい冷気で満たされていた。等間隔で点された火だけが行く先を指し示し、先の見えない廊下は異界の入口のようにも思える。

（たしか以前は影が襲ってきて……）

すでにそのとき意識が混濁していたのだろう。廊下の途中で意識を失っていたところをスメラギに救出され、一晩を共に過ごした。そのとき分け与えてもらった熱はまだ覚えている。けれども今、そのスメラギは背後に控えるのみだ。

廊下を抜けると最奥部の扉の前にはひときわ大きな灯りが点されており、その光で廊下の脇にいくつか扉があることがわかった。

シリスとスメラギが正面扉を左右に開くと、その先はきらびやかな光に包まれていた。

ドーム状で高く抜けた天井、光源は先ほどと変わらず燭台だけだが、壁が質素な石から白亜に変わっただけで白亜に混じる石がきらきらと光を反射させる。

五色の竜の像が見守るその祈りの間、そこで女王と大祭司が待っていた。

女王は白一色のドレス姿、飾り気の少ないドレスがすっと伸びた背と居ずまいを見せつける。

『比べられるよ？』

そう言ったシリスの言葉がよくわかる。

外見ばかり似ていてもその立ち姿に表れる芯の強さは真似できない。見ているこちらの背筋までぴんと伸びる気がする。それでいて優美さを失わない姿に、自分の母親ながら感嘆の息が漏れた。

背後にいたシリスとスメラギが女王と大祭司の脇にそれぞれつく。女王、大祭司、竜公と、神事の立会人みながそろった形だ。

（隊長に見られてる……）

寒さだけではない震えを抑えながら、シエラは侯爵夫人に教わったことを脳裏に浮かべ、わずかに腰を落として一礼する。そして視線を地に落としたまま、大祭司の言葉を待った。

「――ローレンシア女王が娘シエラ・アーシェラータ・ローレンシア。

天空神の恩寵を享け、御遣いたる竜の加護を得しことをここに示しなさい」

齢八十を超えてなお朗々とした声が祈りの間を満たし、シエラは面を上げる。

そして天恵を受け取るように、絹の手袋に覆われた両手をドームの天井に向けた。

「天空神より授かりし御遣い、我が呼びかけに応えよ――ルーティア」

ほとんど呼ぶことのないルーの本当の名を呼ぶと、成竜姿の赤竜がドームの天井付近に姿を現した。どこの窓も開いておらず成竜の通れるような大きさの窓がないにもかかわらず、だ。

竜の姿は天空神の恩寵が形を取っているだけ、ただの翼ある幻獣ではなく聖獣と呼ばれる所以でもある。

赤竜は大きく羽ばたきながら、ゆっくりとシエラの前に下りてきた。その体躯はスメラギやシリスの竜より二回りばかり小さいが、シエラの年相応には成長している。

（ちゃんと大きくなれるようになったんだものね）

これも竜騎士団に入り、スメラギと出会ったおかげだ。父の後を継ぐ黒竜公がスメラギでいてくれたからこそ、自分は父の死を受け止めることができた――

自然と視線がスメラギに吸い寄せられたシエラは、ルーを見つめるスメラギの瞳に苦しげな光を見つけて、はっと現実に引き戻された。

（そう、わたしはまだ隊長に本当のことをお話ししてな……あっ！）

その意識の隙を突くように、祈りの間にぽんっと音が上がった。

まばゆい光がその場を照らし瞬きをすると、その場から成竜の姿は消えていた。

代わりにそこにいたのは授かったばかりの大きさの一匹の幼竜――

（ルっ、ルーがもどっちゃった……！）

空気が凍りつく中、みなの視線を一身に浴びるルーは事情がわからず、なになに？　と首を伸ばして見回している。

（ど……どうしよう……）

思いもかけない出来事に、立ち会っている者たちは息を詰めている。

（だってルーが大きくならないと成人とは認められなくて、王女としてお披露目ができなくな

るから、私はこの日のために竜騎士団に入ってがんばってきたのに――）

すべてはこの神事のため、まだルーが成竜になれる時間が短いとはいえ、まさかこんな一瞬で戻ってしまうとは思わなかった。

ルーが戻ってしまったのは自分が集中を途切れさせたからだ。

（私の、せい……）

主の姿に目を輝かせるルーに対し、シエラは立ちつくすことしかできない。

歴代の王女で今までこのような事例があっただろうか。いや、聞いたことがない。たとえあったとしても歴史の渦の中に沈められたのだろう――その王女の名と共に。

（……私、どうすればいいの……？）

頭が混乱してなにも思い浮かばない。ただ唇から震える息が漏れるだけだ。

（どうすれば……）

なにもできないままシエラがその場に立ちつくしていると、大祭司が白の長衣を引きずって歩み出てきた。

そしてみなの中心できょろきょろと様子を探っていたルーを抱き上げ、九年前とおなじようにルーを長衣に覆われた腕に乗せ、シエラに差し出した。

「この竜はまたずいぶん変わった能力をお持ちのようですな」

（え……変わった能力？）

たしか赤竜隊長のグレンが似たようなことを言っていた気がする。そしてその能力を持つ竜は今はいないのだと。

（でもたしか、なんの役にも立たない能力だったような……）

「この能力はあなたが背負うべき責務を支えるために天空神が与え給いしもの。重き荷やもしれませんが共に歩んでゆきなさい」

（え、じゃあ……）

「成長の証をしかと見届けました。これからも精進なされませ」

目元の皺をさらに深くして微笑みながら大祭司は述べる。

シエラが伸ばした手にルーが喜んで乗り移ってきて、神事は無事終了した。

神事が終わると、シエラはルーとともに最奥の部屋に案内された。

祈りを捧げるための部屋、そしていつも母がいた部屋だ。通常は神事を執り行うのは女王なので、母がこの部屋で祈りを捧げていた。

はじめて立ち入る部屋を、シエラはルーを抱いて見渡した。

広さは隊舎の自室ほど、部屋にあるのは竜の彫像だけで、七歳の誕生日を迎える晩に神託を

受けた部屋に似ている。だが寝台はなく、暖を取るための上着と毛布が用意してあるだけだった。

竜の彫像の両横には灯りが煌々と点っているが、部屋を照らし出すには光源が足りない。祈りの間につづく扉とは別に外に出るための窓があり、はめ込まれたガラスからは露台が見えた。掃き清められていた大理石の露台には、神事のうちに降ったらしい雪がうっすらと積もっている。

（やっぱりいつもの部屋とはちがうのね）

母の神事に同行していたシエラは、いつもは別の部屋に通される。そこには王宮と比ぶべくもない質素なものだが寝台やソファーもあった。けれどもルーと二人きり、他にできることといえば机に置かれた聖書を読むことくらい、時間を持て余していた幼い自分の許にはおなじように神事に列席していたシリスが遊びに来てくれた――

きっと今、母やふたりの竜公はそのような部屋に通されているはずだ。夜通し祈りを捧げるのも神事の一環だがそれはあくまで形式的なもの、明日に備えて今日は早めに休んでいるかもしれない。

シエラの成人が聖殿に認められた。明日の夜会で晴れて王女シエラはお披露目となる。

（私のお披露目パーティー……）

あらためて考えてみるが実感が涌かない。夜会の主役といっても仕事の一環、いくら華やか

な場であっても好きに楽しむことはできない。

（それに今日の神事は……）

思い出すだけで身体が震え、シエラは思わずルーを抱きしめた。

大祭司には許してもらえたものの、本来ならとうてい成人とは――成竜に育て上げたとは認められないものだったはずだ。ルーがたまたま〈陽炎〉という不思議な力を持っていて、あの変身がルーの特殊能力の発露だと認識されたから認められただけのこと。

あれは本来の神事の在り方ではないはずだ。ルーの能力がどれほどのものかはまだわからないが、大祭司の目をごまかすためだけの能力だとしたら役に立たないにもほどがある。

（私、立派な王女になるために竜騎士団に入ったのに……）

その王女として認められるための神事で意識を奪われてしくじるなどあってはならないこと、今回助けてもらえたのは思いがけない幸運だ。女王の一人娘ゆえの温情措置だったのかもしれない。

（もうあんなことがないようにしないと）

王女としてちゃんとしよう――そう心に言い聞かせるシエラだったが、そのとき脳裏をよぎったのはルーを召喚したときのスメラギの顔だった。

召喚された成竜のルーを見たときのスメラギの痛々しげな表情。痛みをおぼえたのはスメラギの心だ。まだ自分が王女であったという事実を受け止めきれていないのに現実を突きつけら

れたから。
自分が清めの水浴みをしている間に、シリスが真実を話してくれたはずだ。けれど。
（まだ、わたしの口からなにも伝えていない……）
シエラはドレスの隠しポケットから小さな包みを取りだした。
布に包まれていたのはピンクダイヤの耳飾りだ。
スメラギの視線を浴びつづける神事でつける勇気はなかったが、ずっと隠し持っていた。
（これはわたしがもらったものだもの……）
シエラではなくルーシェにくれたもの――両者の身分はちがってもルーシェもシエラも関係なく自分の心は変わらずここにある。この気持ちだけは本物だ。
（明日もずっと側にいてね）
見つめていると涙がにじみ、ぼやけて見えてくる。不意に胸からこみあげてくるものがあり、シエラはルーとともに強く抱きしめた。
（――隊長に、会いたい）
会って話がしたい。
昨日のケンカのことも、自分の本当のことも、全部ちゃんと自分の口から話したい。あんな形で正体が知れてしまうなんて思ってもみなかった。
話してもすぐにわかってもらえないだろうとか、これが忠誠を捧げるべき王女かと落胆され

るだろうとかいろいろ想像はしていた。けれども最後はちゃんと自分自身を見てくれると信じていたのに、実際はルーシェとしてなにも伝えられず、スメラギを傷つける形になってしまった。

（隊、長……）

嗚咽が漏れて、息が苦しい。

聖殿に発つときのスメラギは竜公の務めに徹して、いっさいの感情を覗かせなかった。本来ならそうして出会うべき人だった。王女として声をかけるだけで、言葉を交わすことなく、自分を守る者としてそこにいるだけだったはずの人。

（――でも出会ってしまったから）

そして触れあってしまったからはもう無関心ではいられない。

触れられた感触と抱きしめられたときのぬくもりが忘れられない。なにもなかったときの関係に戻れるはずがない。

隊長の側にいたい。王女として仕えてもらうのではなく、昨日みたいに抱きしめてほしい。

（もう隊長とは呼ばせてもらえないの？）

シリスのことだ、悪いように伝えていないと思う。しかし他人から真実を聞かされて傷つかないはずがない。

早く自分の口から謝りたい。そして本当の想いを伝えたい。

『だが、俺はおまえの誕生日には一緒にいられない』

（ちゃんとおなじ聖殿の中にいます）

おなじ聖殿内の、ほんの壁数枚を隔てた場所にスメラギはいる。しかも自分の神事のために、この聖殿で夜を明かすのだ。

側にいられないのは今だけだと、届かないのは言葉だけだと信じたい。

シエラが外へとつづく窓をあけると、身の凍る冷気が吹きこんできた。涙の伝う頬は強張り、寒いのは嫌とばかりにルーはシエラに身を寄せてくる。

しかしシエラは露台へと足を踏み出した。

見上げると天空神のおわす宙、そこに瞬く星の配置は自分が生を受けたときとおなじものだ。この星の下にローレンシア女王の娘として生を受けたのは自分だけ、シエラやルーシェという名で分かたれるものではなく、おなじ心を持つひとりの人間だ。

そしてスメラギを想う気持ちを偽ったことなどない。

この広い空の下、ローレンシアで生きるすべてのものに天空神の恩寵があるように祈るのが、聖女の末裔である自分の今晩の務めだ。

みながより幸せな日々を送れるように王族としての務めを果たす。そのために自分は神事を受け、王女として認められることを願ったのだ。

（けれどこれだけは自分のために祈らせてください）

――どうか想いを届けられますように。

みずからを包みこむ冷気に細い息を漏らしながら、シエラは天に祈りつづけた。

スメラギが通されたのは黒竜の間、部屋の奥には黒竜の彫像が鎮座していた。彫像は黒御影石でできており、ところどころ混ざった透明な石が聖竜の黒銀色を表している。

しかしスメラギは彫像には一瞥をくれただけで、やっと一人になれたとばかりに寝台に腰を落とした。

今日一日、あまりに多くのことがありすぎた。なんとか務めはこなしたものの頭の中はまだ現実に追いついていない。

一番の衝撃は言うまでもなくルーシェのことだ。

（ルーシェが……王女……？）

あれだけ間近で、王女として赤竜を召喚する姿を見せつけられながらも、すべてが幻だったのではないかという思いが拭えない。この神事を終えて竜騎士団の執務室に戻れば、またいつものようにあのウサギが左肩に赤い幼竜を乗せながら温かいお茶を入れてくれる気さえする。

それがここ数ヶ月のあたり前の光景で、その日常が永遠に失われたなどとどうしてすぐに信

じられる？

――箱庭育ちのウサギみたいな子だけど竜騎士になりたいんだって。

最初にシリスに打診されたのはそんな一言だった。

黒竜隊は王都に駐在しているためか、竜を授かったにもかかわらず学舎に入らなかった貴族の子弟たちの『一日体験入団』を押し付けられることが多かった。無論、竜騎士団がそんな催事をしているわけはなく、入ってきた当人たちも一日で辞めるつもりはなかったのだろうが、結果的に一日体験入団で終わった者が圧倒的に多かっただけだ。

箱庭育ちの貴族の娘、一日どころか半日で泣いて帰るだろうといつものように引き受けて、やってきたのがあのウサギだ。

――お嫁入り前の女の子だから、くれぐれも怪我だけはさせないようにね。

青痣ひとつ作らずにどうやって鍛えろというのかと呆れたが、団長命令は絶対だ。

ウサギはナイフとフォークより重いものを持ったことがないような身体でやってきて、黒竜隊ではなく学舎の初等科に行ってこいと言いたいのをなんとか呑みこんで、組み手を除いた基礎訓練に放りこんだ。

怪我をさせるつもりはない。だが勝手に怪我する分には知ったことではない。ウサギだけあって外見と反して運動神経抜群――などというはずもなく、見た目どおりまったく鍛えていない割には悪くない程度の実力で初日を乗りきった。

まだ十五歳、初日の訓練の筋肉痛が現れて二日めは来ないだろうと思っていたら、ウサギは予想に反してやってきた。

二日め以降は部下に任せていたのでよく知らないが、筋肉痛に苛まれる重い身体をひきずって、前日とはちがってたくさん怒鳴られながらもなんとかやりきったらしい。

気がつけば数日の訓練を抜けて、従者の仕事をはじめていた。

学舎出身のおない年のカイトにこき使われ、自分も容赦なく叱った。黒竜隊の隊員から冷たく当たられて廊下の片隅で泣いていたこともあるらしいが、目を真っ赤にしていても自分の前では泣かなかったし、仕事を投げ出したりもしなかった。ただそれだけでも貴族出身の箱入り娘にしては大したものだと思った。

そうして従者として竜騎士団で日々を過ごし、いつしか赤竜が翔べるようになったかと思いきや、竜がいなくなったと聖殿まで探しに行ったり、シリスの悪ふざけで帝国の皇子の接待をすることになったりした。

ずっと従順だったウサギが、自分に刃向かったのはおそらくそのときが初めてだ。

――私は、竜殺しなど認めません。

いつも勉強不足で叱られてばかりだったウサギが、あのときばかりは毅然と告げた。

貴族の娘として竜について学んでいる矜持があったのだろう。そう思ったが彼女にあったのは知識だけで組織の実態ではない。

先例から外れたことをすればその責任を誰かが負わなければいけない。それが組織というものだ。竜殺しなど認めない、そういくら言ったところで皇子が竜を――聖竜を授かるようなことがあれば、神託を認めると言った彼女自身が竜殺しをさせられかねないところだった。

彼女を預かっていたのは自分で、彼女が庇おうとしたのもまた自分。守ってくれる必要などなかったのに、守られてしまった以上、自分が彼女を守るしかなかった。

――わたしは隊長以外の隊長は嫌なんです……！

いつからだろう。上司として以上の感情を向けられていることは薄々気づいていた。

自分のどこがウサギの琴線に触れたのかさっぱりわからない。だが温室育ちの箱入り娘が一日の大半を自分と一緒に過ごしているのだ、特別な感情が芽生えてそれを恋だと勘違いするのもありえない話ではない。

一過性の思い込みの類はいつもならとっとと突き放すのだが、真正面から自分に反発し、アシュアを暗殺者から救い、帝国のローレンシア侵攻を防いだ彼女に一目置きはじめていたのも事実だ。

だから言った。――俺はかまわない、と。

だが彼女は貴族の、しかも名家の娘だ。竜公となった自分と身分的な釣り合いは取れるかもしれないが、自分のしようとしているのは貴族全体を敵に回しかねないことだ。そんな自分と付き合えば、当然社交界での彼女の立場も悪くなる。だから覚悟を訊いた。

――おまえのいるべき場所は王宮なんじゃないのか。

王宮で催される夜会をはじめ社交界という世界で生きる以上、自分と付き合うことで負いかねない障害を承知しているのかと問うた。

そのとき彼女の頭の中でどういう理屈が成り立ったのかはわからない。それまで言葉でこそ言ってないながらも告白同然のことを口にしておきながら、彼女はしばし考えたのち頭を下げた。

隊長の部下でいさせてください――と。

正式に交際を求めるのか諦めるのかの二択だと思っていたので、その答えに拍子抜けしたのはたしかだ。しかし彼女がそう望むならと、好意を寄せられているのに付き合っているわけではないという奇妙な関係ができあがった。

彼女はひ弱なウサギのくせに時に自分に向かって頑として意見する。貴族の箱入り娘のくせになぜか妙に芯がしっかりしている。そんな不思議な彼女に惹かれはじめていたのも事実だ。側に置いておけば、自分の感情も彼女の感情もそのうちどこかで折り合いが付くだろう――そう静観していたところに降ってきたのが彼女の赤竜隊への異動だった。

彼女の竜は赤竜、竜騎士団に残るならば赤竜隊にいるのが道理と、彼女を前線のエルヴァ砦に送ることになった。

執務室にいるのがあたり前になっていた彼女の姿がなくなって、予想以上に動揺したのは自

分の方だった。会いたいというよりも圧倒的に何かやらかしているのではないかという心配が涌き立ってエルヴァに翔んでみたものの、再会した彼女は意外と適応力が高かった。それどころか赤竜隊長を上司として認めて納得しているようで、彼女はもはや自分の部下ではなかった。

赤竜隊長にも青竜隊長にも可愛がられ、本人もこの状況を受け入れているならそれでいい。胸の奥でもやもやするものもたしかにあったが、自分の感情くらいあとでなんとでもすると踵を返すと彼女が後を追ってきた。

――ここで立派に任務を果たして黒竜隊に帰りますから！

その様子がどう見ても部下の立場だけを望んでいるようには見えなかったのだが、彼女の中では個人的に付き合うことと部下として側にいることにあまり違いはないらしい。そしてそのときは、仕切り云々よりも自分も彼女を手放したくなかったのだと気づいたことの方が大きくて、手許に戻ってくるならどちらでもよかった。

しかし、その曖昧な関係で留めておいてくれなかった者がいた――帝国の第二皇子ラサルスだ。

事もあろうにラサルスはルーシェを攫い、香で意識を混濁させて襲おうとした。

未遂に終わったものの泣きじゃくるルーシェが自分にしがみついてきて、無事だったことに安堵する半面、攫ったラサルスへの怒りだけではない苛立ちが涌いてきた。

ルーシェの寄せてくる好意が部下という立場と同化している理由、それは彼女の境遇にある

のではないだろうか？　――そう気づいてしまったからだ。

彼女の父が竜騎士だったこと、そして十三年前のレーヌ河での戦いで亡くなったことは聖殿で遭難したときに聞いていた。三つばかりで父を亡くし、それから父親も兄弟もいない境遇で育ってきた彼女は、単に自分に竜騎士であった父親の姿を重ねているだけではないだろうか？　そうでなければ男に襲われかけたその場で、恐怖に震えながら男である自分にしがみついてくるはずがない。

代わりなら代わりでかまわない――そう言っていられる時期はとうに過ぎていた。

ルーシェが引いた曖昧な境界線、それで納得できなくなったのは自分の方だ。

だから言った。

『代わりにするな。俺はおまえの父親じゃない』

幼いころは自分の身を守るのが精いっぱいだった。大公に拾われて新たな生活を得て、さらに〈闇〉の聖竜を授かって、大公の遺したこの国と彼の家族を守りたいと思った。このローレンシアを他国に蹂躙させてはならない――それだけでも手に余る大問題だというのに、思ってしまったのだ。いま目の前にいる彼女を手放したくない、と。

けれど自分は彼女の親兄弟の代わりにはなれない。そういう感情ではないのだと首に手を掛けた自分に彼女が返した言葉――それで、自分の中の気持ちが定まった。

――だって、この手で守りたいものがあるんでしょう？

もう抱えきれないほどのものを抱えていながら、それでも彼女を守りたいと思ってしまった。我ながら我がままになったものだと自分でも思ったが、失いたくないものは仕方がない。

……そして彼女はこの想いを受け入れてくれた。どれだけ自分の立場が悪くなろうとも、彼女の立場だけは守り抜こうと思った。

そんな彼女は、次の王宮での夜会で社交界に出るという。それはローレンシアの貴族の娘として当然通るべき道だが、それは同時に政略結婚の思惑の渦中に身を投じるということだ。

自分は竜公として、王女の配偶者が決定するまで表舞台に意中の相手を同行するわけにはいかない。それがローレンシアの社交界の慣習で、自分はそんな慣習など知ったことではないが、慣習を無視すればなにより彼女の立場が悪くなる。だからせめて耳飾りだけでもと贈り、いずれ一緒に王宮に連れていくと告げ、彼女もその申し出を受け入れてくれた――はずだった。

（――そのあいつが、どうして王女なんだ？）

なぜ彼女が神事を行い、大祭司の前で赤竜を召喚したりする？

彼女は王女だ――これだけ突きつけられれば理解せざるを得ない。

（なぜ気づかなかった？）

元々ただの貴族の娘にしては妙に堂に入っていたり、場馴れしていたり、怖いもの知らずだったりするときが多々あった。それでも彼女はとても王族の気位を持ち合わせていなかったし、自分の気持ちとしても彼女は王女であってはいけない存在だった。

——王女の命なら従ってくださいますか。

そう言ってまっすぐに見つめてきた彼女の眼を、自分はたしかに見ていたのに。

（しかし本当に王女だというなら、どこまでが本当の彼女だったんだ……？）

今まで自分が見てきた彼女の姿が、すべて偽りだったとは思えない。

頬に触れたときの感触、口を寄せたときの耳が切れそうなほどの強い鼓動、それが手のひら越しに伝わってきた。全身が強張っているのにその頬はやわらかく、応えた唇は逃げようとしなかった。その奥にあるものを知りたくて、焦がれるように吸い寄せられた。

共に過ごしたあの時間は、嘘でも幻でもない。

——傍にいてくれますか？

自分のことを好きだと言ったその口で、彼女が望んだことだ。

しかしそれが適わないかもしれないなら、どうして話さなかった？

（……いや、言いかけていたのか）

デートに誘ったときの直前、もしくはデートの日の丘の上で。

ルーシェはなにか言いたそうな素振りを見せていたのに、自分が遮った。そのときからすでに、心がなにか良くない予兆を感じ取っていたのかもしれない。

今朝、彼女が王宮の侍女を竜騎士団まで寄越したのは、最後の機会と覚悟を決めていたからだろう。その機会は今度はグリフォンに邪魔をされ、ルーシェが抱えていた真実はシリスから

語られることとなった。
（……そう、まだ奴から聞いただけだ）
自分はまだ、彼女の口からなにひとつ本当のことを聞いていない。
――隊長。
甘えるような、覗うような、学舎上がりの女性とはちがって肺活量の足りていない声。でもときに頑固で、自分の意見を貫くくせにどこか泣き虫で。
自信に満ちた王女の発声とあきらかにちがうあの声が、もうこの世界から失われてしまったのだとは思いたくなかった。
（――その声を、聞かせろ）
スメラギはその想いに突き動かされるまま寝台から立ちあがり、扉へと向かった。
しかし。
「おや、どこに行くつもりなのかな？」
扉を押し開くなり、その人物が視界に入った。
行動を読まれていた――そう気づいたが退くつもりはない。
「退け」
「退いてもいいけど君が出て行くのは駄目だよ。ここにいることも大事な竜公の務めだからね」

竜公がそれぞれ与えられた部屋で祈りを捧げて一晩を過ごすのも神事の一環だ。

（それでも）

どうしても今、たしかめたいことがある。彼女はいま、この聖殿内にいるのだから。

「駄目だよ。あの子のための神事だよ。それをぶち壊しにする気？」

シリスは口調を変えることなく、しかしさらりと言葉の中身を剣へと変えて、剣先を喉元に突きつけてくる。

「……おまえだって部屋を出ているだろうが」

「俺は王族だからね、もう神事には慣れっこだし、それに今晩はラギ君と飲み明かそうと思って」

そう言うと、シリスは両手に持った酒瓶とグラスを目の前でちらつかせてみせた。

「一人寝は寂しかろうと思ってさ」

「それは貴様の話だろうが」

「まさか。そんな昨日今日付き合いはじめたばかりの君とはちがうんだから」

シリスは軽い口調でさっくりと、しかし容赦なく傷口をえぐってくる。

「君の気持ちはわかるけどさ、今はあの子も王族としての務めの最中だから我慢して」

その言葉にスメラギは反論できなかった。

基本的にシリスは放任主義だが、口を挟んでくるときは必ずなにかがある。行くなとわざわ

ざ言いに来たということは、本当によくないなんらかの影響があるのだろう。自分が聖殿に来たのはまだ二度め、竜公としては初めてだ。聖殿は神の領域、聖女の末裔であるシリスのほうに分がある。

スメラギは苛立たしげに息を吐くと室内に踵を返した。シリスは当然のように後をついて入ってくる。

「おとなしく聞き入れてくれてよかったよ。君を力ずくでどうこうするのは至難の業だからね。君も飲むよね？」

「神事の最中だろうが」

「ちゃんと聖殿に収められていた聖なるお酒だよ」

言い訳になるか。というか神に捧げられていた酒を飲んでいいのか？　といろいろつっこみどころは多かったが、シリスは気にした様子もなくコルクを抜くとためらいなくふたつのグラスに注いだ。

「ほら、次期女王の誕生に乾杯」

そう言ってシリスはグラスを掲げるが、スメラギはグラスに手を伸ばす気になれなかった。

「どうしたの。今は飲みたい気分じゃない？」

「……言えなかったのは、俺のせいか」

スメラギは濃厚な赤色の液体の注がれたグラスを見つめてつぶやいた。

竜騎士団に来た当初、正体を伏せていたのはたしかに幼竜のせいだろう。しかし幼竜が成長できるようになり、自分と付き合うことになってもなお言えなかったのは、自分が王女に並び立つ資格がなかったからではないだろうか。

もし彼女が王女であろうとなかろうと、側にいられるだけの素地が自分にあれば。たとえばローレンシアの貴族の生まれで聖竜を授かり、誰にも後ろ指を指されないだけの立場――そう、もし自分がシリスの立場だったなら、彼女は本当のことを言っていたのではないだろうか？

「さぁね。身分を言わせなかったのは俺だけど、あの子の気持ちはあの子のものだよ。そのあたりのことはあの子に訊きなよ」

軽い口調のままシリスは突き放す。――わかっている。ただの泣き言だ。

ルーシェに会いに行こうとした決心を折られたせいか、考えが後ろを向いてしまう。

（いや、ちがう。――こいつのせいだ）

人のことをからかってばかりでどこに本心があるのか摑みどころがない奴だが、シリスの忠告はよく当たる。そして悔しいことだがいつもそれに助けられ、いつしかそれを頼りにしている自分も自覚している。

シリスが止めにきたということはつまり行っても益がない、悪い結果しか生まなかったということだ。行ったところでルーシェなんて娘はいないよと突きつけられたも同然だった。

「なに、王女だとわかっていたら付き合わなかった？」

昼にも似たようなことを訊かれた気がする。
当然だ、と言いかけたスメラギだったが、こちらに向けられた目に気づいて言葉が出なかった。
穏やかな笑みの奥に宿る静かな色。それは冷静というよりもむしろ冷淡、冷酷な光を宿し、スメラギは目を逸らすことしかできなかった。
「……わからない」
「一貴族の娘くらいなら責任が取れると思ったわけ」
「……」
打算だね、そう突きつけられてもちがうとは言えない。
一孤児にすぎなかった自分が王宮に出入りできる立場になる、それくらいにこの国での竜公の存在は重く、けっして侮られる地位ではない。
リヴェア家は子爵家だが黒竜公は侯爵、リヴェア家がどれほど名家の矜持が高くともその社会的地位の差は絶対で、彼女が傍にあることを望んでくれるなら彼女の生涯を保障するだけの力が竜公の名にはある——そう考えたのも事実だ。
（だが、自分の出自が足手まといにしかならなかったなら？）
けして彼女を不幸にしたいわけではない。不幸にするくらいなら自分の気持ちを抑えることができたはずだ。

先代黒竜公は大公殿下だぞ――知らなかったこととはいえ、自分は彼女の心を傷つける形で記憶の蓋を開けてしまった。上司としてもいい上司だったとは思えない。それでもなお彼女が自分に傍にいてほしいと願ったのは、シエラとしてか、ルーシェとしてか。

王女の恋愛はいくら自由だといったところで制約がある。歴代大公の大多数が貴族か竜騎士だったことを見てもそれはあきらかだ。そして王家の血統に異国の血が混じったことは一度としてない。

ルーシェとして傍にいたかっただけ――王女としての重責から逃れるための束の間の自由を得たかっただけでもかまわない。ただなにを思ってそう言ったのか知りたい――いや、ただ会いたいだけだ。

「――ルーシェに、会いたい」

「今晩は無理だねぇ」

シエラとしてのお務めがあるからね、とシリスはグラスを口に運ぶ。

「話が、したいんだ」

いつでもいい。ただできるだけ早くあの声がほしい。乾いた土に浸みこむように心に届くあの声が聞きたい。そう渇いた心が訴える。

しかしシリスは「だろうね」と軽口でいうだけで取り合わなかった。

部下として側にいるときはそれだけでよかった。なのに目の前にいない、それだけでこんな

にも心が掻き立てられる。
すっと立ち上がった自分に、グラスに口をつけていたシリスは目線だけ寄越して問うた。
「どこに行くの」
「……頭くらい冷やさせろ」
外出禁止と言いつつシリスがこの部屋に来ているのだ。露台に出るくらいかまわないはずだ。
露台へとつづく窓を開けると冷気が襲いかかってきた。山腹の砦の冷気とはちがう、夜警で翔んでいるときに感じる上空の冷たさだ。
頭上にはなにひとつ遮るもののない星空が広がっていた。透きとおる空から星の光が降り注ぐ。
ローレンシアでは蒼穹を神と崇めているが、アズィールでは夜空の星が重用視されている。中でも生まれた日の星の位置はその者の生涯を定めるため、子どもの守刀に星の細工を施すほどだ。そのためおなじ星の配置が廻ってくる誕生日は、星の加護を得るために盛大に祝う。
ルーシェ――暁の女神アルシェイラに守護され娘。
明日はルーシェという名の娘が国中で祝福されることだろう。しかし自分の知るルーシェを祝う者は誰もいない。寿ぎを受けるのは王女シエラだけだ。
――俺はおまえの誕生日には一緒にいられない。
そう言ったのはけっしてそのような意味ではなかったのに、夜闇は深く、夜明けの光は遠い。

もはや届くことはない言葉かもしれないと思いながらも、スメラギは口にせずにはいられなかった。

「この星の下に生まれた命に祝福あれ。今年もまた多くの幸いがもたらされんことを――」

言葉の途中で唇が止まる。言葉にならなかった白い息が闇に溶ける。

なにも難しい言葉を言いたかったわけではない。ルーシェが目の前にいたなら、伝えるべき言葉はただ一言で済んだはずだ。

しかしここにルーシェはいない。

ここにも――いや、もうどこにも。

スメラギは宙を仰ぐと、この地上ではもはや届かない言葉を天に託した。

――誕生日、おめでとう。

やわらかな銀灰色の髪をゆらしてはにかむ面が脳裏をよぎる。

その姿は白い吐息とともに闇の中へと消えていった。

第5章

真実の花園

翌朝、シエラは〈神の山〉の山頂で暁の光を浴び、シリスの竜で王宮に戻った。

そして湯を浴びて冷えた身体をほぐしてから仮眠を取り、昼過ぎに起きて食事を取ったあと、夜の舞踏会の準備のためにまた女官たちに取り囲まれることになった。

化粧など洗い落とせばなくなってしまう。そんなもののために何時も何人もの手をかけて準備する。

（これが竜騎士団なら、眉を整えている時間があるなら腕立ての一回でもやれ！　って叱られるところよね……）

しかし美しく着飾ることも仕事の内だ。

今日の夜会は昨日の神儀とはちがい、名家の貴族と貴婦人がみな集まる。目的はただひとつ、王女シエラの品定めだ。容姿はもちろんその衣装や装飾、立ち居振る舞い、会話や表情などすべてに出席者が目を光らせている。

次期女王となる王女はどのような人となりで、どのようなものを好み、なにに興味を示すのか――

ローレンシアでは、議案は女王と有力貴族が臨席する〈御前会議〉で審議される。討議を行

うのは貴族たちで、女王はその裁定役という位置づけになっているが、歴代の女王を見れば討議に口を挟む女王も皆無ではなく、女王の発言力は時代ごとに大きく異なる。

今の女王――母は貴族たちの意向に添う裁定を行うが、次代女王となる王女はどうなのか。

王女の成人が聖王庁に認められたとなれば、近いうちに王女は御前会議に出席してくる。王女シエラについていち早く知りたいと思っているのはどの貴族もおなじだ。目を皿にして探ってくる彼らの前で、昨晩のような失態を犯すわけにはいかない。

（それにまず外見から侮られるわけにはいかないものね）

女官たちもそれは心得たもので、昨日より数段念入りに化粧を施してくるのを、シエラはベッドのように背もたれの大きく傾いた長椅子におとなしく横たわってやり過ごしていた。化粧が終わるとドレスに袖を通す。

今日この日の王女を飾るために何ヶ月も前から準備されたアーモンドの花の色をしたピンクのドレス。それに使われた布地やレースにいたってはその何年も前から手掛けられていたはずだ。これだけのものを着せられてみっともない姿をさらすわけにはいかない。

髪は舞踏中に乱れないようにと、いつもより多めの髪油をなじませて結いあげ、結いあげなかった部分はさらに丹念に髪油を足してブラシを通される。装飾品をつける段になってシエラは「耳飾りは予定していたものを」と指示した。

しかし女官はかすかに眉をひそめて難色を示した。

「殿下につづけておなじものをお召しいただくわけには……」

ピンクダイヤモンドの耳飾りは、昨日グリフォンを鎮めるときにつけていたもの。王宮にいたのは騎士や官吏ばかりとはいえ、それを身につけて出てしまったのは事実だ。

「それがいいの」

しかしシエラは女官を見つめてはっきりと告げた。

昨日、神事に赴くときはつけてゆく勇気がなかった。

（だけど今日は）

言葉を交わすことはできないかもしれない。けれど自分の今の想いをスメラギに伝えるためにも、絶対につけていきたい。

その覚悟を察したのか女官はそれ以上反論せず、それをシエラの耳に飾った。

すべての準備を終えた頃にはすでに日は暮れはじめていて、ドレスを美しく見せるための下着の型が崩れないよう腰を下ろしていたシエラの下にその人物が訪れたのは、空が夕闇に覆われはじめた頃だ。

「姫をお迎えにまいりました」

すこし冗談めかしながら入ってきたのは白隊服姿のシリス、そしてきっちりと一礼して足を踏み入れたのは黒隊服姿のスメラギだった。

今日のふたりの衣装は勤務時とくらべて装飾品が多かった。金モールに肩から腰にかけての

肩章に、外套の飾り房は式典用のものになっている。何ヶ月も竜騎士団にいたのにふたりのこの恰好を見るのは初めてだ。

「ほらほら、ぼーっとしないの」

シリスに目の前でひらひらと手を振られて、シエラは思わず見入っていたことに気がついた。

（今は王女なのに……！）

こんなんじゃ隊長に呆れられちゃうと思ったが、しかしルーシェではない今、感情を面に出すわけにはいかず、シエラはとっさに目を伏せて照れと失態を隠した。

しかし実際に目にしてしまった姿はそうそう忘れられるものではない。シエラはルーシェとして脳内に蓄えた知識――服装規程の頁を必死にめくる。

（金モールは王族臨席の式典に出席するとき、肩章は叙勲、大祭礼の当事者のときで、それに含まれるのはえっと、えっと……）

これが任務中の下問なら簀巻きにされそうな答えしか浮かばなかったが、わかったことはひとつ。ふたりの装飾は騎士の礼装の中でも最上のものだということだ。

「君の晴れ舞台だし、こっちもそれなりにしないとね」

（……それってふたりでエスコートしてくれるってこと？）

ふたりの男性にエスコートをされる――他の来客の立場もあるので、それが許されるのは夜会の主催者か主賓くらいのものだ。しかし今夜の舞踏会は王女シエラのお披露目のためのもの、

王女がふたりにエスコートされて入場してもなんの問題もない。
「スメラギも実質舞踏会に初参加だし、ここは次代を担う者たちでって結論に落ち着いたみたいでね」
姫のエスコートを務めさせていただきます、とシリスはどこか芝居じみた感じで、スメラギは実直に、深々と腰を折って王女に最敬礼をした。
「お手をどうぞ、姫」とシリスが跪き、スメラギもそれに倣う。
（本当に……？）
スメラギにエスコートされて夜会に出たかった。そうなればいいとずっと思っていた。けれどこのような状況で叶えられるとは思ってもみなかった。
（……あれほど望んでいたことなのに）
願いが叶ったはずなのに心が重い。
しかしシエラはまっすぐに立ちあがり、羽毛より軽い手つきで右手をシリスの手に添える。そして、ややぎこちない手つきで左手を差し出されたスメラギの手の上に乗せてみたが、シエラの左手は緊張で冷え切っていた。
（手袋越しだもの。ばれるはずがないわ）
しかし何度も触れて、触れられたこともあるはずのスメラギの手が、間に薄い絹を介しただけでとても遠く感じられた。そしてそれは心の距離のように思えて胸が締めつけられた。

（……触れたい）

触れているのに伝わらない。こんな動揺など伝わってほしくないと思う一方で、その手に直接触れたいと逸る鼓動が告げている。

なににも遮られることなく手をつないでいたのはついこの間のことなのに、いまのふたりの距離はあまりに遠い。

――言葉でこの距離は埋まるの？

もう言葉も届かないくらいに遠く離れてしまった気がして、泣きたい気持ちが胸いっぱいに広がる。

（泣かない――泣けない。今は王女だもの）

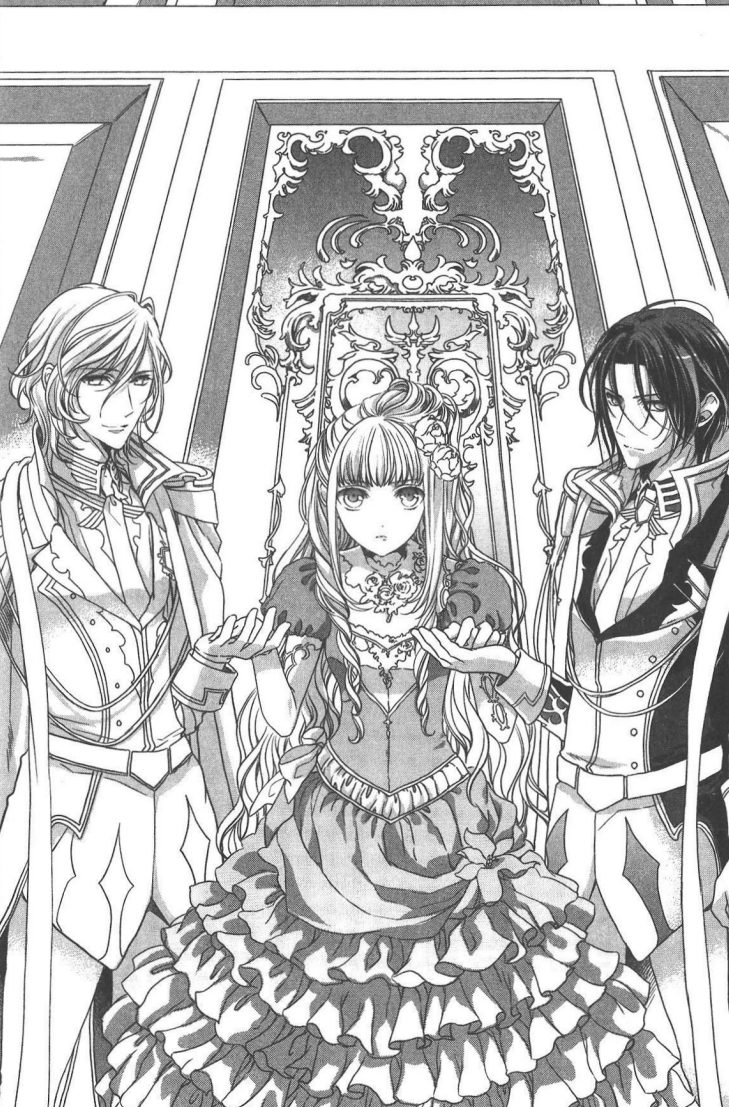
シエラはうつむきそうになる顔を意識して上げて、廊下の脇で深々と頭を下げる女官たちに見送られながらゆっくりと歩みを進める。

そして開かれた扉の部屋に入ると、その先にはもうひとつの大きな扉があった。両脇に立っていた衛兵のひとりが軽く扉を叩き、扉の向こう側に意図を伝える。

扉から漏れ聞こえていた管弦楽のやわらかな調べが徐々に音を落としてゆき、やがて静まりかえったところに典礼省の役人の声が朗々と響き渡った。

「シエラ・アーシェラータ・ローレンシア王女殿下、ご入場！」

現実にうち震えてびくりとしたシエラの手を、シリスが軽く握って微笑みかける。



――なに、大したことじゃないよ。

穏やかな蒼の瞳がそう語りかけてきて、シエラはふわりと一瞬心が軽くなるのを感じながら視線を正面に戻し、その扉が両側に開かれるのを見た。

まず目に飛び込んできたのはまばゆい光だ。多くの燭台を備えつけた豪奢なシャンデリアが光を放ち、それらがガラスと白を基調とした壁に反射して夜の広間を明るく照らし出す。

シエラが足を踏み入れた扉は貴族たちが出入りする正面の扉ではない。広間の一段高くなった最奥部の脇にある扉で、王族のみが通ることを許されている。

広間の紳士が胸に手を当て、淑女がドレスをつまんで一同に頭を下げて待つ中、シエラは竜公ふたりにエスコートされて足を踏み出した。

歩を進め広間最奥の中心部までゆき、金糸の竜紋入りの椅子の前に立っていた女性――ローレンシア女王に向きなおり、ドレスをつまんで腰を落として一礼する。

女王がひとつうなずきシエラが面を上げると、母は我が子の晴れ姿をまぶしそうに見つめていた。

「シエラ、こちらへ」

いつも話しかけるのとおなじように女王は娘に声をかけ、シエラは女王の左に進み出てふり返る。

公の場で女王の傍らに立つ――つまり次期女王となる王女として迎えられたということだ。

シエラは広間の紳士淑女に向かって再度ドレスをつまんで優雅にお辞儀をすると、広間は貴族たちの祝福の拍手で満たされた。

鳴りやまぬそれらの時機を見はからって女王が楽団に視線を送ると、察した指揮者が指揮棒を構え、ふたたび優雅な旋律が流れはじめた。

広間の空気が和む中、シエラの前にはひとりの男性が進み出た。

「踊ってくれるかい、シエラ」

銀の髪に蒼の瞳、王家の特徴がそのまま現れているこの紳士はシリスの父、つまりシエラの伯父だ。

「先に若い者に任せて疲れてもらっては困るからね」

さすがシリスの父、いたずらめいた目で告げる伯父は一言でシエラの心を和ませてくれた。

一曲目の相手は貴族社会でもっとも位の高い男性、つまり宰相を務める伯父のセルティスであることは暗黙の了解で決まっていたことだが、「ええ、喜んで」とシエラは心からの笑みを返した。

「身にあまる光栄に存じます」

と役者ぶってセルティスは一礼し、差し出したシエラの右手の甲に口づける。そして手を取って階段を下りる姿は、いかにも場馴れした自然な所作で頼もしく思えた。

若くして女王となった妹を宰相として支えるセルティスは、現役騎士であるシリスよりもや

や痩身だが、他の貴族と比べれば肩幅があるほうで、武術の心得がある人だと見てわかる。聖竜こそ授かっていないが竜の主として学舎を卒業し、聖竜を授かった息子が成人するまで竜騎士団長の職を預かっていたこともある。

母も若いが伯父も若い。まだ四十にもならず、若くして妻――シリスの母を亡くしたことから噂される恋は数知れず、しかし浮名を流しつづけていまだに再婚せず、シリスが『親の背を見て育っただけだよ』などと嘯くのもあながち嘘でもなかった。

（たしか父様と母様を引き合わせたのも伯父様なのよね？）

前線のエルヴァに赴いたとき、赤竜隊長グレンからそう聞いている。

シエラの祖父母にあたる先代女王と大公は早くに亡くなり、遺されたたった一人の家族である大切な妹を託したくらいだ、父とも相当仲がよかったはずだ。

しかし伯父から父の話を聞いたことはない。

父の死をきっかけに記憶を失くした自分、その傷に触れまいとあえて話をしなかったのだろう。そしてセルティスはずっとシエラの父親代わりでいてくれた――

シエラとセルティスのために、潮が割れるように広間の中央が空けられる。

シエラはその場に立つと、今までの感謝の想いをこめて伯父を見上げた。見つめ返す伯父の瞳はどこまでも優しかった。

ほどなく曲がはじまると、軽い口ぶりとは裏腹に伯父のリードは軸の安定したとても安心で

きるものだった。初舞踏となるシエラを気遣ってそうしていてくれたのかもしれない。
シエラはセルティスのリードに任せて伸び伸びと舞いつづけた。

そんな王女シエラの初舞踏披露を、スメラギは広間の壁際から眺めていた。
エスコート役が終われば王族でないスメラギは高段に残っているわけにはいかない。女王に一礼をして御前から下がったものの、広間をよく見える場所は貴族たちに占領されていたので、しかたなく壁際に寄ったという次第だ。
「――良い円舞だな」
正直な感想として、そんな言葉が漏れていた。
ルーシェがあれほど踊れるとは思っていなかった。自分が練習に付き合ったのは数ヶ月前、それからも練習を重ねたのだろうが初舞踏でこれだけの人の眼に晒されているのだ。ぎこちなさが残るかと思っていたのに、今の彼女には硬さがまったく見られない。
「あーあ、我が父親ながら嫌になるね」
傍らでそう呟いたのはシリスだ。
シリスは王族、高段に残っていてもよいはずだが、付き合って下りてきたらしい。
「まぁ昔から息子より姪を溺愛している人だったけど、初めての子にあんないい顔させちゃっ

て。その技をぜひ伝授してもらいたいものだね」

数多くの浮名を流している宰相だが淑女受けはすこぶる良い。当人のおおらかな性格はもちろん、女性に対してもただの遊びではなく誠実だというのがその理由だ。

「俺もあの人の血を継いでいるはずなんだけどなぁ」

シリスも十二分にその才能を継いでいると思うのだがまだ足りないらしい。人に嫌われることからはじまる自分にはそもそも縁のない話だった。

「でもこれで貴族の目付きも若干和らいだかな」

貴族たちは背後にいる竜公ふたりに気づきもせず、宰相と王女の円舞に見入っている。

シリスとふたりでエスコートすることが告げられたとき、真っ先にスメラギの脳裏をよぎったのは貴族の感情だった。

おなじ竜公とはいえシリスはれっきとした王族で、こちらは出自の知れない異国民だ。そんな自分たちふたりが王女をエスコートするとなれば、シリスと同格だと思っているのかと批難が起きかねない。エスコート役を決めたのは俺じゃない、そんな言い分が貴族の心に届くはずもなく、ただいたずらに自分への風当たりが増すだけだ。

その風圧は、広間に入ったときから肌で感じていた。正直、自分を選んだのは嫌がらせかとすら思ったほどだ。

しかし王女が初舞踏の相手に王族である宰相を選んだことでその風向きが変わった。

王女が最初に貴族社会の頂に立つ人の手を取ったということは、秩序を重んじることを表明したといってもいい。今までほとんど表舞台に顔を出さず、まったく情報も漏れていなかった王女が、今の体制に沿う相手であったことは貴族には歓迎すべきことだ。

誰と踊るかなど些細なこと、しかしその些細なことがこの夜会では絶対で、表の政治の力関係をも左右する。スメラギには男女が優雅に踊るだけの馬鹿らしい場だと思えるが、けして無視できない場でもあった。

「ねぇ、賭けをしようか」

「……賭け？」

問い返す声には、無意識のうちに不信感がにじんでいた。

シリスが吹っかけてくる賭けは十中八九負ける。十中八九どころか完敗かもしれない。賭けのはじまった時点では五分に見える状況にもかかわらず、最後に必ずシリスに風が吹く。

「公爵閣下の円舞が終わったら序列的に次の相手は竜公、つまり俺たちのどちらかだろう？その順番をさ、賭けで決めない？」

「どちらかもなにもおまえが先だろう。都合よく王族の務めを放棄するな」

「王族ってのは単なる血統であってそれはなんの地位でもないからね。たしかに竜騎士団長ということで一歩上かもしれないけど、ここはひとつ余興でさ。君が勝ってもちゃんと角が立たないようにしてあげるから」

シリスは乗り気だ。こいつ相手に口で勝てるはずもないかとスメラギは早々に反論を断念し、つづきを促した。

「内容は」

「彼女がつまずいてこけるかどうかというのはどう？」

不謹慎なと睨みつけると、シリスは「冗談だよ」と苦笑いを浮かべ、

「じゃあこれでどう？　円舞を終えた彼女が、俺と君、どちらを先に見るか」

「どちらもなにも、俺たちが一緒にいたらどっちを見たかなんてわからないだろう」

「わからないわけ？」

シリスが挑発的な目で見つめる。

他の女性ならわからないかもしれない。――だが彼女ならわかる。

いくら王女として感情をひた隠しにしても、それを見分けられるくらいの時間をもう共に過ごしている。昨日、王女として初めて自分と対面したときの感情を隠そうとする目――怯えるルーシェの心が透けて見えて、痛々しくてこちらから目を伏せてしまったくらいだ。

「彼女がどっちを先に見るか、君に選ばせてあげる。当たったら先に踊るといいよ」

シエラが先に見た方が勝ちではなく、先に見るのがどちらかを当てろと言っているのだ。そして選択権は自分に与える。――そう、シリスの賭けはいつも五分ではじまる。

（……俺を見るはずがない）

今の彼女は王女シエラで、ルーシェとしての感情を抑え込んでいる以上、あえて見ないようにするはずだ。そうしてルーシェとしての記憶を消し去るまで、ずっと心に入れないようにするかもしれない――いや、そうすべきだ。

「――彼女は俺を見ない」

逡巡ののちスメラギがそう告げると、シリスは一言、冷めた目で「馬鹿だね」と言った。

伯父の力強いながらあぶなげないリードと優しい目に見守られて、シエラはなにひとつ不安を感じることなく初舞踏を終えた。

盛大な拍手の鳴り響く中、シエラはセルティスの手に導かれて高段に設けられた席に戻る。その席は女王の傍らに設けられたもので、グラスを置くための小さな卓子を挟んで母がいる。女王の椅子の金色の刺繍に対してシエラの椅子の刺繍は銀、女王に次ぐ位にあることを示していた。

シエラが腰かけると母は「お疲れさま」と微笑んできた。広間とは数段の階段を隔てていることもあり、普通に話す分には管弦楽の演奏にまぎれて声は下には届かない。

「おかしくなかった？」

そういつも母と話すように訊ねると、「上手だったわよ」と言ってくれた。

「私のおかげだろう？」

「ええ、兄上はずいぶんあちこちのご婦人方と練習してくださったようですから」

成果があってよかったですわね？　と母は言葉に混じる毒を微塵も感じさせない微笑を向けた。伯父もにこやかに「当然だよ。可愛いシエラのためだからね」と返すあたり、さすがに兄妹だ。

「さて、可愛い妹を放ったらかしにして愚息はどこに遊びに行ったものかな」

「あ、シリスならあのあたりに――」

シエラは階段を下りてすぐの右の壁際に視線を向ける。

円舞の最中、スメラギが自分を見ながらシリスと雑談している姿が視界の隅にちらちらと映っていた。スメラギは面倒くさそうだったがシリスが面白そうに話しかけていたので、またからかわれていたのかもしれない。

まだ話しているならあのあたりにいるはず――と視線をさまよわせていると、シエラははっと息を呑んだ。

――ちょうどこちらを見上げていたスメラギと、目が合った。

（き、気づいてないわよね……？）

これだけの人がいるのだ。王女が初めて出席した舞踏会の広間を見渡していただけ、自分を見ていたとは思わないはず、そう思いながらもシエラは動揺を隠そうと二曲目を舞う広間を大

きく見渡してから伯父に面を向けた。
「シリスはほら、あそこに」
レースの扇で見えないように注意しながら、シエラはシリスのいるあたりを指し示す。
視線の先ではシリスが探していることに気づいていたらしく、スメラギになにやら囁いてこちらに向かってきた。この高段はスメラギが立ち入ることのできない場所だ。あの囁きは、ここに来ることを断っていたのかもしれない。
シリスは階段を上ってくると、女王と宰相に一礼してシエラに向きなおった。
「お疲れさま。下で見ていたよ。綺麗だった」
「ありがとう。伯父さまのおかげよ」
「俺は父上ほど経験豊富ではないけれど、次に一曲お相手いただけるかな」
半月ばかり前にシリスから見せてもらったエスコート候補者リストを思い出す。思い返せばあれは自分に貴族の序列を教えるためのものだったのかもしれない。
（伯父さまの次がシリスだったものね）
みな華やかに着飾って笑顔で言葉を交わし合っているが、実のところは互いの政治的立場を確認するための場所だ。その彼らよりも高い場所にいる自分が秩序を乱すわけにはいかない。
「ええ喜んで」と手を差し出すとシリスは膝をつき、シエラの指の甲に口づけを落とした。
とはいえ二曲目ははじまったばかり、次の曲までしばらく時間がある。シリスはシエラの隣

の椅子に腰かけると、こそっと話しかけてきた。
「さっきね、ラギ君と賭けをしていたんだよ」
「賭け？　あの場で？　なにで賭けていたの？」
自分の円舞を見ながらこそこそ話していたことは知っている。その二人の間で賭けるといえば自分のことくらいしかない。
「君がね、俺とラギ君、どっちを先に目を留めるか選ばせてあげたんだけど」
「え!?」
（じゃあ、さっきこっちを見ながら隊長に囁いていたのって賭けの結果？）
「あいつも馬鹿だよね。素直に自分に賭けておけばいいものを。そんなわけで俺が君に一曲申し込みにきたわけだけど」
賭けの賞品にされていたのは、どちらが先に自分に一曲申し込むかということだったらしい。
（そしてシリスが今ここにいるということは――）
――スメラギは、自分がシリスを見る方に賭けたということだ。
（隊長は見ないって思ったってこと？）
その結論に、複雑な気持ちがめぐりはじめる。
（だって見ちゃうでしょ？）
スメラギはこの高段にも昇ってこられない立場だ。話ができないのはわかっているが、スメ

ラギがなにをしているのか今も気になってしかたがない。
階下ではシリスが離れて一人になったスメラギがグラスを傾けている。そこに中年の紳士が話しかけてきた。紳士が連れていた女性は奥方にしては若すぎる。おそらく娘を紹介しているのだろう。
（……隊長はその女性と踊るの？）
スメラギも舞踏会の出席者だ。もちろん誰かと踊るだろう。
（でも……）
今日は自分の初舞踏会だが、スメラギにとってもおなじだ。舞踏会で初めて踊る機会を、見知らぬ誰かに奪われるなんて。
「――ほら、目で追わないの」
唇を耳元に寄せて囁かれた声に、シエラはびくりと現実に引きもどされた。
吐息が耳朶に触れそうな距離にシエラはっとシリスを見やるが、シリスはなんでもないことのように至近距離からシエラを見つめていた。
「あんまり見つめていると噂を立てられるよ」
その指摘で気がついた。円舞に参加していない貴族たちが、羽扇で口元を隠しながらちらちらとこちらを窺っている。
しかしそれはスメラギを見ていたことの批難というよりむしろ、いまシリスが自分のすぐ近

くに顔を寄せていることに興味があるようだった。
「このままだとあなたと噂を立てられそうなのだけど」
「そうなるように仕向けているわけだけど？」
「え？」
「俺と君とは従兄妹同士だけど、君とラギ君は一応初対面だからね？」
（あっ、そういうこと……？）
ろくに会話もしたことのない初対面の竜公に王女が目を奪われていたなど、あまり品のいい噂ではない。まだ従兄妹相手に兄妹のように、もしくはそれ以上に仲睦まじいと思われた方がいい。
「ね。だからちゃんとお仕事しようね」
（見るのも駄目なの……？）
紹介された女性とスメラギがどのような会話をつづけているのか気になるが、そこまで言われて見ることはできない。
「……シリスが申し込みにきたのもお仕事というわけ？」
賭けの結果スメラギが勝ったからとシリスがスメラギを伴ってきたなら、スメラギがこの高段にいてもなんの違和感もなかっただろう。誰がどこで見ているかわからない、だから誰も見ていなくとも誰に見られても問題のない状況を作り上げる。いつも誰かの目にさらされている

王族として生まれたシリスは、当然のようにそれをやってのける。
自分と王女の仲睦まじい姿を貴族に見せつける、それも自分の務めだと理解しているからだ。
（一曲申し込んだのもきっと自分の務めだから……）
だがそれが『仕事』だと言われると、優しい態度すべてが仕事だからねと言っているように聞こえる。
しかしシエラが拗ねると、「そんなわけないだろ」とシリスは言った。
「こういうのは役得っていうんだよ。――あ、またラギ君が見てるよ」
「えっ⁉」
ふり向きかけたシエラを遮るように、シリスはシエラの手を取って立ちあがる。
「ほら簡単にひっかかっちゃ駄目だってば」
（もう！　からかってばかり！）
シエラは立ちあがりながら、涼しい顔をしている年上の従兄を悔しい思いで睨みつけた。

――じゃあ俺の勝ちということで。
シリスが当然のように勝利の果実を手に入れて、王家のみが立ち入れる高段にのぼってゆく

その様子をスメラギはただ見送ることしかできなかった。

シリスは女王と宰相に挨拶をし、席に着く王女の前で手に胸を当て言上し、王女はシリスに右手を差し出した。シリスがその手を戴いたことで、声は聞こえなくともなにが話されたのかは一目瞭然だ。

王女の次の円舞の相手は青竜公シリス――そのことを、広間にいる誰もが悟った。

シリスは王女に向かって右隣に座り、貴族たちの視線を一身に浴びていることに気づいているのかいないのか、ふたりでなにやら話しあっていた。王女の左隣には母である女王がいて、話しているシリスも気心の知れた相手、入場当初の緊張した面持ちがほぐれているのが見て取れる。

「まぁ、王家の皆さま仲がよろしくていらっしゃるのね」

「ええ。殿下はご病気だとお聞きしておりましたけれども、お元気そうでなによりですわ」

スメラギのすぐ近くにいた婦人方が扇で口元を隠しながら話しているが、これだけ近ければ丸聞こえだ。

シリスは王女をからかって遊んでいるらしく、王女はにこやかな笑顔だけではなく驚いた顔や拗ねた顔などを見せていた。もちろんシリスがそうしているのは当人が面白がるためというより、むしろ貴族たちに表情豊かな王女の人となりを見せつけるためだ。

さすがだな、と息をついていると、「黒竜公閣下」と声をかけてくる者がいた。

年の頃は四十過ぎ、中肉よりやや肥えたその紳士は肉づきからして竜騎士ではない。四侯とは帝国の皇子アシュア訪問の際に顔を合わせているので侯爵でもない。

伯爵以下か、とあたりをつけてスメラギは向きなおると、紳士は辺境伯の姓を名乗った。

「こちらはわたくしの娘なのですが、王宮の夜会は今日が初めてでしてな。ぜひ黒竜公閣下にお相手いただきたいと申しまして」

どこまで本当かはわからないが、父親よりはるかに豊かな金髪をした娘は父の後方で慎ましやかに微笑んでいた。

年の頃は王女よりも一つ二つ上、嫌がる娘を父親が無理に引っ張ってきたという感はない。自分の芳しくない噂も耳に届かないほどの田舎から出てきたのだろう。

「一曲ご一緒願えませんかな」

熱っぽく語る紳士に対し面には出さないものの、スメラギは内心、またかと息をついていた。

学舎時代から自分に声をかけてくる者にはふたつの類型があった。ひとつは聖竜の主という肩書きしか知らない者、もうひとつは異国の生まれや良くない噂を知って表向きは蔑みつつも、将来の竜公夫人の座を狙ってひそかに接触してくる者だ。

後者はおたがい打算だと割り切っているので付き合わなくもないが、ある意味善良な前者とは極力関わらないようにしていた。

「ありがたいお申し出ですが今日は王女殿下の御祝いの宴ですので」

竜公として、王女より先に他の女性の手を取るわけにはいかないとやんわりと断る。

竜公が大公となる例があまりに多いせいか、未婚の王女がいる場合、その王女の結婚が決まるまで竜公は交際、結婚を表沙汰にしないのが慣習となっている。とはいえ王女が成人して夜会に出席するようになって結婚相手を決めるまでせいぜい三年、それくらい自重を強いられても大したことではない。

王女殿下のお後にでも、となおも食い下がる辺境伯にどう言ったものかと思案していたそのとき、

「まぁ、あんな……！」

近くにいた婦人の驚いた声音に反応してスメラギがとっさに高段を見上げると、見ているこちらがどきりとするような距離までシリスが王女に顔を寄せていた。

なにやら囁いたようだが、耳に唇が触れたのではないかという距離だ。角度によっては頬に口づけたようにも見えたかもしれない。王女もさすがにびっくりしたようで、その驚愕が面に表れている。

なおも親しげに会話をつづける二人を、貴婦人たちはうっとりした様子で眺めていた。たしかにシリスは女性が眺めるには嬉しい外見をしているが、このご婦人方の年齢からすると理想の恋人というよりむしろ理想の息子といったところか。

本人の与り知らないところでご婦人方を喜ばせていたシリスだが、色恋沙汰にも疎そうな辺

境伯には目の毒だったらしい。やや決まり悪げに視線を伏せて、見てはいけないものを目にしてしまったように言い訳がましく、ぼそぼそとつぶやいた。

「……王女殿下は青竜公閣下と仲睦まじいご様子ですな」

言ってしまってから辺境伯ははっと我に返り、

「いえっ、黒竜公閣下とのご縁を否定するわけでは……！」

と言い募ったものの、スメラギが高段に視線を奪われているうちに弁解は無理かと悟って娘とともに立ち去った。

取りつく島がないような凶悪な顔をしていたつもりはない。辺境伯が言ったことに衝撃を受けたわけでもない。

ただ一瞬、ちらりとこちらに視線を向けたシリスから目が離せなかった。

シリスが王女の手を取ってこちらを見たときに浮かべた一瞬の笑み。

言葉にされずとも言いたいことは伝わった。

――悔しかったらここまで奪りにきなよ。

「下りていらしたわ」

「まぁ、お似合いでいらっしゃいますこと……」

シリスの長身と王女の伸びざかりのすらりとした肢体。シリスの凛々しい白隊服姿と王女のやわらかさを感じさせるアーモンドの花の色のピンクのドレス。二人そろって輝かしい銀の髪

に天空神の加護を現す蒼の瞳――階段を下るその二人の姿は、そろいの人形を誂えさせたかのように似つかわしい。

やがて二人が広間に下りてくると、宰相相手のときとおなじように人が場を空けた。

先ほどの初舞踏とはちがい、次の曲はシエラだけのためのものではない。しかしみずから踊るよりも見ることを選んだ紳士淑女が圧倒的に多かった。

ぽっかりと空いた広間の中心で二人が向き合い、片手をたがいの背と肩に回して曲がはじまる。

シリスの円舞の腕前など、見るまでもなく知っている。

シリスを見つめる王女の瞳だけ見て、スメラギは感嘆の息を漏らす出席者の裏を抜けて広間を後にした。

曲が終わり、拍手喝采が沸き起こる中、シエラは肩で息をくり返しながら、きっ、とシリスを睨みつけた。

（いじわる……!!）

初心者のシエラを気遣って落ちついたリードをしてくれた伯父とは裏腹に、シリスのリード

は大胆だった。一歩の踏み出しも大きければ、力も強い。しかしシリスはシエラの身体がついていけるぎりぎりを知っているかのようにけっして振りまわすことはなく、ついていくだけの基礎体力も知りつくしているかのように最低限息をつく時間も与えてくれた。

見ている分には速さと迫力のある円舞だったと思う。だが舞踏会はまだまだつづくのだ。この後のシエラの体力はまったく考慮してくれない内容だった。

シエラの手を取って腰を落として口づけるシリスだが、ちらっと向けられた視線にもからかわれている気がしてさらに腹が立った。

しかし衆目を一身に浴びている状況で言えるはずもなく、

（席に戻ったら母さまと伯父さまにシリスがひどいって言うから……！）

微笑を浮かべながら眼だけで睨みつけると、シリスは面白いとばかりにさらに笑みを返してきた。

あまりの疲れにシリスに寄りかかりたいのをなんとか我慢して、優美さを欠かさずに階段を上る。一曲踊っただけなのにふくらはぎが張り、階段を上るのさえ辛かった。

席に戻って一息つくと母は実に嬉しそうに訊いてきた。

「とても伸びやかに踊っていたわね。楽しかった？」

「……楽しいというか、はらはらしっぱなしでいつくずれ落ちるかと心配だったわ」

「そんな風には見えなかったわよ。それになにかあってもシリスが助けてくれるでしょう？」

（くずれ落ちそうになるまで振り回した超本人なんですけど!?）

「せっかくあれだけの場所があったので、広く使わないとと思いまして」

しかしそうしれっと告げるシリスと、「若さの特権だね」と手放しで誉める伯父にそれ以上なにも言えず、

（ちゃんと見られる舞踏になっていたのならそれでいいけどね……）

と、シエラは給仕に水を頼んで喉の渇きを潤した。

そして四曲めの舞踏に入っている広間をあらためて見回すと、スメラギの姿はなかった。

（あれ？　隊長はどこ？）

先ほど立っていた壁際にも、踊っている中にも姿はない。出席者の中で竜騎士団の黒隊服を着ているのはスメラギだけ、それにあの黒髪と長身を目印にすればすぐに見つかるはずなのに。

視線をさまよわせるが、スメラギの姿も、先ほどスメラギに声をかけていた紳士と令嬢の姿もない。

（え、どこに行ったの？　……まさか一緒にどこか行っちゃった……？）

「こーら、不安そうな顔しない。きょろきょろしない」

「でも……」

「まだお仕事中だよ。ほら」

シリスに促されて正面を見ると、階段の下に列をなしている人たちがいた。彼らは階下にい

た典礼官と打ち合わせをしていたが、やがて一組の夫妻が階段を上ってきた。
（あ、あの人見覚えがあるわ。アシュア皇子との会食にいた人……侯爵かしら）
夫妻は女王の前に来ると深々と一礼して挨拶を述べた。次いでシエラに向きなおり、爵位とお披露目の祝辞を述べてゆく。シエラが席に着いている時機を見計らって挨拶に来たようだ。
スメラギの行き先が気になったがその挨拶は途絶えることなく、広間では何曲もの円舞曲が演奏されていた。
（隊長、もう戻ってきた？　それともう誰かと踊っちゃった……？）
しかしスメラギを探すために貴族たちから視線を外すことも微笑を絶やすことも許されない。笑顔を面に張りつけたまま、心の中で不安ばかりが膨らんでゆく。
侯爵からはじまった挨拶が、伯爵、子爵、辺境伯と身分が下ってゆき、おなじ言葉ばかりをオウムのようにくり返して何度めのことだったか、傍らにいたシリスが不意に典礼官に指示を出した。
そして階段を上る人の列が止まると、「おいで」とシエラを促す。
「え、でも……」
まだ階下では順番を待っている人たちがいるというのに。
だがシリスが人の話を聞かずに先に立ちあがって一礼したのでシエラもそれに倣い、シリスの手を取って高段の脇の扉から退出する。

そのまま扉を二つ越え、控えの間に入り、シリスは向きなおって告げた。
「ゆっくり呼吸、できる？」
言われてはじめて気がついた。ずっと席についていただけなのにいつの間にか息が上がっていて、肩で呼吸をくり返していた。
シエラは胸元を押さえて落ちつかせようとするが、意識すればするほど息が苦しくなる。
そんなシエラの頬にシリスが手のひらを当てる。その手は指先が冷えきっているわけでもないのに冷たく感じられた。――それは自分の頬が熱を持っているせいだ。
体調をくずしたのかもしれない、そう思ったが、「でも、もどらなきゃ……」とシエラは視線を背後に向けた。
この扉の向こうには、まだ自分に挨拶をするために列をなしている人たちがいる。自分にとっては大勢でも、一人一人にとっては王女に拝謁する一度きりの機会だ。
しかしシリスは手のひらを離さず、椅子に腰かけるように促し、抗えないままシエラは腰を下ろした。
「いまの君をあの場所に戻すわけにはいかない。わかるね？」
そう告げると、頬に当てていたシリスの手の指先がシエラの眦をなぞる。
そのときシエラは初めて気がついた。涙がにじんでいたことに。
「どう、して……」

「疲れたんだよ。心がね」
「心……？」
「ちょっと長く王女でいすぎたからね」
そう言ってシリスはシエラの頬を撫でる。優しいぬくもりのあるその手はとても心地よかったが、その言葉はよく理解できなかった。
自分がシエラである以上、舞踏会の席で王女としてふるまうのは当然のことだ。
（それをなんて？　長く王女でいすぎたから……？）
「……言っている意味がよくわからないわ」
すると「俺も大概だけど、君もわがままだからね」とさらに理解に苦しむ言葉を返された。
「――君はあいつの前ならルーシェでいられるのかな」
「え？」
シリスがあいつと呼ぶのはただひとり――スメラギだけだ。それはわかったが、ルーシェでいられるというのはどういうことなのだろう？
「あいつの前なら、普通に息ができる？」
それならわかる。そしてシエラはこくりとうなずいた。
スメラギの姿が見たい、側にいたい、声が聞きたい。
他の誰かと一緒にいるところを思うだけで心が渇いて、水を求めるように息をくり返して、

それでも得られないと呼吸が苦しくなってくる――まるでシエラでいるときのように。
「じゃあ頑張った君にご褒美をあげる。俺からの誕生日プレゼントだ」
「……プレゼント？」
「この部屋の中庭に素敵な薔薇園があってね。今がちょうど見ごろなんじゃないかな」
「薔薇園ならいま行かなくても明け方のほうが……」
夜露に濡れた薔薇が芳しい香りを放つのは明け方だ。
「いいから夜風に当たってきなよ。いまなら誰の目もないからね」
シリスにしては噛み合わない返答だと思ったとき、シエラの脳裏でなにかがつながった。
（あっ！　もしかして……！）
「ただし本っっっ当に馬鹿だからね、はっきりきっぱり言わないと伝わらないよ」
そうとう『馬鹿』に気合いが入っていた気がしたのは聞きちがいだろうか。
しかしシエラは「ありがとう！」と顔を輝かせると、ドレス姿であることも忘れて庭に向かって駆け出した。

広間を出たスメラギは小役人に案内された一室に入った。

舞踏会を催す広間の脇にはかならず休憩を取る場所が設けられている。踊り疲れた者、意気投合して語らう者、ドレスの締め付けが苦しくて昏倒する者――使い道はさまざまで、使える部屋も身分に応じて異なっている。

小役人の先導に付いてずいぶん遠くまで案内されたが、通されたその部屋は黒竜隊の執務室程度の広さがあった。何十人入ろうとまだ余裕があるが、自分は竜公だ。だれかと相部屋になることはまずない。

ひとりでいるにはあまりに広いその部屋のソファーに深く身を埋めたスメラギは、換気のために開いたままになっていたのか、窓から吹きこむ薔薇の香りに気がついた。

その香りで呼び起こされたのは、竜公叔爵のときの記憶だ。

まぶしい光に照らされた中庭に今が盛りとばかりに咲き誇っていた数々の薔薇。山風がいくら吹き下ろそうとも香りは飽くことなく放たれて失われることなく、これが王宮かと驚いたものだ。

そして膝をついて訪れを待っていた自分の前に現れたのは、女王だけではなかった。

王女シエラ――病弱だと噂されていた彼女が、初めて公の場に姿を現したのだ。

女王代行として自分に聖杖を授けたときの言葉は、いまも鮮明に思い出すことができる。

『天空神ローレンス、太陽神アルシェス、この聖杖を手にしてきた歴代の竜公、そして天におわします我が父よ――新たな聖竜の主、黒竜公の誕生を嘉したまえ』

遅咲きの薔薇の中で聞いた声は、竜騎士団で聞いていた声とはあきらかにちがっていた。背筋をすっと伸ばし、細いながらも堂々とした揺らぎのない声――あの声なら皇子アシュアが来たときに耳にしていたはずなのに。

『替え玉なんかじゃない。ルーシェが王女なんだよ』

昨日、シリスに言われたときはまだ半信半疑だった。しかし昨夜、聖殿で神事を見て受け入れざるを得なくて、今日、広間の高段で女王や宰相、シリスと気安く語らう姿を見て、彼らが彼女の家族なのだと――彼女は本当に王家の人間だったのだと納得せざるを得なかった。

舞踏会で見せた優雅な物腰もまた騎士団にいたときとはまったくちがい、ダンスは苦手だと言っていたのに披露された舞は実に立派なもので、まるで別人を見るかのようだった。

（やればできるんじゃないか）

いや、やればできる娘であることは知っていた。妙に王女役が板についた娘だと思っていた。しかしまさか王女があんなに屈託なく拗ねてへこんで泣いて笑うなど想像もしなかったから、彼女が本物だなんて思いもしなかった。

王女シエラは王宮でかしずかれて暮らしているのだと信じていた。父の死に傷めた心を癒しながら、薔薇に囲まれて心穏やかに過ごしているのだと――それが王宮を離れて地方で伸びやかに育ち、結果的にあんなウサギができあがっていたなどと誰が想像できよう？

――しかし彼女は王女だ。

苦い現実に突き当たり、スメラギは眉をひそめた。
夜気にでも当たろうと庭に出ると、黄色やピンク色の薔薇が篝火に照らされていた。薔薇にまったく興味のないスメラギはその品種がなんなのかわからなかったが、王女の銀の髪に添えられていた花に似ていると思った。
竜公として国と王家を守る。その意志に変わりはない。ただ、自分の手で守れると思った貴族の娘、ルーシェ・リヴェアはもうどこにもいない――その現実が重い。
――悔しかったらここまで奪りにきなよ。
思い出すシリスの挑発の目。しかし彼女はいま眼前にある薔薇とおなじく、容易に手を伸ばせるような相手ではなかった。
薔薇の茎を取り囲む刺。それは手折る自分を阻む『王女』という名の刺だ。
彼女は自分が守ってやれるルーシェとはちがう。ルーシェとおなじように手を伸ばせるはずがない。
『――隊長』
脳裏に響くもう存在しないはずの声。
忘れろと首を振って言い聞かせるが、それでも聞きたいとわがままな心が叫ぶ。
もう一度、もう一度だけあの声を聞くことができたなら、きっと自分は――

「隊長……!!」

その声音に鼓動が跳ねた。幻聴にしてはあまりにあざやかな声だった。

まさかと思って王宮をふり返り、スメラギは目を見開いた。

目に飛び込んできたのは、王女シエラが露台を駆けてくる姿だった。

(王女、なのか……?)

ドレスを鷲づかんで走る姿は先ほどまでの優美さがない。そしてあの声は自分のよく知るものだ。

――――ルーシェ。

その名を呼ぼうとスメラギが口を開きかけたとき、

「あ……っ」

声を上げるが早いか、つまずいた彼女は体勢をくずし、見事に――――こけた。

(見つけた!)

シリスが告げた薔薇園の露台に飛び出すなり、シエラは叫んだ。

「隊長……!!」

シエラは露台の石畳を駆けながら、その距離を埋めようと必死に叫ぶ。

あらかじめ呼び出されていたのか薔薇園で佇んでいたスメラギは、自分の姿を目に留めると信じられないものを見るかのように目を見開いた。

（隊長がいる!!）

シエラは一時も早く側に行きたくて足を力強く踏み出すが、ヒールの爪先がなにかを踏んだ。

（う、わ、わ……っ）

二、三歩、つんのめる形でよろめいて、シエラは露台の大理石に両手をついた。

（こっ、こけた～～～～～～!!）

露台の上は掃き清められていたし、ドレスが破れた様子もない。大理石の床についた手も白手袋をしているので傷もないが、全体重を支えることになった手のひらがじんじんと痛みを訴えた。

（でも痛がっている場合じゃ……！）

シエラはすっくと立ち上がると痺れる手でスカートを摑み、スメラギに向かって駆けだした。

スメラギはいったい何が起きたのかと呆然としていたが、駆けてくるのが王女だと認識してはっと我に返り、反射的に膝をつこうとした。

「待って！　話を聞いてください……!!」

口調はルーシェだが恰好はシエラのままだ。スメラギはとっさに周囲を見渡した。他人の目がないことを確認したのだ。王女シエラがこのような口調で話しているのを他人に見られてはまずい。

（けれどいるはずがない）

シリスが与えてくれた場所だ。警固の姿は見えないが、この薔薇園には何人も立ち入れない。どこかで人の訪れを阻んでいるはずだ。

「誰も来ません。シリスがくれたんです。誕生日プレゼントに、この場所を」

スメラギの許に駆け寄って、切れる息の合間からなんとか言葉を紡ぎ出す。

するとスメラギは、痛い箇所を突かれたように眉をひそめた。痛かったのはきっと『シリス』の一言だ。自分は王族であり竜騎士団長でもある彼を呼び付けにできる立場なのだと――王女であることを突きつける一言だったから。

（でももうごまかしちゃいけない）

「わたし、隊長にお話ししなくちゃいけないことがあるんです」

その言葉にスメラギは、部下であり王女でもある自分とどう接したものか言葉を選んでいたが、やがて「――なんだ」と告げた。

（隊長だ……）

ルーシェに向けられた言葉を聞くのは何日ぶりだろう。それほど日は経っていないはずだが、

この声にたどりつくまでの道のりがあまりに遠くて泣きそうになった。
けれど泣いているときではない。
シエラは痛みを訴える拳をぐっとにぎりしめてこらえた。
「わたし、隊長にお伝えしないといけないことがあって、でもずっと言えなくて、遅くなって、ごめんなさい」
シエラの恰好のままルーシェとして頭を下げる。耳元で耳飾りが揺れる。
それはルーシェに贈られたものだ。王女である自分がつける資格はないかもしれない。
（けれど、でも）
見習い騎士である自分も王女である自分もおなじ人間でおなじ心の持ち主だと、そう伝えたかった。
「――謝られたところで」
身を削るようなスメラギの声に、シエラははっと面を上げた。
「俺はまだ、おまえが何者なのかをおまえの口から聞いていない」
聖殿でも、広間でも、自分は王女だった。もう王女シエラであることはわかりきっているだろうに、スメラギは自分の口から聞きたいと言う。
（まだ、信じられないから……？）
叱ってばかりいた従者が命を賭して仕えるべき王女だったなどと、信じたくないのかもしれ

ない。

信じたくないのも無理もない。そしてその名を名乗ったところで自分には誇れるものなどなにもない。その名にふさわしいだけの自分がない。

（――それでもこの名は、私が生涯負っていくべきものだから）

シエラは鼓動の高鳴りを感じながら、その言葉を紡ぐために細く息を吸った。

「わたしの名は……シエラ・アーシェラータ・ローレンシ――」

最後まで聞かずにスメラギは膝を折ろうとし、シエラはとっさに叫んだ。

「やめてください！　話を聞いて！」

だがなにも聞こえていないかのように膝を落としかけるスメラギにシエラは叫ぶ。

「ルーシェを殺さないで……!!」

思いがけない一言に、スメラギは伏せかけていた視線をはっと上げた。

「たしかにわたしは王女です！　けれどわたしはわたしなんです……！」

もし竜騎士団に戻ることができず、スメラギにシエラとしてしか見られなくなったなら、それまでいた〈ルーシェ〉はどこに行ってしまうのだろう？　そのような者は最初からいなかったのだと切り捨てられるのだろうか。それはスメラギの心の中で殺されるのとおなじことだ。

スメラギの中からルーシェがいなくなったらいま自分の心に棲まうこの想いはどこにいけばいい？　この想いも、ルーシェと共にすべて死んでしまうのだろうか。

「わたしが王女であるのは本当です！　でもわたしがルーシェであったことも全部本当なんです……!!」

竜騎士団でルーシェでいた日々を――自分が唯一認めてもらえたことを、失いたくない。ありったけの声で叫ぶと涙がこぼれて、泣いている場合ではないとわかっているけれどもこらえられず、腕でぬぐいながらシエラは言葉を継いだ。

「――わたし、王女なのに母様みたく威厳はないし、シリスみたく賢くもないし、父様や母様やシリスみたく聖竜を授かったわけでもないし、授かったルーも全然育たなくて、王女だからって全然なにもできない子で、そのことを誰も責めなかったけれど、王女の務めを果たせない自分がずっと、苦しかったん、です」

ただ王女として生を享けただけの娘。それがスメラギが剣を捧げて守ろうとしていた王女の実体だ。

誓いを捧げた王女がこんな相手かと失望されたくなかった。だからずっと言えずにいた。今もこうしてなにもできない自分を晒すのはつらい。けれどもこれが本当の自分だ。

飾って、偽るのはやめにしよう――そう決めたから、この痛みは自分が負うべきものだ。

「わたしは王女に向いていないのかもしれない、そうとも思いました。でももし向いていないのだとしても、せめてルーを大きくして母様の娘として生まれた務めは果たしたくて、シリスに相談したら身分を明かさずに一貴族の娘として竜騎士団で頑張っておいでって言われて。…

…王女って肩書きをなくしたらわたしにはなにもなくて、ただ頑張ることしかできなくて、でも竜騎士団で頑張れたらなにか変わるんじゃないかって——結局ご迷惑をかけてばっかりでしたけど、でもルーシェでいるのはとても楽しくて、息苦しくなかったんです」

立派な王女でいなければ。そう思えば思うほど息が苦しくなって泣きたくなった。

どうして自分はちゃんとできないのだろう？　絶対になにかが足りていないはずなのに、しかし女官もシリスもなにも言わない。誰もかもが自分を腫れものに触るように接して、なにかが足りていないのになにが欠けているのか自分でもわからないまま、ひとりでもがくしかなかった。

「やっぱりわたしはなにもできないままでしたけど、王女でもなんでもないわたしの側にいてくれるって言っていただけたこと、本当に嬉しかったんです。だからずっとルーシェとして側にいたくて……王女だって言えませんでした……ごめんなさい」

あらためて頭を下げると、それから長い沈黙があった。

（怒ってる……？）

ずっと嘘をついて、裏切っていたのだから当然だ。

なにを言われるのだろう、そんな不安で胸の中はいっぱいだった。

（でも、聞かなきゃ……ううん、聞きたい）

ふざけるなの一言で立ち去られてもしかたのないことをした。それでも怒りでもなんでも聞

かせてくれるというなら、ちゃんと聞かなければ自分は前にも後ろにも一歩も進めなくなる。
息を詰めて待っているシエラに返された第一声は厳しいものだった。
「――それを俺に言ってどうする」
一言で切りつけられた。もう手遅れなのだと突きつけられたも同然だ。
（それでも、最後まで聞くの）
この声が聞きたくてたまらなかった。その願いをシリスが叶えてくれたのだから。
（ちゃんと、聞かなきゃ）
「俺は……」
覚悟して言葉を待つ。
「――俺は、大公になれない」
その一言はシエラの心を貫いた。
スメラギは竜公、大公となるための身分上の問題はない。ならば身分の問題ではなく、スメラギ自身が大公位を――自分の側にいることをもはや望んでいないということだ。
（……当然でしょう？　ずっと隠してきたんだもの）
怒って当然、もう面倒をみきれないと見捨てられても無理はない。その覚悟はしていた。も

う話してもらえないかとすら思っていたのだ。けれども突きつけられた現実に涙がにじんだ。

「……理由を、お訊きしてもいいですか……？」

向けてくれた優しさを裏切ったのは自分だ。理由など訊くまでもなくわかっている。

（けれど、ちゃんと訊いておかなきゃ）

自分のしたことは、ちゃんと受け止めなければいけない。

スメラギがついたため息にびくりと震えた。しかしシエラは逃げ出したくなる心を踏みとどまらせた。

「大公は王家と貴族をつなぐ要だ。異国民の俺がそんな地位に就けばかならずおまえの治世の障りになる」

だから王女の傍らにあるべきは俺じゃない、そうスメラギは告げた。

（え……それが理由？　怒っているんじゃないの？）

側にいるのが嫌になったというならわかる。しかしスメラギの表情に怒りはない。それどころかそう告げるスメラギのほうが辛そうな表情をしていた。

「そ、そんなことないです！　だって隊長は竜公じゃないですか！」

竜に選ばれた、つまりは天空神に認められた存在で、ローレンシアではなにより重要視されることだ。

しかしスメラギは「ちがう。おまえはわかっていない」とその反論をばっさり切り捨てた。

「たしかに俺もまだ御前会議にも出ていない身だ。しかし自分への風当たりは学舎にいた頃から嫌というほど思い知らされている。竜公として認められるまでにも多くの障害があったし、それでも叙爵されたのはあいつの後押しがあってのことだ。特例といってもいい。そんな俺に関われば身分社会で生きるおまえの障りになる。俺は大公になれないし、王女の側にはいられない」

――だから今までのは全部なかったことにしろ。

苦々しげに告げられた最後の一言が、シエラの心に火をつけた。

「かっ……勝手に決めないでください！」

「……なに？」

思いがけない反論にスメラギが怪訝な眼を向けた。

黙っていたおまえを嫌いになった、嘘をつきつづけられて今さら信じられるか、もう面倒を見きれない――そう言われたなら受け入れることができた――受け入れざるをえなかった。

しかしスメラギが言っているのはそうではない。

（わたしのためって？）

本心は別にあるのかもしれない。自分を傷つけないように、それらしい理由でまとめようとしているのかもしれない。

（でも王女のためなんて言われて、おとなしく引き下がるなんてできるはずない！）

「たしかにわたしはまだ貴族社会のことなんてまったくわかっていませんし、どれだけ厳しいことかわかってないと思います！」

たしかに風当たりは強いかもしれない。異国民を大公に選んだ愚かな女王だと指差されるかもしれない。

けれど困難な道だからって、そこから逃げるためにこの想いを偽りたくない。

それがどれだけ茨の道であったとしても、何人にも妨げさせはしない。

（だって）

「作りたい世を決めるのは女王となるわたしですから……！」

シエラは言い放った。

自分のためだなんてそんな優しい言葉でごまかすなんて許さない。断るつもりなら心を蹴りつけてでも納得させてほしい。その意志を込めて、きっ、とスメラギを見上げる。

しかし視線の先のスメラギは呆然とこちらを見つめていた。

（……あれ？　隊長？　どうかしたの？）

予想外の事態に、シエラは瞳を瞬かせる。

（わたし、なんか変なこと言った？）

首をひねって思い返してみるが、なにも心に反したことは言っていない。
（おかしなことも言ってない、わよ……ね？）
スメラギの理解が追いついていないのかとじっと視線を逸らさず見つめていると、やがてスメラギは、ふっと息をついた。
「……さすが生まれながらの女王様だな」
（え？　どういう意味？）
今度はシエラがその言葉の意味を考えていると、スメラギはすっと右手を差し出した。
握手を求めるでなく、舞踏を申し出るでもなく、ただその手を取るかどうかは好きにしろと言わんばかりに無造作に。
差し出された手。その手のひらの上に自分の未来が乗っている――その現実の重みにシエラはこくんと息を飲む。
だがシエラは涙に濡れた右手の白手袋を外すと、躊躇うことなくその手を取った。
（……だってこの手はわたしのものだもの）
スメラギの手に手のひらを重ねた瞬間、スメラギはすっと膝を落とした。
（え!?）
そしてシエラの右手を戴いたまま、左手を胸に当て、目を伏せる。
「――シエラ・アーシェラータ・ローレンシアに我が生涯の忠誠を」

突然の騎士の誓言に胸を突かれ言葉を失うシエラの手をスメラギは両手で戴くと、手袋をはずした指の甲に口づけた。

指からじんとなにかが這い上がる。まるで指先からなにかを吹き込まれたようにそれは心の中で暴れだした。

うち震えるシエラをスメラギは目を開けて見上げる。その目は終生の誓いを立てた相手に向けるにしては、どこか反抗的な光があった。

「――苦労するぞ」

射るように見上げてスメラギが告げる。しかしどんな困難があろうとも、この手を選んだのは自分自身だ。

「望むところです」

シエラが強く見つめ返すと、スメラギはふっと表情を緩めて言った。

「――――馬鹿だな」

「ばっ……馬鹿ってなんですか！」

（たしかに馬鹿だけど！）

それは認めるところだが、仮にも誓いを捧げた騎士がおなじ口で言う言葉ではない。

「楽に生きれば良いものを」

「わたしは全然後悔していませんよ!?」



「……いや、俺の話だ」

（あ……）

重い荷を背負ったのは自分だけではない。スメラギもだ。

竜公として自分の望みどおりに生きる――楽に生きれば良いものを、それでもスメラギは自分を選んでくれた。

後悔させません、とまでは言えない。けれども巻き込んだからには自分から絶対に手を離すことはしない。

シエラはそう伝えるためにスメラギの手を握り返すと、スメラギは驚いた顔をしたが、やがてどこか嘲るようにふと笑みをこぼし、どこか吹っきれた表情で立ち上がると、シエラの手を引いた。

「さあ、広間に戻るぞ」

（あ！）

中座してしまったがまだ舞踏会はつづいている。挨拶を終えていない貴族たちをはじめ、みなが王女の戻りを待っているはずだ。

さっきまではあの場に王女でいるのが辛かった。けれど今は。

（――この手があれば、きっと大丈夫）

シエラはスメラギの手をぎゅっと握ると、「はい！」と笑顔を返した。

終章　遅れてきた求婚者

王女シエラのお披露目舞踏会から一夜が明け、この部屋の主でありカイトの上司でもある黒竜隊隊長スメラギは、いつもどおり定時より早く出勤していた。

カイトもいつもどおり定時前に出勤して書類を整えていたが、視線がどうしても傍らにいる上司の様子を探ってしまう。

（変わりない……よな？）

カイトがスメラギと顔を合わせるのは、一昨日スメラギが謎の貴婦人に呼び出されて侍女とともに部屋をあとにして以来のことだ。

あれからスメラギは王女の神事、お披露目舞踏会と出席した――はずなのだが、なんら変わりがないように見えるのが恐ろしい。

（本当に神事にも夜会にも出たんだよな……？）

実家が貴族とはいえ、当主ではないカイトにあの日の夜会に出席する資格はない。夜会に呼ばれたのは貴族の当主ばかり、竜騎士団から他に出席した者といえば王族のシリスくらいのものだ。

だがカイトは父より、夜会には予定どおり成人を認められた王女が出席したこと、青竜公シ

リスと黒竜公スメラギが王女をエスコートしたこと、両竜公が王女との円舞を披露したことなどを聞いている。

場馴れしている青竜公シリスの円舞が素晴らしかったのは聞くまでもない。だが青竜公に連れられて一時中座した王女が次は黒竜公に導かれて広間に姿を現し、黒竜公と円舞を披露したのだという。

そして初披露となる黒竜公スメラギの舞踏もシリスに劣らぬもので、どこの馬の骨かも知れないと思っていた貴族たちのスメラギを見る目もすこし変わったらしい。

(……ということはさすがに気づいたよな?)

玉顔を拝せない竜公叙爵のときとはわけがちがう。神事に参列し、エスコートをして、さらには一緒に踊ったのだ。さすがに王女の正体に気づかなかったということはないはずだ。

しかし傍らにいるスメラギの様子はいつもどおりで、なんら変わった様子はない。

(驚いた様子もないということは、やっぱり最初からルーシェの正体に気づいていたのか?……まさかいまだに気づいていないなんてことは……いやいや、さすがにそれはないだろ。それに一昨日、隊長を呼び出したのはルーシェじゃなかったのか? ルーシェじゃないならあの侍女はどこの家の侍女だったんだ……?)

疑問は多々あるのだがカイトが切り出せずにいると、「どうした」と視線を向けられた。

その眼には特に精神が荒れた様子もない。ただ普通に二日間、竜公としての務めを果たして

きただけに見える。
「あの、私は昼から王宮に赴きますので、それまでに片付けておくものがあればと思いまして……」
「ああ、騎士叙任か。昼からで間に合うのか？　本来なら今日も休みのはずだろう？」
「はい、そうですが隊服に装具をつけるだけですから準備は昼からで十分です。……あの、隊長こそ謁見に参列しなくてよろしいのですか？」
昨日の王女のお披露目夜会は国内貴族だけ招待されたため、今日は王女シエラの成人を寿いで近隣各国から使者が来ている。
もちろん竜公も臨席しなければいけないはずだが、黒竜公であるスメラギはこうして執務室で報告書と向き合っている。
（まさか団長が知らせてくれなかった、とか？）
竜公としての大事な公務をすっぽかしたらどうなるのだろうとひやひやしていたカイトだが、スメラギはいともあっさりと答えを明かした。
「俺が御前会議に出るのは冬宮に移ってからだからな。今回の公務は辞退した」
その一言にカイトはほっと息をついた。シリスによるスメラギ社会的抹殺計画が発動したわけではないらしい。
「どうかしたのか？」

「いっ、いえ！　昼から私もルーシェも不在となると、隊長にご不便をおかけするのでは……と……」

思わずルーシェの名を出してしまい、その一瞬スメラギの眼光が鋭さを帯びた気がして語尾がたどたどしくなってしまった。

「ああ、そのことだが――」

スメラギが眼鏡を抜いて話を切り出す。その声音は事情を話すだけにしてはやけに重い。

（まっ、まさか自分が黙っていたことも知られてしまったとか……!?）

心拍数が急上昇し、見えないところに冷や汗がにじむ。

ちょうどそのとき、折よく扉をノックする者がいた。

スメラギの視線が扉に向き、カイトは内心、助かった！　と快哉を叫んで扉に向かおうとしたが、そのノックの主はこちらの返答の前に部屋に飛び込んできた。

「――おはようございます！」

（ええっ!?）

ありえないはずのその者の入室――出勤に、カイトは呆然と立ち尽くす。スメラギもまた驚きのあまりがたっと音を立てて椅子から立ちあがった。

その者は自分とスメラギが呆然と見つめる中、自分の存在に気がつくと、

「……あれ？　カイト、今日は騎士叙任でお休みじゃなかった？」

と結いあげた長い髪を揺らし、左肩に乗せたちびこいぱたぱたとともに首を傾げて問うた。
「なんでここにいるの？」

――――それはこっちが訊きたかった。

❦

一方、謁見の間に参列していたシリスはくすくすと笑みを漏らした。
（今ごろ驚いているんだろうね）
十六歳の誕生日を迎えた王女シエラは昨夜の夜会で社交界デビューを果たしたが、当人より、いまはまだ勉学に励みたいと意向が示された。
そもそも竜騎士でも十六で騎士叙任するのはよほど優秀な者のみ、通常なら十八くらいから、女性騎士はさらに遅くて二十になってからというのもざらだ。
今回の神事で王女が成人したことは認められたものの、まだ就学中ということもあり、本格的な参政は見送られることとなった。
（これで一、二年は猶予ができたかな）
しかし黒竜公スメラギが参政してくるのがこの冬からなので、そのころから王女もぽつぽつ

議会に顔を出すようになるだろう。

結果として若き王女――次代のローレンシア女王を一目見ようと意気込んでいた国使は肩透かしをくらった形だが、あくまで彼らが寿ぎを述べるべき相手は後継者を得た女王なので、女王が玉座にある以上、王女不在でも文句を言われる筋合いはない。

シリスの眼前では、朝早くから寿ぎの使者の挨拶が延々とつづいていた。

挨拶の順序、つまり序列は国の大小ではなく、ローレンシアと国交の開かれた順だ。そのため古くからつづく国が早く、新興国や国交が開かれるのが遅かった使者は控えの間で待たされる形となる。

しかし王女が不在ということで、王女に捧げられるはずだった美辞麗句がなくなった分、想定していた時刻よりは早く終わりそうだった。

（これくらいの時間なら、彼女も耐えられたかな）

昨夜の夜会で不調をきたした彼女だが、あれは彼女の幼竜と似たようなもの、つまり王女でいられるのは時間限定でそれ以上の時間は彼女の心がもたない。

もっと正確にいえば、幼竜が時間限定でしか成長できないのは、主であるシエラ――ルーシェの心がその時間分しか成長できていないからだ。

あの赤竜はいくら成竜の恰好ができるようになったといっても、主である彼女が王女としての集中を欠けばすぐに幼竜姿に戻ってしまう。聖殿の神事の最中に成竜だった赤竜が元の姿に

戻ってしまったのもそのせいだ。
（せっかくいいものを持っているんだけどね）
〈陽炎〉は〈陽〉の聖竜の持つ特殊能力、まさかその特殊能力が幼竜姿という形で発揮されていることに気づいた者は、誓約を交わした歴代の竜のすべてを管理している聖王庁の大祭司、そして竜騎士団の中では竜を溺愛するグレンくらいのものだろう。
聖竜の特性である銀の色すら隠して、あの幼竜はまだ本性を現そうとしない。それはまるで主であるルーシェの成長を待っているかのようだ。
竜の姿は主の成長の表れとはよくいったもので、あの幼竜を見るたびにこちらも焦ってはいけないのだと思い知らされる。
シエラは三つの時から十五の年までずっと記憶を封じていたのだ。封印がとけてまだ半年足らず、そんなにすぐに実年齢に追いつけるはずがない。
焦らず徐々に育てていけばいい。無理をさせて、〈ルーシェ〉として育ってきたもうひとつの彼女の心が消えてしまうほうがよほど恐ろしい。
（あいつと一緒に育ってくれればいいよ）
自分と並び立つはずのもうひとりの竜公、スメラギ。
シエラにも育ってほしかったが彼にはもっと育ってもらわないといけなかった。
彼は能力的には問題なくとも圧倒的に足りないものがある。親兄弟や親せき、血統、社会的

身分など、持って生まれなかったものを挙げればきりがないが、彼にもっとも足りていないもの――それは『根』だ。

どれだけ激しい雨風にさらされようと、大地に深く根の張った木は強い。血縁も地縁もない彼をつなぎとめるのはどこまでも翔んでゆける竜だけでは足りない。

しかしこの国に深い根を生やした王家、その末裔の王女シエラへの想いがスメラギのなによりも強い根になるはずだ。

（あいつもやっと覚悟を決めてくれたみたいだしね）

部下だと思っていたウサギが王女だと知って後ろ向きになっていたスメラギをどうやって引き止めたものか、シエラみずからがつなぎとめてくれた。くわしい経緯は聞いていないが、連れだって広間に戻ってきたときの二人の顔を見れば聞くまでもないことだった。

スメラギには身を引くなら彼女は俺がもらうと散々挑発しておいた。その上であの場に戻ってきたのだから並大抵のことで手放しはしないだろう。

彼ならルーシェを王女として成長させることができる。その手を離して翔び去ってもらっては困るのだ――この国のために。

シリスの脳裏ではここ最近ずっと警鐘が鳴りつづけ、嵐はもうそこまでやって来ていると告げている。

シエラはみずからの危険を察知する前に脳裏で警鐘が鳴るらしい。おそらく自分のそれもお

なじような兆候だ。これは竜を従わせる――誰にも為しえなかった能力を持つ聖女の遺産なのかもしれないとも思う。

「アズィール帝国ご使者」

シリスの胸中と重なるように読み上げられた国名に、謁見の間の空気がぴりっと張り詰めた。

「第一皇子、アルシェイド殿下――」

その者が姿を見せる前に、シリスは獣の気配を感じ取った。

ほどなく廊下を折れて入ってきたのは一頭のグリフォンだった。

「な……っ!?」

貴族たちがざわめくとともに、一斉に青竜公であるシリスに視線が向けられた。

竜に敵う獣はいない、グリフォンといえども竜には敵わない。そう刷り込まれているからだ。

（本当のところはどうなんだかね）

しかしその認識を利用させてもらい、シリスは大丈夫と軽く手を上げて貴族たちの動揺を収めた。

シリスの〈空〉の聖竜はこの謁見の間にこそいないが、常にシリスの意識とつながっている。万が一女王に跳びかかるようなことがあれば瞬時に翔け抜け、確実にグリフォンの首骨を噛み砕くことだろう。

女王の〈月〉の聖竜もこの場にはおらず、彼女の竜が戦っている姿など見たこともないが、

主には傷一つ負わせないはずだ。
そもそも意識を乗っ取られているとはいえグリフォンは幻獣――天空神の御遣いで、聖女の末裔である女王に牙を剝くことができるかどうかも不明だ。暗殺を試みるには不利な状況が多すぎる。やるとすればもっと確実な方法を取るだろう。
ただかわいい愛玩動物を見せびらかしたかっただけかな、とシリスは読んだ。それを示威行動や恐喝と呼ぶかどうかは人次第だ。
グリフォンに目を奪われていた貴族たちは、次いで目に入った人物を凝視したまま固まった。謁見の間に現れたグリフォン、その傍らにいたのは。
「黒竜、公……？」
誰が漏らしたものかその一言を最後に、その場は水をうったように沈黙が広がった。
（おやまぁ……）
年は十八とは耳にしていたものの。
（ここまで似ているとはね）
――黒竜公スメラギとおなじ顔がそこにあった。
スメラギとおなじ黒髪、黒目ながら身につけているのは貫頭衣、その上からは〈星読み〉のナシルが着ていたのと似た長衣を羽織っている。アズィール風の衣装は第三皇子のときも見ているが、以前とあきらかにちがうのは身を飾る見た目にあざやかな宝飾品の数々だ。

アズィールでは、来客を歓迎するときはあらんかぎりの宝玉で飾り立てると聞く。第三皇子アシュアはローレンシアの風習に合わせて装飾を抑えてきたが、第一皇子は向こうの慣習を持ち込んできた。それだけでも向こうの意図が見えようというものだ。

スメラギ当人は、服など着られればいい、寒暖の調整ができればそれで十分だという考えなので、以前装飾品を着けさせようとしたときも「なぜ必要なんだ」と突っぱねられた。

（けどラギ君も意外と装飾品似合うかもしれないね）

などと第一皇子の姿を見てシリスは思う。

第一皇子アルシェイドは、アズィールの厳しい太陽の下で育ったにしては褐色の肌をしていなかった。スメラギとおなじく白に近い。母親の血が色濃く出ているのだろう。

それでもアズィールの陽射しは強い。日焼けがさほどでないところを見ると、従軍するよりも図書庫に籠っているほうを好む性質なのかもしれないと読む。

背丈もおそらくスメラギとおなじ、毎日のように顔を合わせている自分でも服を入れ替えられれば見分けがつかない。ここ数ヶ月で数回見たばかりの貴族たちは、彼がスメラギ本人だと言われても納得したはずだ。だが、

（ぎりぎり間に合った、かな）

それがシリスの今の正直な感想だった。

シリスとて彼を実際に目にしたのは初めてだ。第一皇子が東方の顔立ちだということも聞い

ていたわけではない。だが第一皇子の母がアズィール人ではないというのは第二皇子との勢力関係から読めていたし、第一皇子の年齢と現皇帝の東国遠征の時機を考えると、東方の娘をさらって連れ帰ってきたのだろうというところまでは読める。

あとは帝国の星読みであるナシルがスメラギに接触してきたという事実を照らし合わせれば、その先の予測もできる。

スメラギがローレンシアに来たのは五歳以前、それから教会での暮らしを経て七歳で竜を授かって学舎に入り、それからはずっと王都にいた。帝国との接触は一切ない。

仮にナシルが五歳以前にスメラギと会っていたとしても、五歳の顔から十年以上経った成長後の顔を想定するのは不可能だ。たとえ両親を知っていても、親に似るとは限らない。

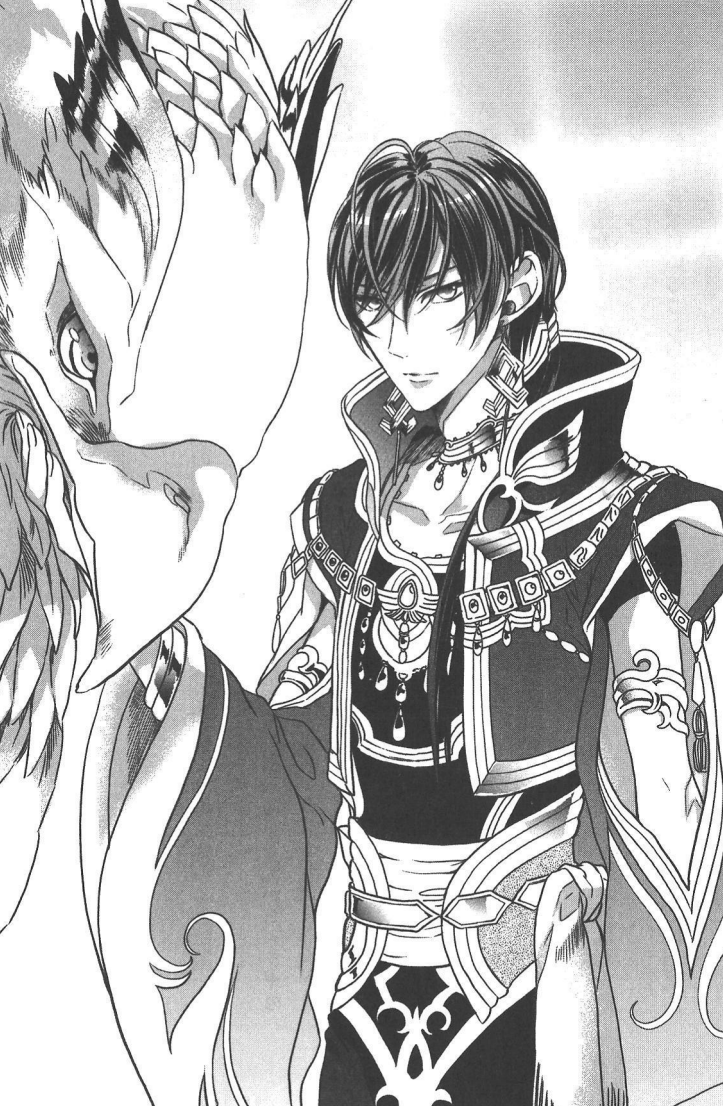
――あいつってそんなに似てるんだ？　君の知っている人と。

ただひとつ、自分が尋問したときのナシルの表情。

言葉ではごまかされたが一瞬の驚きの目、それが答えだった。

スメラギには成長後の顔を比較しうる兄弟がいると確信した。年子、もしくはおそらくもっと似ているもの――双子かと当たりをつけた。

まだ幼く後宮暮らしの第三皇子アシュアは、兄皇子とはほとんど面識がなかったのだろう。しかし年の近い第二皇子ラサルスは兄皇子の顔を見知っている。スメラギと刃を交わしたとき、なにかに意識を奪われたようだったとの報告は受けている。



スメラギ自身も気づいていなかったが、それは『顔』だ。

攫ったはずの王女を救いにきた相手が兄である第一皇子とおなじ顔をしていれば、たしかに驚きもするだろう。

と、シリスは前情報からおおよその予測はしていたものの、想像より似ていることに驚いたのは事実だ。

しかし驚きよりも先に、最悪の道筋を回避したことに安堵の息が漏れた。これがスメラギの竜公叙爵前だったならば、スメラギの運命も彼女の運命も、ローレンシアの運命すら大きく変わっていたはずだ。

謁見の間に密猟したグリフォンを堂々と連れ込み、その容姿で衝撃を与えた第一皇子だったが、その眼に優越感はなかった。淡々とした表情が、ますますスメラギに似ている。

「天空神の加護を得られましたるローレンシア女王におかれましては、このたび御世を引き継がれる王女殿下を得られましたこと、まことに祝着に存じ上げます」

第一皇子はローレンシア側の沈黙など意に介さず、鷹揚かつ優雅に一礼すると寿ぎの言を言上した。

発音は完璧なローレンシア語、そしてその声すらもスメラギとおなじで、シリスは血縁を確信した。

返答できずにいるこちらを意に介さず第一皇子はさらに言葉を継いだ。その内容にローレン

シア側はさらに言葉を失うこととなった。

「――つきましてはシエラ王女殿下をアズィール帝国の帝妃として迎え入れたくまかり越しました次第。この件、この場にてご返答をいただきたく」

あとがき

こんにちは、九月文です。

銀の竜騎士団第4巻をお手に取っていただきありがとうございます。

いつも本巻の内容説明からはじめさせていただくのですが、今回は、該当する方がいらっしゃるかどうかもわかりませんが、まずはお詫びから。

3巻の帯にありますように3巻発売当時、ビーンズ文庫の小冊子全員プレゼント企画がありました。そしてこっそりその小冊子の一部に「銀の竜騎士団」もくわえていただいておりました。

べつに私はかくれんぼをしていたわけではなく（強いていうなら「などを収録」の「など」の部分にいたということでしょうか）、インターネット環境のある方、3巻発売以降の他のビーンズ文庫をお読みの方はくわわっていたことに気づかれたかもしれませんが、拙作の既刊分や増刷分、帯やちらしのどこにもくわわっていたことは書かれていません。なので中には「こっそりすぎて気づかなかったよ！」という方がいらっしゃったかもしれません。

ですので『全プレに応募されていない、かつ、「銀の竜騎士団」掌編にご興味があった方』、

このような奇特な条件に当てはまる方がいらっしゃるかどうかもわかりませんが、「え、入ってたの？　知らなかったよ」という方には大変申し訳ありませんでした。掌編は本編に関わらない内容ですのでご安心くださいませ。

そして知らずにご応募いただいた方々。他の収録作品は言わずと知れた編集部一押し作品ばかりですので、そのおまけとして拙作を楽しんでいただければ幸いです。

さて、本巻の話にもどります。

想いが伝わり恋人となったスメラギに自分の正体を明かそうとするルーシェ。

王女としてお披露目となる十六歳の誕生日はもう目前、しかし本当のことを話す機会を得られないままルーシェの想像しない形でスメラギに正体が知れてしまい――？

ということで4巻はついに『お披露目舞踏会』のお話です。

誕生日とか舞踏会とかお披露目とか円舞曲とか、内容のわかりやすい単語をタイトル候補に入れていたはずなのですが、紆余曲折の末なにひとつ残りませんでした。

その過程は忘れましたが、最後の欠片が「画数が多いですね」の一言で消えたことだけ覚えています。誕生日、舞踏会、お披露目、円舞曲……たしかになにも見ずに書ける気がしませ

ん。

以下、本文未読の方はご注意くださいませ。

ルーシェも無事（？）十六歳となり、ひとつ大人になりました。
シエラとしては『大人の世界』で、でもやや見習いの隠れ蓑に隠れつつ、がんばっていってくれると思います。……彼女の知らないところではそれどころではないようですが。
2巻のあとがきに書かせていただいた皇子たちですが、『一巻一皇子計画』で4巻にしてやっと出揃いました。
終章のタイトルは、彼からしたら「遅れた覚えはない」と言いたいところでしょうが、私の率直な感想です。あまりに出番が遅くて今巻中に間に合わないかと思いました。
やっと最後の彼も出てきたことですし、謎はまだまだつづきますので、ひきつづきお付き合いいただければ幸いです。

さて、毎巻素敵なイラストで彩ってくださる明咲トウルさま。
まずは本巻表紙イラスト、二人がごくあたり前にいちゃついてるのがすごくいいなぁと思いました。ルーシェの髪が羽衣のようにふわっとなびいてすごく素敵で、スメラギの裾の動きと

か、表紙に収まりきらないのがもったいないくらいです。

そして眼鏡……！　どうしてルーシェが持っているんでしょうね!?　ルーシェが自分でスメラギがかけていた眼鏡を引きぬいたんでしょうか。あの表紙の撮影現場（？）であったあれこれを想像するだけでお話が一本書けそうです。

3巻挿絵では、まず敬礼しているルーシェの姿が様になっているのが印象的でした。1巻に比べて板についてきたね、成長したね……！　と感動してしまいました。

そして美麗な隊長たち……ええ、もう5隊長が勢揃いする日が楽しみでなりません。

毎巻登場する竜は、竜によって鱗のちがいまで描き分けてくださっていて、レオンファルドの青竜は氷っぽくて、鞍なしで乗るとやっぱり痛いんだろうな……とか温度とか触感とかいろんな想像が涌いてきました。

ラサルスはやっぱり腹ですよね！　なんですかあの魅惑の腰……!!　ローレンシア組はガードが固いので、アズィール帝国万歳……!!　と思わず鞍替えしそうになりました。

素敵なイラストをありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

デザイナーさま。

新緑の頃の発売時期に合わせたようなあざやかな背景色が、とてもさわやかで素敵だと思いました。タイトルの色もやわらかくてかわいいなぁと、毎巻デザイナーさまの素敵な感性にう

っとりしています。ありがとうございます。

そしてここまで読んでくださったみなさま。

ルーシェは十六歳になりやっと隠し事も解消し、未熟ながらも生まれながらの女王様の片鱗(へんりん)を見せてきました。彼女が今後どのように成長していくのか、これからも見守っていただけると嬉(うれ)しいです。

またみなさまとお会いできることを祈(いの)りつつ。

九月　文　拝

「銀の竜騎士団　薔薇香る夜のウサギの告白」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「九月文」先生・「明咲トウル」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

銀の竜騎士団　薔薇香る夜のウサギの告白
九月文

角川ビーンズ文庫　BB68-10　17395

平成24年5月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――旭印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-100275-9C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Aya KUTSUKI 2012 Printed in Japan


銀の竜騎士団
死神隊長と見習いウサギ
The Silvery Knights of Dragon
鬼隊長と見習い騎士の、
ドラゴンナイト・ファンタジー!!
九月文
イラスト／明咲トウル
ボクも出るよ!
赤竜ルー
16歳の誕生日までに、誓約の竜を大きくできないと廃嫡!?
王女シエラが授かった赤竜ルーは、いつまでたっても育たない。あと半年でルーを大きくするために、シエラはルーシェと名前を変え、身分も隠して竜騎士団に入団することに！　だけど、配属された黒竜隊の隊長ズメラギは冷徹な美貌に反しあだ名が「死神」の、冷酷無情と評判の鬼上官で……!?
①死神隊長と見習いウサギ
②王女とウサギの秘密の王宮
③恋するウサギは密猟禁止
④薔薇香る夜のウサギの告白
第5巻　2012年8月1日発売!!(予定)


第6回角川ビーンズ小説大賞 優秀賞&読者賞 W受賞!!
佐和山物語
時迷い姫と美貌の許婚の
豪華絢爛あやかし絵巻!!
九月文
イラスト／久織ちまき
戦国の名残留める世の初め。大名家の姫・あこは、なぜか三度も婚礼が延期になり、忍びで婚家に向かうことに。まだ見ぬ許婚に心ときめかせ、婚家の領地・佐和山に入ったあこだが、許婚の直継は人間離れした超美形で!?
一 あやかし屋敷で婚礼を
二 あやしの文と恋嵐
三 結びの水と誓いの儀式
四 君と別れのくちづけを
五 時の花嫁とはじまりの歌
短篇集 桜色の時はめぐり
●角川ビーンズ文庫●

第12回 角川ビーンズ小説大賞
原稿大募集!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ライトノベルの新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のライトノベル界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

【応募資格】
年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】
400字詰め原稿用紙換算で、150枚以上300枚以内

【応募締切】2013年3月31日(当日消印有効)

【発　　表】2013年12月発表(予定)

【審査員】(敬称略、順不同)
金原瑞人　宮城とおこ　結城光流

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。
■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(データ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)
■2枚目に以下の8項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)
⑧ サイトをお持ちの場合はサイトアドレス
■1200字程度(400字詰め原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

●パソコンデータ原稿の場合
・必ずフロッピーディスク、またはCD-R(ファイル形式はテキスト、MS Word、一太郎)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。
・プリントアウトは必ずA4判の用紙で、1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰めの原稿用紙に印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。プリントアウトした原稿は、必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2~3分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。

●ワープロデータ原稿の場合
・機種は問いません。ファイル形式、書式、原稿サイズ、プリントアウトに関してはパソコンと同様です。

●手書き原稿の場合
・A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可。(台紙つきの原稿は1枚ずつ切り離してください)

【注意】
・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。
・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。
・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。
・第三者の権利を侵害した作品(既存の作品を模倣する等)は無効となり、その場合の権利侵害に関わる問題はすべて応募者の責任となります。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19
(株)角川書店　ビーンズ文庫編集部「第12回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784041002759

ISBN978-4-04-100275-9
C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

1920193005141

BEANS BUNKO

銀の竜騎士団
薔薇香る夜のウサギの告白

九月 文

王女シエラの成人の儀。失敗すれば廃嫡の、運命の日が訪れる!!
シエラは身分を隠し、竜騎士団で修業中。片想いが実って黒竜隊の隊長スメラギと両想いになれたけど、「見習い騎士ルーシェは、王女シエラなんです」のひと言が言えないまま。告白のタイムリミットは目前に迫った16歳の誕生日まで! それなのに、初デートでも大ゲンカをしてしまい!? 隊長に、こんな形で正体を知られるなんて——竜騎士見習い、ついに卒業!?